年　　報

－昭和62年度－

VOL.6

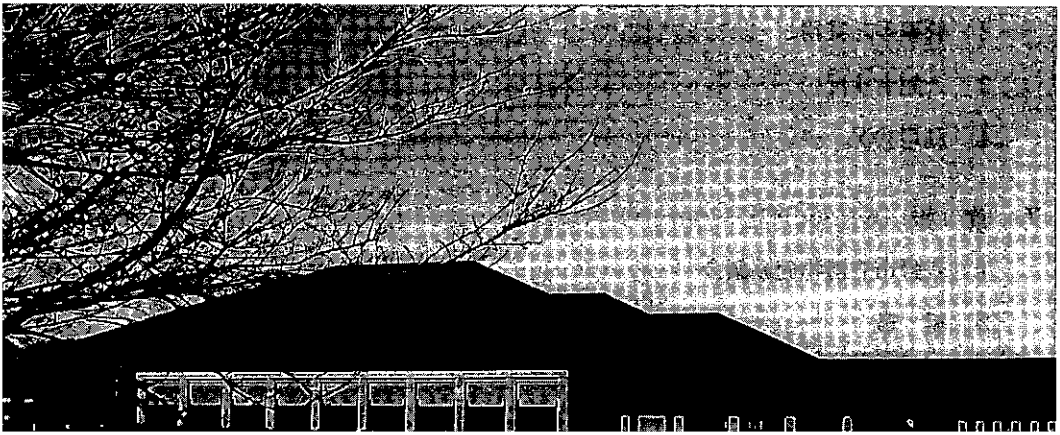
平成元年1月

序

長野市立博物館の昭和62年４月から昭和63年３月までの活動と、利用の状況をまとめ、ここに年報第６号を発行します。

平成元年１月

長野市立博物館



1　長野市立博物館一年の歩み……1
2　茶臼山自然史館一年の歩み……2

II　事業報告……3
1　展示活動……3
2　天体学習室……20
3　調査研究収集活動……22
4　教育普及活動……33

III　博物館収蔵資料……39
1　購入資料……39
2　寄贈資料……42
3　寄託資料……55

IV　博物館管理・運営……56
1　昭和62年度歳出予算概要……56
2　管理委託業務……56
3　入館者状況……57
4　利用状況……61

V　彙　報……62
1　長野市立博物館協議会……62
2　組　織……63

VI　講演会収録……64
弥生文化の波及と定着……64

Ⅰ　博物館日誌

1　長野市立博物館1年の歩み

月1日　長野市埋蔵文化財センターが発足し、学芸員3名が博物館より転出、職員2名（石坂きよ・中島龍吾）が着任

月4日　朝、公園内でウグイスの声が聞こえ、春を告げる

月7日　常設展示室1階「シナノの誕生」コーナーに保存修理を完了した素環頭大刀を展示

月10日　好天気が続き、レンギョウやコブシは満開、桜も咲き出す

月16日　冷え込みが続き、途中まで咲いた桜が茶色に変色している

月19日　「昭和61年度新収蔵資料展」開催（5月24日まで）

月24日　東部町公民館職員来館

月25日　中野市歴史民俗資料館より化石をレプリカ作製のため借用

月26日　公園内の木々の芽吹きが美しくなってきた

月27日　中野市より借用のレプリカ完成

月29日　上田市立博物館より前年度借用のレプリカ完成

月30日　松代町金井山南斜面に山火事があり、3haを焼失

月3日　東アジアの歴史を考える会一行60名来館

月4日　ゴールデンウィーク中最高の人出でにぎわう（1101人）

月9日　記録的な少雨で、県内では山火事が多発、四賀村では40haも焼失

月18日　日中友好協会県支部の婦人部一行来館

大三氏来館

6月12日　弥生時代遺物調査のため、飯山・豊田方面出張（副館長・山口）

6月13日　プラネタリウムコンサート開催

6月15日　市議会産業教育委員会に副館長出席

6月16日　茶臼山地層標本作製のため、地層の剝ぎ取り作業実施（～17日まで）

6月21日　守口市教育委員会一行8名視察・自然講座開講

6月22日　十日町市博物館へ取材のため出張（副館長・山口）

6月25日　社会教育委員会に副館長出席

6月28日　豊田村故神田五六先生宅に企画展資料借用のため出張（副館長・山口）

6月29日　日本博物館協会総会・評議員会のため館長東京に出張

7月4日～14日　夏の企画展資料借用のため県内及び県外へ出張（副館長・大蔵・中島）

7月10日　日本博物館協会北信越支部総会のため、庶務係長が福井県に出張

7月19日　企画展「稲を伝えた人々ーその生活と墓制ー」開催（8月30日まで）

7月26日　考古学講座開講

7月28日　明治大学大室調査団来館・博物館実習生3名受入（8月3日まで）

8月7日　市内民俗調査開始（芋井軍足・檀田）

8月9日　企画展記念講演会「弥生文化の波及と定着」（講師　神村透県史編纂委員）

8月14日　お盆2日目で終日にぎわった

8月21日　大室古墳群の調査終了

8月23日　民俗講座開講

めた
10月３日　ソ連大使館２等書記官Ａ.Ｖ.クリヴツォフ氏ほか一行来館
10月４日　特別展「森の文化」開催（11月23日まで）
10月７日　群馬県群馬町教育委員会一行視察
10月８日　奈良国立文化財研究所佐原真氏来館
10月10日～11日　公園内で古戦場祭り開催
10月13日　山口副館長がオリンピック招致委員会に出向、平林社会教育課長が副館長兼務
10月15日　長岡市博物館一行視察
10月18日　自然教室開講
10月23日　佐久市教育委員会一行視察
10月24日　プラネタリウムコンサート開催
10月27日　博物館協議会開催
10月29日　札幌開拓記念館職員２名視察
11月14日　天体教室開講
11月15日　特別展記念講演会「松林の盛衰記」（講師　只木良也信州大学教授）
11月26日　社会教育委員会に庶務係長が出席
11月27日～29日　特別展借用資料返却
12月４日　プラネタリウム冬の番組「天の川の秘密」投影開始
12月15日　博物館消防訓練実施
12月28日　仕事納め
１月５日　仕事始め
１月17日～23日　館内くん蒸のため休館
２月４日　岐阜市職員視察
２月５日　尖石考古館長来館
２月21日　企画展「子どもの生活誌」開催（月27日まで）、特別展示室で機織りの実（３月末までの土・日曜日）
３月２日　福岡市立少年科学センター所長ほ２名視察
３月５日　プラネタリウム春の番組「宇宙をえた人たち」投影開始
３月10日　博物館協議会開催
３月13日　企画展記念講演会「子どもの生活誌（講師　倉石あつ子県史編さん委員）
３月16日　市議会産業教育委員会に庶務係長席
３月17日　国立科学博物館の本田省二文部技来館
３月20日　親と子の手づくりおもちゃ講習会講
３月23日　四日市市教育委員会文化室長視察
３月26日　朝方より雪になり、春の大雪とな
３月29日～31日　企画展借用資料返却

2　茶臼山自然史館１年の歩み

４月１日　工藤幹雄が退職、後任に小池清典が着任
４月10日　市内新任校長30名来館
４月20日　市内新任教頭26名来館
５月７日　小諸市職員２名視察
５月10日　地質教室開講
５月26日　「化石のふるさと」コーナーにシンシュウゾウのレプリカを作製展示
５月28日　長野市内理科専科教師27名来館
６月28日　南極の岩石・キラウェア火山の石・マンダ湖の砂・宮古島のサンゴを受入収蔵
７月26日　企画展「茶臼山の地すべり」開催（10月25日まで）
10月22日　土尻川砂防事務所職員２名来館
10月25日　地質教室開講
11月15日　十日町市博物館一行21名来館
12月27日　バイソン、オオカミの頭骨展示
１月27日　野尻湖博物館学芸員及び信州大学学部地質学教室熊井久雄氏来館
３月15日　本館より松代のボーリングコア搬

II 事 業 報 告

1 展 示 活 動

1) 長野市立博物館常設展示

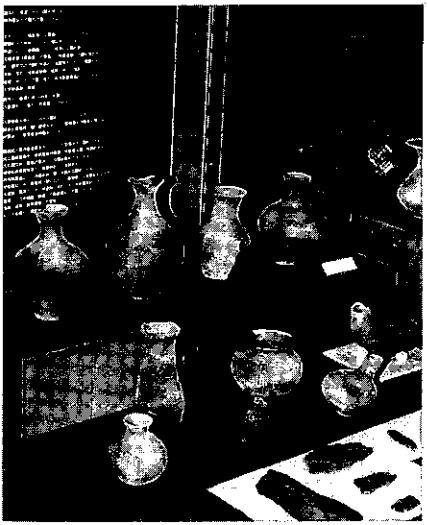
常設展示室における展示の構想、構成等は開館以来基本的には変わらないが、必要に応じて、随時追加更新を行っている。本年度は2件の資料を追加した。

●「稲作のムラ」コーナー

市内新諏訪町遺跡出土弥生中期土器を塩崎遺跡群伊勢宮遺跡21号木棺墓出土一括土器（10個体）と展示替えをした。この資料は企画展「稲を伝えた人々」にて、展示公開したもので企画展終了後に常設展示室に展示した。

●「シナノ（科野）の誕生」コーナー

市内若穂保科和田東山出土の素環頭大刀と内反大刀の2口（依田ノブ・依田修一両氏寄託資料）を展示した。この2口の大刀は昭和44年に市指定文化財となったが、未公開であったため、保存処理を施した後、展示公開した。



伊勢宮遺跡出土の一括土器

素環頭内反大刀ほか

2) 茶臼山自然史館常設展示

常設展示室の構想・構成は基本的には変わらないが、分館においても必要に応じて、随時追加更

採集された資料を一般に展示公開するために企画した。

(3) 展示構成と内容

① 考古　土口将軍塚古墳・地附山古墳群・吉田高校遺跡・三輪遺跡の埋蔵文化財発掘資料を一堂に展示。

② 民俗　衣・食・住・生産・生業・信仰・娯楽・交通・交易などのコーナーに分けて展示した。

各部門の内容については年報Vol.4、5を参照願いたい。

(B) 第16回企画展

「稲を伝えた人々ーその生活と墓制」

(1) 期間　昭和62年7月19日～8月30日
（実質開館日数37日）

(2) 出版物　A2判多色刷ポスター
A4判両面刷二ツ折パンフレット
B5判展示図録50頁
頒価 500円

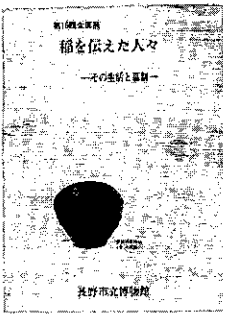
(3) 趣旨　昭和60年、長野市篠ノ井の塩崎遺跡群伊勢宮遺跡より、弥生時代中期初頭の住居跡と墓址群を発見した。墓址群は弥生文化波及期における木棺墓で、東日本で初めての発見であった。

近年、日本列島本州北端の地まで弥生文化が急速に伝播していった事実が次々と明らかになってきた。内陸信州の地でもこれまで考えられていた以上に早い段階から弥生文化が伝播波及し、浸透していったことがうかがえる。弥生文化をたずさえた人々が善光寺平の広い沖積地の自然堤防上に根をおろし、後背湿地に水田を開いた姿が想像できる。

信州で早くも弥生時代初期に墓制として

収蔵資料展「考古」のコーナー

収蔵資料展「農鍛冶」のコーナー



ポスター・パンフレット・図録

木棺が採用されたということは、単に文物だけの伝播ではなく、弥生社会そのものの成立と言えるものであろう。

この展示では、弥生時代初期の墓制を中心として、信州の初期弥生社会を考える問題提起の場としたい。

(4) 展示構成

① 稲のきた道
最古の弥生土器・伊勢湾の弥生土器・信濃の夜明け

② 新しい文化と技術
稲作の定着と発展・石の工具と木工技術・鉄の道具・織布技術

③ 豊作の神とまつり
青銅器による祭祀・石製武器形の祭具・豊作を占う骨

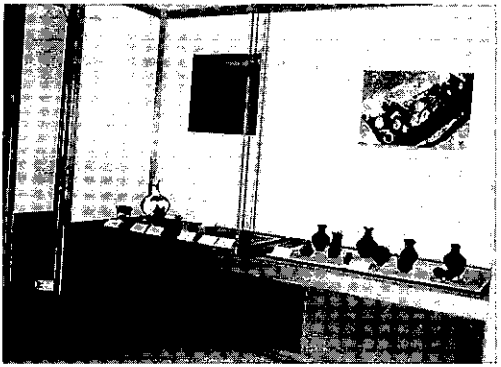
④ 墓地ー伝統と新来の墓制ー
伝統的な墓制・新来の墓制・組合せ式箱形木棺墓・墓への副葬品・母なる形の骨壺

(5) 資料点数　697点

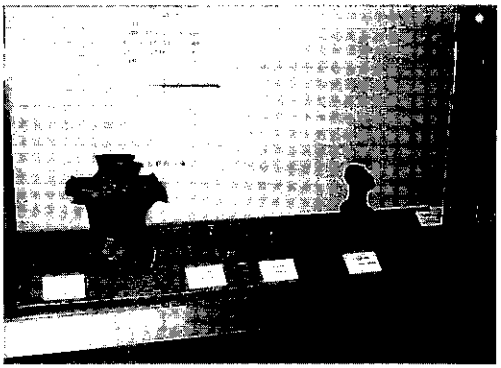
(6) 催物

講演　「弥生文化の波及と定着」
神林透氏（県史編纂委員）
8月9日

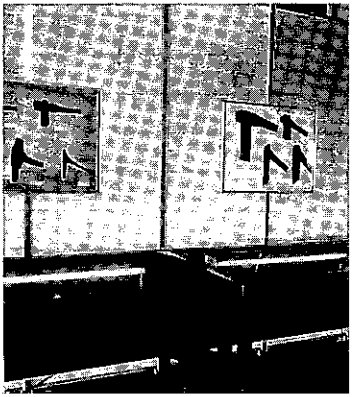
ビデオフィルム
「登呂の米づくり」
（カラー21分）
学研映画



伊勢宮遺跡木棺墓出土の土器



母なる形の骨壺



○伊勢湾の弥生土器

3	壺	2	名古屋市西区西志賀	明治大学考古学博物館
4	甕	1	〃	〃
5	甕	1	〃	〃

○信濃の夜明け

6	籾圧痕土器（縄文）	2	茅野市大字宮川御社宮司	長野県教育委員会
7	壺	1	豊丘村林里	下伊那教育会教育参考館
8	甕	1	〃	〃
9	壺	1	駒ケ根市大城林	駒ケ根市立博物館
10	甕	2	〃	〃
11	壺	1	喬木村阿島	喬木村歴史民俗資料館
12	壺	2	〃	下伊那教育会教育参考館
13	小形土器	4	〃	〃
14	壺	1	諏訪市荒神山	長野県教育委員会
15	甕	1	〃	〃
16	壺	1	塩尻市銭宮	平出遺跡考古博物館
17	壺	1	松本市出川	日本民俗資料館
18	壺	1	戸倉町芝原	共和小学校
19	注口状土器	1	戸倉町八王子山	豊城一夫
20	甕	1	〃	〃
21	椀形土器	1	長野市小島	清水尚之
22	壺	4	長野市伊勢宮	長野市立博物館
23	小形土器	4	〃	〃
24	壺	1	須坂市須坂園芸高校	須坂園芸高校
25	筒形土器	1	〃	〃
26	壺	1	豊田村荒山	神田加奈登
27	筒形土器	2	佐久市桜井町田	東京大学総合研究資料館
28	壺	4	南佐久郡臼田町月夜平	青沼小学校資料室
27	壺	1	佐久市鍛冶田	高瀬小学校
28	壺	6	長野市新諏訪町	長野市立博物館
29	甕	3	〃	〃

○石の農具

30	大形打製石鍬	1	豊田村橋詰	神田加奈登

No.	資　料　名	点数	遺　跡　名	所　蔵　者
31	小形打製石鏃	1	豊野町中新田	神田加奈登
32	磨製石包丁	3	中野市栗林	〃
33	〃	5	長野市伊勢宮	長野市立博物館
34	横刃形石器	19	〃	〃
35	西日本の穂摘み具	1	大阪市瓜破	明治大学考古学博物館
36	〃	1	京都市深草	〃
○木の農具				
37	鋤	1	箕輪町箕輪	箕輪町郷土博物館
38	田下駄	1	〃	〃
39	田舟	1	〃	〃
40	矢板	2	〃	〃
41	棒杭	2	〃	〃
○石製農耕具（伊那谷）				
42	大形石鏃	2	高森町北原	高森町歴史民俗資料館
43	小形石鏃	2	〃	〃
44	有肩扇形石器	2	〃	〃
45	穂摘み具	4	〃	〃
46	太形蛤刃石斧	1	〃	〃
47	扁平片刃石斧	1	〃	〃
48	小形ノミ状石器	1	〃	〃
○植物質食料				
49	炭化米	1	岡谷市川岸橋原	市立岡谷美術考古館
50	〃	1	長野市平柴平	長野市立博物館
○石の工具と木工技術				
51	太形蛤刃石斧	2	箕輪町箕輪	箕輪町郷土博物館
52	〃	3	長野市伊勢宮	長野市立博物館
53	〃	6	豊田村内	神田加奈登
54	柱状片刃石斧	1	箕輪町箕輪	箕輪町郷土博物館
55	扁平片刃石斧	3	〃	〃
56	〃	1	飯田市恒川	飯田市考古資料館
57	〃	4	長野市伊勢宮	長野市立博物館
58	〃	1	豊田村笠倉	神田加奈登

○織布技術

64	土器底部布目痕	3	長野市伊勢宮	長野市立博物館
65	紡　錘　車	7	〃	〃

○銅　鐸

66	銅　　鐸	1		明治大学考古学博物館

○武器の形をした青銅器

67	銅　剣（中細形）	1		明治大学考古学博物館
68	銅　剣	1	戸倉町若宮箭塚	佐良志奈神社
69	銅　鉾（広形）	1		明治大学考古学博物館
70	銅　鉾	1	長野市松節	小島貞雄
71	銅　戈（広形）	1		明治大学考古学博物館

○石でできた武器形の用具

72	石　　戈	1	松本市沢村	日本民俗資料館
73	〃	1		明治大学考古学博物館
74	石　　鉾	1	長野市松節	小島貞雄
75	石　　剣	1	松本市城山腰	日本民俗資料館
76	石　　剣（有孔）	1	諏訪市普門寺	東洋観光事業㈱
77	〃	1	飯山市堀之内	飯山市教育委員会
78	〃	1	栄村箕作ヤスンバ	神田加奈登
79	〃	1	飯山市瑞穂北和栗	東京大学総合研究資料館
80	〃	1	豊田村笠倉	神田加奈登
81	有角石器	1	茨城県勝田市西原	明治大学考古学博物館

○豊作を占う骨

82	ト　　骨	1	長野市四ツ屋	長野市立博物館
83	〃	1	更埴市生仁	更埴市教育委員会
84	刻　　骨	1	〃	〃
85	骨　角　器	16	〃	〃

○伝統的な墓制

86	再葬墓の土器	2	松本市針塚	松本市立考古博物館
87	〃	2	〃	山辺学校歴史民俗資料館
88	〃	1	駒ケ根市大城林	駒ケ根市立博物館

No.	資　料　名	点数	遺　　跡　　名	所　　蔵　　者
89	土　器　棺	1	長野市塩崎遺跡群	長野市立博物館

○新来の墓制

90	甕　棺　墓	1	熊本県御舟町	明治大学考古学博物館
91	方形周溝墓　模型	1		長野市立博物館製作

○伊勢宮遺跡における新来の墓制

92	木棺の模型	3		長野市立博物館製作
93	5号木棺墓	1	長野市伊勢宮	長野市立博物館
94	埋 葬 模 型	1		〃
95	小 形 の 壺	9	長野市伊勢宮	〃
96	小形の無頸壺	3	〃	〃
97	異 形 土 器	5	〃	〃
98	管　　玉	32	〃	〃
99	土　　偶	4	〃	〃
100	有 髯 土 偶	1	〃	〃
101	異質物の刺さった骨	1	〃	〃
102	弥生人頭骨	1	佐久市月明沢	信州大学医学部解剖学第二教室

○墓への副葬品

103	鉄　　剣	2	飯田市滝沢井尻	飯田市考古資料館
104	管　　玉	25	佐久市社宮司	伴野稀一郎
105	〃	101	中野市栗林	神田加奈登
106	勾　　玉	1	佐久市社宮司	伴野稀一郎
107	〃	2	中野市栗林	神田加奈登
108	白銅製剣形品	1	佐久市社宮司	伴野稀一郎
109	巴 形 銅 器	1	武石村下武石上平	小山　直
110	容器形土偶（複製）	1	小県郡丸子町腰越	上田市立信濃国分寺資料館
111	〃	1	松川町大島玄与原	下伊那教育参考館
112	〃	1	佐久町館	草間和幸
113	ヒト形土器	1	新潟県新発田市村尻	新発田市教育委員会
114	磨　製　鏃	2	中野市栗林	神田加奈登
115	銅　　鏃	1	中野市間山	〃

○狩　　り

116	打　製　鏃	300	中野市栗林	神田加奈登

B 5 判展示図録30頁
頒価 300円

(3) 趣旨　200万年前の人類の出現以来、森は人間に豊かな恵みを与え、人間の生存の上で深い関わりを持ってきた。

森林はそれぞれの風土に応じて、独自の生態系を生成し、森に息づく動植物たちは悠久の輪廻の中で進化発達をとげてきました。

日本列島の中央に位置する信州は(冷)温帯の夏緑広葉樹林の森林帯に属している。この森林帯はブナに代表されるため、ブナ林とかブナ帯と呼ばれている。こうしたブナ帯における山村生活・農耕文化・雪国文化などを取り上げ森と人との関わりを探る。また豊かな木材資源の利用による生活技術の創製と工夫が高度の木工芸や漆芸といった手仕事の技術を育んできた。

さらに森と人との関わりは物質文化のみならず、精神世界の面でも独特の世界観を醸成し、日本独特の精神文化形成の基礎となっている。

しかしながら、こうした森林は20世紀後半の工業技術文明の繁栄の中でまさに危機に直面している。森林はわたしたちにとってどんな意味があるか。森林の現在的意味を改めてとらえ直してみることに展示の主眼を置いた。

(4) 展示の構成

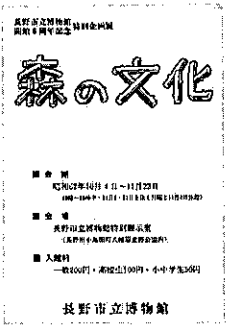
① 森林の起源

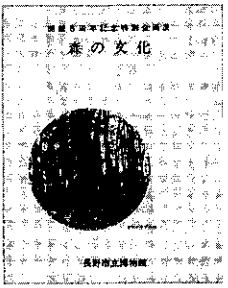
② 森の生態

ブナ林の森、豊かなブナ林の生物たち

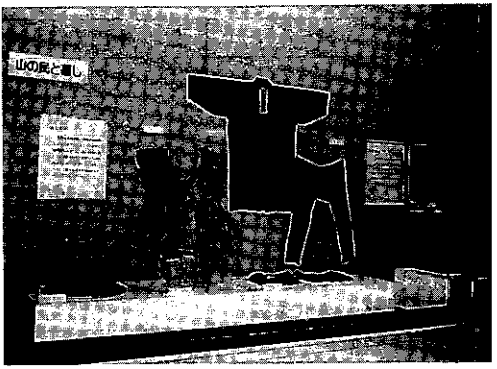
④ 森林の文化史

豊かな森とドングリ・山境の争い・善光寺の再建ー木寄せー・木曽の伐木運材今昔・佐久間象山の志賀高原開発・

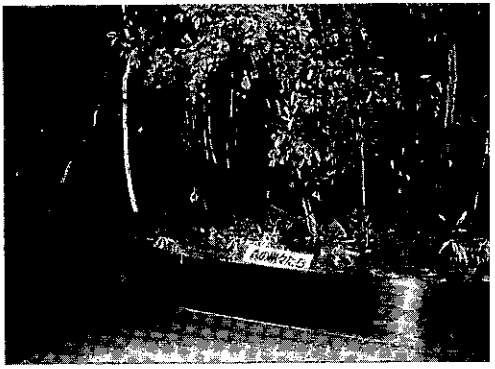




ポスター・パンフレット・図録



「山の民と暮らし」のコーナー



「森の樹々たち」のコーナー

森林浴

④　山の民と暮らし

身じたく・住まい・炭焼き・手仕事・山の神・民話の世界

⑤　木の文化

木の文化を支える職人たち・用材としての樹木

⑥　森林と自然環境の保全

(5)　資料点数　　360点

(6)　催物

講演　「マツ林の盛衰記」

只木良也氏（信州大学教授）

11月15日

ビデオフィルム

■「森が危ない

—誰が山をすてたか—」

（カラー50分）

静岡放送提供

■「志賀高原のオコジョ

—夏毛から冬毛へ—」

（カラー18分）

西沢輝紀氏・野柴木洋氏提供

■「森林は生きている

—森のおいたち—」

（カラー26分）

桜映画社製作

■「森林は生きている

—森の生物たち—」

（カラー24分）

桜映画社製作

木工技術の実演

木曽五木を割る

木曽八沢春慶檜物細工

桶づくり

曲物づくり

竹細工

「用材としての樹木」のコーナー

木工技術実演「曲物をつくる」

3	ブナ属化石	1	〃	
4	ササ属化石	1	〃	
5	ヘラシダ属化石	1	〃	
6	ハンノキ球果化石	1	〃	
7	ハンノキ属化石	1	〃	
8	カエデ属化石	1	〃	
9	ニレ属化石	1	〃	
10	ウリノキ属化石	1	〃	
△	ブナ林の森 カヤノ平			
11	芽吹き(1980. 5. 7)	1	渡辺隆一氏撮影	P
12	深　緑(1981. 8.25)	1	〃	P
13	紅　葉(1981.10.10)	1	〃	P
14	眠　り(1982. 4.19)	1	〃	P
15	秋のカヤノ平 (1979.10.10)	1	〃	P
16	〃 (1979.10.15)	1	〃	P
17	〃 (1979.10.21)	1	〃	P
18	〃 (1979.11. 7)	1	〃	P
△	ブナ林の森 鍋倉山			
19	冬　(1987.3.28)	1	渡辺隆一氏撮影	P
20	春　(1987.5.17)	1	〃	P
21	日本一の巨木（ブナ） (1987.3.28)	1	〃	P
22	ブナのコブ (1987.7.26)	1	〃	P
△	豊かな森の生物たち			
23	オコジョ（冬毛）	1	西沢輝紀氏撮影	P
24	〃　（夏毛）	1	〃	P
25	テ　　ン	1	野柴木洋氏撮影	P
26	キ　ツ　ネ	1	〃	P
27	タ　ヌ　キ	1	〃	P
28	ヤ　マ　ネ	1	〃	P
29	リ　　ス	1	〃	P
30	ム　サ　サ　ビ	1	〃	P
31	カ　モ　シ　カ	1	〃	P
32	タ　ム　シ　バ	1	和田　清氏撮影	P

36	オオカメノキ	1	〃
37	ユキツバキ	1	〃
38	オオバクロモジ	1	〃
39	ミズナラの花	1	〃
40	マルバマンサク	1	〃
■	森の文化史		
△	豊かな森とドングリ		
41	ク　　リ	1	館　蔵
42	コ　ナ　ラ	1	〃
43	ク　ヌ　ギ	1	〃
44	ア　ラ　カ　シ	1	〃
45	マテバシイ	1	〃
46	ト　チ　ノ　ミ	1	〃
47	ヒメグルミ	1	〃
48	オニグルミ	1	〃
49	土掘り具	3	〃　（旭町遺跡）
50	木の実割り	3	〃　（　〃　）
51	石　　皿	1	〃　（　〃　）
52	〃	1	〃　（宮崎遺跡）
53	トチモチをつくる	7	渡辺　誠氏撮影
△	山境の争い ―飯縄山論争―		
54	寛文八年御裁許絵図面	1	芋井仁科会蔵
55	天保13年飯縄山裁許状	1	〃
56	山論記(写)	2	〃
△	善光寺再建の木寄せ		
57	善光寺如来堂 材木木寄帳	1	霜田常雄氏蔵
58	〃 材木木寄不足帳	1	〃
△	木曽の伐木運材今昔		
59	木曽式伐木運材図会	2	(上下巻) 長野営林局蔵
60	チェーンソーで伐る	1	長野県 林業指導所蔵
61	トラックで運ぶ	1	〃
62	木曽独特の木落し	2	〃
63	伐木を いかだに組んで流す	1	〃

No.	資料名	点数	所蔵者
64	伐木をトラックに積む	1	長野県林業指導所蔵 P
65	伐木を森林鉄道で運ぶ	1	〃 P
■	山の民と暮らし		
△	身じたく		
66	スゲガサ	1	館蔵
67	ゴンゾ	1	山口　明氏蔵
68	シナミノ	1	館蔵(戸隠)
69	ヤマイショ	1	〃 (飯山)
70	モモヒキ	1	〃 (〃)
71	ミゴハバキ	1	〃 (小田切)
△	住まい		
72	中門造り 民家模型	1	館蔵
73	中門造りの農家 栄村(大久保)	1	〃 P
△	手仕事		
74	竹細工 ネマガリダケのカゴ	1	館蔵(戸隠村)
75	蔓細工・アケビのカゴ	1	山口　明氏蔵
76	樹皮細工・シナノキの袋	1	山口純一氏蔵
77	蔓細工・山ブドウの袋	1	〃
78	箕をつくる	1	館蔵 P
△	山の神		
79	山の神祭典費記帳	1	大日方長夫氏蔵
80	ハチンジュ	1	藤木孝蔵氏製作
81	弓矢	1	〃
82	山の神　掛軸	1	佐藤正樹氏蔵
83	徳利	2	〃
84	ロウソク立て	1	〃
85	山の神講で矢を天空に放つ(戸隠村宝光社)	1	松瀬孝一氏撮影 P
86	ハチンジュを持って十二講まいり(栄村極野)	1	藤木孝蔵氏撮影 P
■	木の文化と職人たち		
△	杣		
87	縦挽き鋸	3	館蔵
88	矢	1	〃

No.	資料名	点数	所蔵者
93	出荷用桶	4	館蔵
94	ヘラ	2	〃
△	刳りもの師		
95	ブンマワシ	1	山田重数氏蔵
96	ナラ	1	〃
97	ヒラガンナ	1	〃
98	オノ	1	〃
99	チョウナ	1	〃
100	ハチジュウナ	1	〃
101	マエガンナ	2	〃
102	ツクリダイ	1	〃
103	ハチノケズリダイ	1	〃
104	コネバチ製品	1	〃
△	木地屋		
105	御綸旨	2	大蔵英美氏蔵
106	〃	1	小椋一一氏蔵
107	惟喬親王御姿掛軸	1	大蔵英美氏蔵
108	ショイコ	1	小椋一一氏蔵
109	ツボガンナ	3	〃
110	センケズリ	1	〃
111	ヨキ	1	〃
112	ヨコビキノコ	1	〃
113	タテビキノコ	1	〃
114	木地の素材(乾燥)	1	〃
115	茶盆木地半製品(半割り)	1	〃 (ケヤキ)
116	茶盆木地製品(〃)	1	〃 (〃)
117	木地鉢	1	〃 (黒内朱)(クリ)
118	切盤	1	〃 (白木)(〃)
119	膳	1	〃 (黒内朱)(クリ)
120	花器	1	大蔵英美氏蔵
121	椀の製作工程	3	長野県林業指導所蔵
122	木地屋が定住して	1	大蔵英美氏蔵 P

127	イヌブナ	1	〃
128	ブナ	1	〃
129	サワグルミ	1	〃
130	オニグルミ	1	〃
131	カラマツ	1	〃
132	ホウノキ	1	〃
133	カツラ	1	〃
134	オオバボダイジュ	1	〃
135	ハリギリ	1	〃
136	ハルニレ	1	〃
137	シラカンバ	1	〃
138	クマシデ	1	〃
139	アカシデ	1	〃
140	ハンノキ	1	〃
141	コナラ	1	〃
142	クリ	1	〃
143	クヌギ	1	〃
144	ヤマモミジ	1	〃
145	ウリハタカエデ	1	〃
146	コブシ	1	〃
147	ナツツバキ	1	〃
148	ミズキ	1	〃
149	コシアブラ	1	〃
150	フサザクラ	1	〃
151	ヤマハンノキ	1	〃
152	オオヤマザクラ	1	〃
153	アズキナシ	1	〃
154	シウリザクラ	1	〃
155	スズカケノキ	1	〃
156	バッコウヤナギ	1	〃
157	オヒョウ	1	〃
158	キリ	1	〃
159	ナナカマド	1	〃
163	アスナロ(ヒバ)	1	〃
164	サワラ	1	〃
165	コウヤマキ	1	〃
166	ウラジロモミ	1	〃
167	シラベ	1	〃
168	アカマツ	1	〃
169	コメツガ	1	〃
170	チョウセンゴヨウ	1	〃
171	オオシラビソ	1	〃
172	トウヒ	1	〃
173	イチイ	1	〃
174	アラカシ	1	〃
175	シラカシ	1	〃
176	クマスギ	1	〃
177	スギ	1	〃
178	ドイツトウヒ	1	〃
179	ブナ林	1	〃
180	カラマツ林	1	〃
181	スギ林	1	〃
182	ヒノキ林	1	〃
183	アカマツ林	1	〃
△	外材		
184	スプルス（アラスカヒノキ）	1	長野県林業指導所
185	欧州アカマツ	1	〃
186	米マツ	1	〃
187	ソ連カラマツ	1	〃
188	シベリアカラマツ	1	〃
189	米ツガ	1	〃
190	米スギ	2	〃 (板目・柾
191	エゾマツ	1	〃
192	ラワン	1	〃
△	国産材		
193	ヒノキ	1	〃

No.	資料名	点数	所蔵者
194	キハダ	1	長野県林業指導所蔵
195	ミズナラ	1	〃
196	ツガ	1	〃
△	佐久間象山の志賀高原開発		
197	遺沢碑	1	館蔵 P
△	森林浴		
198	赤沢自然休養林	1	長野県林業指導所P
199	美ケ原県民の森	1	〃 P
200	森林浴適地点灯パネル	1	〃
□	森の樹々たち		
201	材幹(大)ブナ		長野県林業指導所
202	コナラ		〃
203	シラカンバ		〃
204	ウラジロモミ		〃
205	ツガ		〃
206	カラマツ		〃
207	アカマツ		〃
208	ヒノキ		〃
209	スギ		〃
210	森〈自然林〉ブナ	20	館蔵
211	キハダ	4	〃
212	コナラ	10	〃
213	ミズナラ	3	〃
214	シナノキ	3	〃
215	コシアブラ	5	〃
216	トチノキ	2	〃
217	〈二次林〉スギ	10	〃
218	カラマツ	10	〃
219	アカマツ	10	〃
220	ダテカンバ	3	館蔵

No.	資料名	点数	所蔵者
221	シラカンバ	4	館蔵
222	〈河辺林〉ヤマハンノキ	5	〃
223	サワグルミ	5	〃
224	ハルニレ	5	〃
△	森の鳥たち		
225	コミミズク	1	羽場正行氏蔵
226	カケス	1	〃
227	ヤマシギ	1	〃
228	ヨタカ	2	〃
229	キジバト	1	〃
230	オオコノハズク	1	〃
231	ノスリ	1	〃
232	ハチクマ	1	〃
233	ハイタカ	1	〃
234	フクロウ	1	〃
235	カッコウ	1	〃
236	ホトトギス	2	〃
237	ヤマドリ	1	〃
△	森の動物たち		
238	ムササビ	1	羽場正行氏蔵
239	リス	1	〃
240	ノウサギ	1	〃
241	テン	1	〃
242	タヌキ	1	〃
243	イタチ	1	〃
244	キツネ	1	〃
245	ツキノワグマ	1	〃
△	年輪		
246	千載松(アカマツ)	1	館蔵

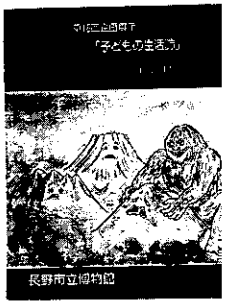
B５判展示図録48頁
頒価500円

(3) 趣旨　昔から今に至る子どもの生活を長野の事例を中心にいろいろな角度から展示する。「七歳までは神の子」と言われるように、子どもが誕生してから無事に成長するまでの間には、数多くの儀礼がもうけられている。そうした子どもたちの生活を特に子どもの遊び（おもちゃ）と子供をめぐる民俗儀礼の二つに注目し、長野における子ども文化の特性を浮き彫りにすることを主眼とする。

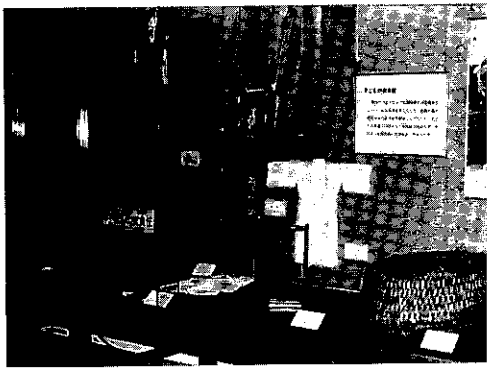
(4) 展示構成
　① 遊びとおもちゃ
　② 子どもと教育
　③ 子どもの衣食住
　④ 子どもの人生儀礼
　⑤ 子どもの年中行事
　⑥ 子どもと民話

(5) 資料点数　360点

(6) 催物
　講演　「子どもの生活誌」
　　倉石あつ子氏（県史編纂委員）
　　３月13日
　講習会　「親と子の手づくり
　　おもちゃ講習会」
　　吉沢嘉寿氏
　　（長野市育成会指導部長）
　　３月20日
　ビデオフィルム
　　「塞の神ー長野市芋井平地区の
　　伝統行事ー」（カラー20分）
　　長野市教育委員会青少年課提供
　16㎜映画
　　「幼児の遊び一今と昔ー」
　　（カラー20分）
　　長野県立図書館提供



ポスター・パンフレット・図録



「子どもの衣食住」のコーナー

天神祭ジオラ

(7) 展示資料目録 (敬称略)

No.	資料名	点数	所蔵者
■	子どもの人生儀礼		
1	明治天皇健育祈願御歌	1	虫倉神社（中条村）蔵
2	健育祈願絵馬	1	〃
3	北溪筆絹地掛軸	1	〃
4	虫切り御守札	1	〃
5	宮参り用具	3	当館蔵
6	絵　馬「乳授かり」	1	池口寺（大桑村）蔵
7	絵　馬「金太郎」	1	大宮熱田神社（梓川村）蔵
8	絵　馬「桃太郎」	1	〃
9	絵　馬「初宮参り」	1	〃
■	子どもの衣食住		
10	ツ　グ　ラ	1	当館蔵
11	産　　着	2	〃
12	普　段　着	2	〃
13	晴　　着	2	〃
14	学　童　服	3	〃
■	子どもの年中行事		
15	三月節供人形	1式	当館蔵
16	五月節供人形	1式	〃
17	押　絵　雛	4	宮沢長平（横浜市）蔵
18	七夕人形	6	日本民俗資料館（松本市）蔵
19	稚子行列衣装	1式	当館蔵
20	天神祭用具	1式	檀田子供中（長野市）蔵
21	十日夜祭具（ワラデッポウ）	2	長野県史刊行会（長野市）蔵
■	遊びとおもちゃ		
22	全国の竜人形	106	夏目隆一（長野市）蔵
23	全国の雛人形	66	〃
24	大正時代の玩具	41	田中太郎（須坂市）蔵
25	下駄スケート	4	当館蔵
26	ソ　　リ	1	〃
27	紙　芝　居	2	〃
28	カタカタ	1	〃
29	スキー用具	2	〃
30	竹　　馬	1	〃
31	幻　燈　機	2	〃
32	郷土玩具	50	宮沢長平（横浜市）蔵
33	け　ん　玉	17	宮沢秀幸（長野市）蔵
34	下駄スケート	1	池田きよし（長野市）蔵
35	野球用ミット	1	〃
36	紙　芝　居	4	〃
37	青い目の人形	1	綿内小学校（長野市）蔵
38	輪きわし	3	当館蔵

B５判展示図録16頁
頒価200円

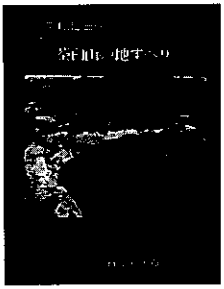
(3) 趣旨　長野市周辺地域の地すべりはこのあたりの地質と深いかかわりがあり、中でも砂岩や泥岩などの堆積岩が分布する西部山地には、過去に大きな地すべりが何回もあり、その土地の人々に大きな影響を与えてきたと思われる。

この展示では、そのうちの茶臼山付近で起こった地すべりを取り上げ、その記録を追いながら、地すべりが当時の人々に与えた影響についても概観する。

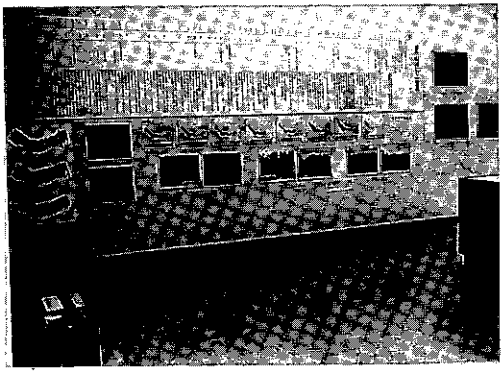
(4) 展示構成

① 地すべりの概要
② 地すべりの歴史
③ 地すべりと地質
④ 地すべりと私たち

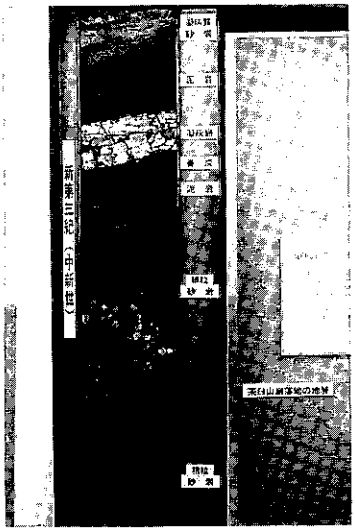
(5) 資料点数　43点



ポスター・パンフレット・図録



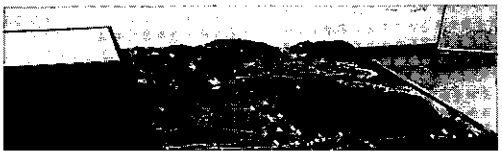
茶臼山地すべりの概要

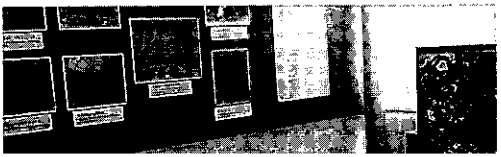


茶臼山崩落地の地層標本

(6) 展示資料・写真目録

No.	名　　称	点数	所　　蔵　　者
	《展示資料》		
	(地すべりの歴史)		
1	共和村村議会の記録	10	両角英夫氏（長野市）寄贈
	(地すべりと地質)		
2	ベントナイト	2	酒井　実氏（長野市）寄贈
3	亜　　炭	1	当館蔵
4	茶臼山付近の地形模型	1	〃
5	崩落地地層の柱状の複製	1	〃
	《展示写真》		
	(地すべりの概要)		
1	昭和4年の茶臼山	1	町田久子氏（長野市）蔵
2	上空から見た茶臼山地すべり	3	土尻川砂防事務所蔵
3	現在の茶臼山	1	当館蔵
	(地すべりの歴史)		
4	駐留軍人に地すべりを説明する信里村長	1	神農守邦氏（長野市）蔵
5	地すべりの測量を行う長野工業高校の生徒たち	1	両角英夫氏（　〃　）寄贈
6	空から見た地すべりの変遷	3	望月巧一氏（　〃　）蔵
7	山新田部落に押し寄せる地すべり土塊	1	〃　（　〃　）蔵
8	茶臼山頂上付近の崩壊状況	1	〃　（　〃　）蔵
9	旧南峰頂上から見た地すべり	1	〃　（　〃　）蔵
10	下有旅から見た地すべり	2	〃　（　〃　）蔵
11	恐竜公園の様子	1	土尻川砂防事務所蔵
	(防止策)		
12	開渠(きょ)導水路	2	高村正幸氏（長野市）蔵
13	蛇篭(じゃかご)を入れた排水路	2	〃　（　〃　）蔵
14	宇土沢川暗渠取入口	1	〃　（　〃　）蔵
15	排水トンネルの掘削	1	〃　（　〃　）蔵
16	集水井筒とその内部	2	土尻川砂防事務所蔵
17	暗渠背水	1	〃
18	背水トンネル	1	当館蔵
19	深　井　戸	1	〃
20	コンクリートU字型排水路	1	〃





すい一方向座席となっている。（機械は五藤光学製ＧＸ－ＡＴ）

平日は学校教育の一環として理科教育センターが学習投影を行い、土曜・日曜・祝日に当館が一般向けに投影している。なお、一般投影はプログラムを組んで行うオート投影で、録音と原画作製以外は自主製作をしている。

天体学習室は、星空の世界への水先案内人であり、多くの人たちが宇宙への関心を持ち、その理解を深めるための手助けをする場所と考えている。したがって、投影の内容も、小学校高学年以上に理解できるように、また誰もが楽しく学習できるように配慮している。

投影番組は季節に合せて３か月ごとに変えている。番組制作に当たり、外部委託は次のとおりである。

録音テープ製作…㈱長野トップ、原画製作…永野裕子

2） 投影内容

パンフレット

(1) 夏の番組 「天王星探検」 No.24

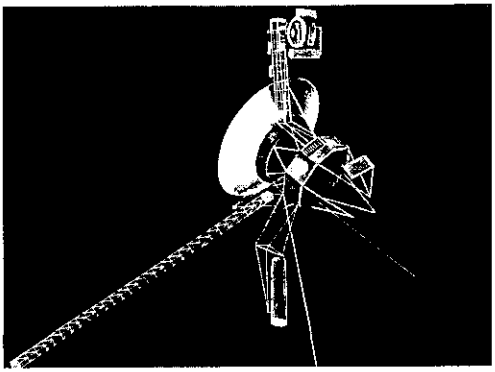
① 投影期間 昭和62年６月６日～８月30日

② 内 容

天王星は太陽系第７番目の惑星で、1781年イギリスの天文学者ウィリアム・ハーシェルによって発見された。天王星は５～６等級で、肉眼でもなんとか認められる明るさであるが、街の明りのため、それもかなり難しくなっている。天王星はちょうど土星と同じように夏の天の川の中に来ている。望遠鏡で見る天王星は緑がかった色の小さな円盤像で、細部はほとんどわからない状態である。

その天王星のベールをはがしたのはアメリカが打ち上げた惑星探査機ボイジャー２号であった。ボイジャー２号は天王星の新しいリング（輪）や衛星を数多く発見し、美しい画像を私達に送って来てくれた。横倒しになって自転していることをはじめとした数々の謎はまだまだ残され、そこへ新たな謎も加わってきた。

番組では、天の川を舞台とした夏の星座紹介を女性ナレーター、ボイジャー２号として天王星の紹介を男性ナレータにしてもらった。


天王星へ向かうボイジャー２号

③ 声の出演

安田昌子・塚田剛

④ 投影時間 約31分間

⑤ 入場者数 3414人

) 夏休み特別投影「星の招待状」…リバイバル作品

① 投影期間 昭和62年7月28日～8月18日の月曜日を除く平日（13日間）

② 内 容

この番組は4年前（昭和58年）の夏に投影したものの再投影である。

星の好きな小学生の星子（せい）のところへ星空の郵便配達人のラビが1通の手紙を届けにくる。それからラビと星子の夏の星座への冒険が始まった。

③声の出演

冨士原茂子・土屋慶江子・松木正則他

④投影時間 約29分間

⑤入場者数 1318人

パンフレット

) 秋の番組 「ゆみちゃんの星占い－太陽の通り道－」 No.25

① 投影期間 昭和62年9月5日～11月29日

② 内 容

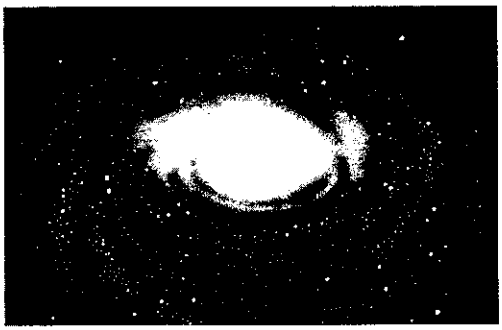
星占いに夢中のゆみちゃんは、ある日「近々自分の運命を変える男の子に出会う。南の方角が吉」という占いを見てドキドキしながらも外へ出かけていった。もう夕暮れ時で、星も1つ2つと見え始めている。しばらく歩いていくと、望遠鏡をのぞいている1人の男の子（幸二）に出会う。幸二君は星は好きだが星占いは大きらいであった。二人はけんかを交えながらも望遠鏡をのぞいたり、秋の星座を探したりして星の世界へと旅をしていった。そしてそうしているうちにゆみちゃんは幸二君にひかれていった。

③ 声の出演

中山和子・蟲ゆかり・松木正則・羽生紀和子・土屋慶江子

④ 投影時間 約35分間

⑤ 入場者数 3439人


天の川は銀河系の一部を銀河系の中から見た姿……

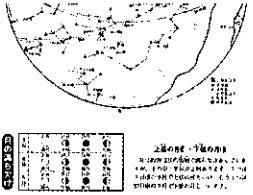
) 冬の番組 「天の川の秘密」 No.26

① 投影期間 昭和62年12月5日～昭和63年2月28日

② 内 容

オリオン座をはじめとした美しい冬の星座たちが輝いている。天の川は夏にしか見えないと思っている人も多いが、冬にも立派に存在する。ただ、淡い存在なので多くの人はそれに気がつかないだけである。そんな天の川は何でできていて、その正体は何であろうと昔から人々は疑問に思っ

は皆地球のまわりを１日１回まわっている」という考え方がほとんどであった。これが天動説である。ところが、時がたつにつれて、どうも天動説では説明のつかない現象があることに気がつく人が現われるようになり、今度は「太陽は宇宙の中心にいて、そのまわりを地球や他の惑星たちが回っている」という説が生れました。これが地動説で、コペルニクスがその生みの親といわれている。しかし天動説から地動説への転換は決してすんなり行われたわけではなく、多くの犠牲があった。宗教裁判をかけられ苦しめられたイタリアの科学者ガリレオ・ガリレイ、火あぶりの刑に処せられたジョルダーノ・ブルーノ）などがその代表である。そんな中で、次第に宇宙の体系は真実の方へと確立していった。



パンフレット

地動説を支持するブルーノは宗教裁判にかけられた……

③　声の出演
　　小山菜緒・演劇集団“空素（からす）”

④　投影時間　約37分間

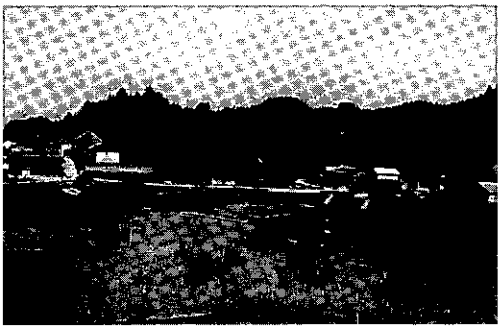
⑤　入場者数　4308人

3　調査研究収集活動

1）民俗部門

(1) 人生儀礼の調査

今年度は市内の２地区について、調査を実施した。今後継続して人生儀礼を中心主題にして調
を行うという目的のもとに、今年は子どもを対象にして、子どもの誕生儀礼、成長儀礼、衣食住、
年中行事、社会組織、教育、経済活動、あそび、口頭伝承などを調査した。実際には子供のこと
みならず、多方面にわたる聞き取り調査による資料を得ることができた。



軍足の集落

軍足の子どもたち

) 上ケ屋軍足（あげやぐんだり）の調査

査月日　昭和62年８月７日～８月16日

査 者　安室　知・中島龍吾・奈須野由美
　　筑波大学学生２名

査内容　軍足は長野市北部飯縄山麓に位置す
20戸ほどの小集落で、悉皆調査を行った。
この調査資料のうち、口頭伝承の民話の一部
秋の特別展「森の文化」の中の山の民と暮ら
ー民話の世界ーにて活用し、また企画展「子
もの生活誌ー民話調査の記録ー」としてまと
た。

) 檀田（まゆみだ）の調査

査月日　昭和62年７月30日～８月23日

査 者　安室　知・中島龍吾
　　筑波大学学生２名

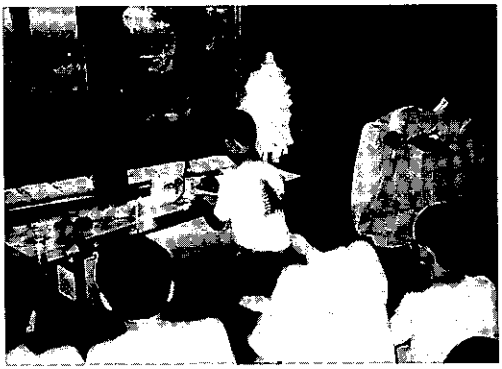
査内容　長野市の市街地に近い、平坦部の純
村であったが、近年は新興住宅地として変容
つつある地区である。そうした変貌著しい状
の中で、檀田には子ども（14才以下の男子）
けで行われる天神祭の行事が伝承されている。
こで、この檀田では天神祭の行事を中心にし
、子どもの民俗調査を行った。
また天神祭の祭典帳が江戸末期から現在まで
存されており、写真によって記録を行った。

) 資料収集

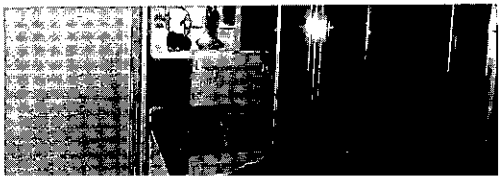
本年度も民具を中心に多くの市民から寄贈、
託の申し出があった。特に企画展「子どもの
活誌」の事前調査と収集活動を通じ、子とも
関連した年中行事、芸能・娯楽の分野の資料
収蔵することができた。また故宮沢憲衛氏
（長野市桜枝町）が収集した郷土玩具コレクショ
271点も御寄贈いただき、収蔵した。
しかし収蔵庫が満杯に近い状況で、寄贈・寄
の申し出に対し、既収蔵資料と重複するもの

軍足の山の神

檀田の天神祭



檀田の天神祭



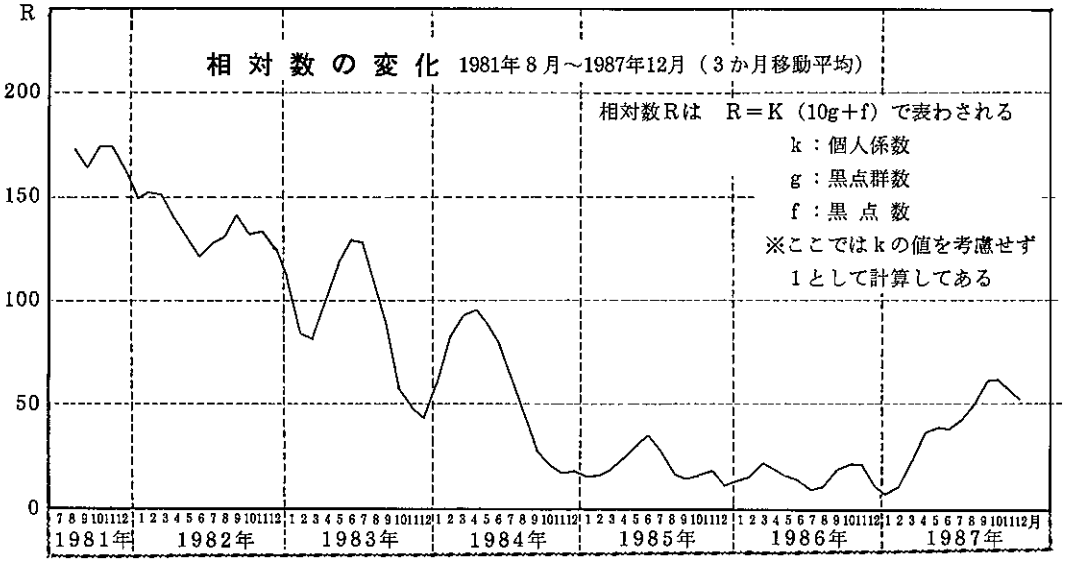
■観 測 方 法…投影した像をスケッチする。（投影像は直径20cm）

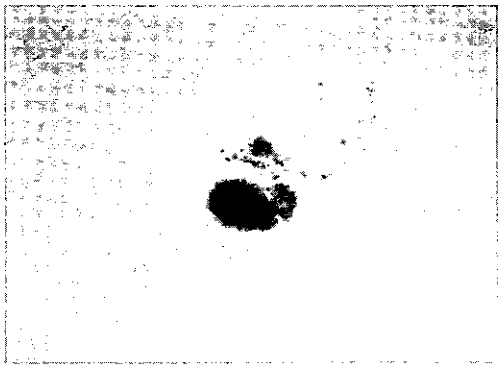
■使用望遠鏡…15cm屈折望遠鏡（五藤光学）

焦点距離2250mm（F15）　接眼レンズ　K40mm

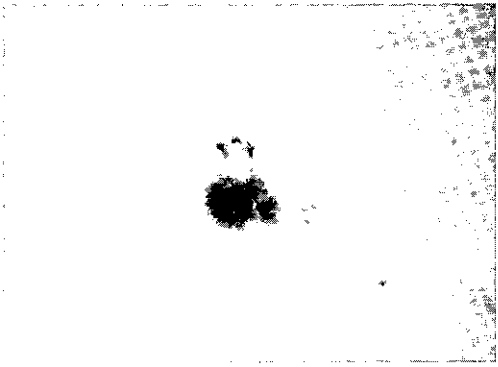
下のグラフからわかるように、1981年は第21活動期の後半で、黒点相対数も減少に向っていった時期である。そして極小が1986年９月ということで、そこから第22活動期が始まった。1987年は、第22期の立ち上がりの時期で高緯度群の発生が増え、また肉眼でも見える大黒点群の出現も見られるようになってきた。

1987年は、前半は北半球、後半は南半球が優勢な活動状況であった。





黒点（N290群）　1987年５月20日16時32分
肉眼で見えた黒点



黒点（N322群）　1987年10月14日16時10分
肉眼で見えた黒点

太陽黒点相対数の毎日の値　(1987年)

日	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			
付	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N	S	TOTAL	N
1	15	0	15	0	0	0	—	—	—	18	0	18	—	—	—	19	0	19	0	0	0	46	11	57	0	38	38	—	—	—	43
2	—	—	—	0	0	0	11	14	25	—	—	—	20	27	47	—	—	—	0	0	0	59	15	74	0	42	42	54	26	80	—
3	12	0	12	0	0	0	12	13	25	11	0	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	44	18	62	0	43	43	33	0	33	38
4	13	0	13	0	0	0	12	0	12	11	0	11	11	22	33	0	0	0	0	0	0	21	25	46	—	—	—	55	11	66	—
5	—	—	—	0	0	0	12	11	23	12	19	31	0	24	24	0	0	0	0	0	0	—	—	—	0	50	50	84	11	95	33
6	12	0	12	12	0	12	—	—	—	11	19	30	0	28	28	0	0	0	0	0	0	—	—	—	0	54	54	—	—	—	11
7	11	0	11	0	0	0	—	—	—	—	—	—	0	54	54	0	0	0	0	0	0	0	50	50	0	108	108	50	0	50	12
8	0	0	0	0	0	0	23	0	23	0	66	66	0	56	56	0	0	0	0	16	16	12	58	70	11	120	131	49	12	61	—
9	—	—	—	0	0	0	19	0	19	0	98	98	0	45	45	—	—	—	0	19	19	12	43	55	—	—	—	40	25	65	23
10	—	—	—	0	12	12	14	0	14	—	—	—	0	53	53	—	—	—	—	—	—	12	56	68	—	—	—	30	32	62	24
11	0	0	0	0	0	0	—	—	—	0	78	78	0	33	33	0	0	0	—	—	—	25	48	73	—	—	—	36	39	75	24
12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	72	83	—	—	—	0	28	28	—	—	—	13	54	67	—	—	—	—	—	—	22
13	0	0	0	0	0	0	—	—	—	11	76	87	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	61	61	—	—	—	31	41	72	—
14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	73	84	—	—	—	11	0	11	0	0	0	0	60	60	—	—	—	45	72	117	—
15	0	11	11	12	0	12	0	22	22	25	78	103	13	25	38	—	—	—	11	0	11	11	68	79	0	20	20	66	80	146	0
16	0	0	0	0	0	0	0	11	11	14	89	103	21	26	47	0	0	0	13	11	24	0	82	82	—	—	—	—	—	—	0
17	0	0	0	0	0	0	—	—	—	0	76	76	—	—	—	13	0	13	11	15	26	—	—	—	23	18	41	—	—	—	0
18	0	11	11	—	—	—	0	25	25	15	41	56	—	—	—	11	25	36	0	15	15	—	—	—	11	15	26	43	66	109	0
19	0	11	11	0	0	0	0	13	13	22	29	51	45	41	86	15	14	29	—	—	—	0	52	52	34	33	67	—	—	—	0
20	0	11	11	0	0	0	0	0	0	11	11	22	99	19	118	—	—	—	—	—	—	0	77	77	11	29	40	26	66	92	0
21	0	13	13	0	0	0	17	0	17	0	14	14	58	11	69	—	—	—	16	58	74	0	60	60	13	35	48	24	72	96	0
22	0	17	17	—	—	—	22	0	22	11	22	33	64	0	64	27	14	41	17	79	96	13	47	60	12	16	28	0	70	70	11
23	—	—	—	0	0	0	—	—	—	24	11	35	—	—	—	35	13	48	36	115	151	23	30	53	12	11	23	0	54	54	11
24	0	18	18	0	0	0	—	—	—	24	11	35	—	—	—	39	14	52	25	125	150	45	25	70	—	—	—	—	—	—	0
25	0	11	11	11	0	11	15	0	15	26	0	26	48	0	48	—	—	—	19	104	123	—	—	—	—	—	—	20	12	32	0
26	11	11	22	—	—	—	22	0	22	—	—	—	36	0	36	32	12	44	20	94	114	46	0	46	—	—	—	—	—	—	0
27	14	0	14	11	0	11	13	0	13	13	0	13	—	—	—	31	25	56	—	—	—	36	0	36	11	0	11	61	61	40	—
28	13	11	24	11	0	11	13	0	13	—	—	—	37	0	37	26	25	51	33	55	88	18	11	29	—	—	—	65	38	103	—
29	11	12	23				14	12	26	12	14	26	19	0	19	—	—	—	30	33	63	14	12	26	22	11	33	48	58	102	—
30	0	0	0				15	0	15	14	20	34	16	0	16	25	0	25	39	34	73	0	11	11	—	—	—	—	—	—	0
31	—	—	—				15	0	15				13	0	13				52	35	87	0	22	22				—	—	—	
Ave	4.7	5.7	10.4	2.4	0.5	2.9	11.3	5.5	16.8	12.3	36.7	49.0	23.8	22.1	45.9	14.2	8.5	22.7	13.4	33.7	47.1	17.3	38.3	55.6	9.4	37.8	47.2	41.0	39.1	80.1	12.0

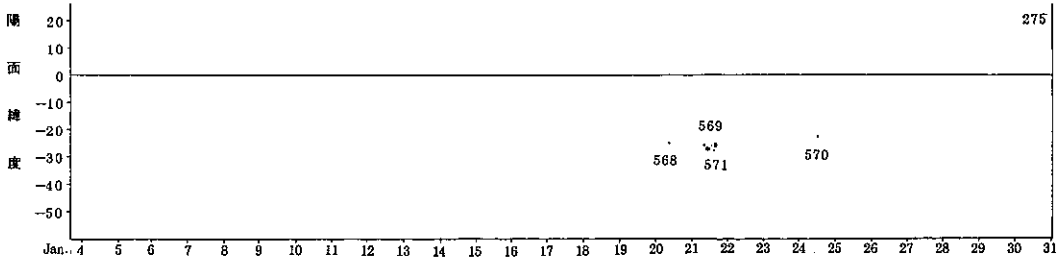
277	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	H	D	308	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]
278	37.5-38	308.5-310.5	2.25	3. 3	3. 5	J→C→J→A	C	309	18	233	8.15	–	8.15	A	A
279	4-7	282.5-289	3. 8	–	3.10	D-C	D	310	14-17.5	122.5-125.5	8.22	8.28	8.29	J→D→J→A	D
280	23-26	74-80	3.21	3.21	3.26	B→C→D→A	D	311	16.5-21	204.5-210	8.24	–	8.27	A→D	D
281	2.5-5	293-298	3.26	3.31	4. 6	J→H→C→J	H	312	28	249	9. 8	–	9. 8	A	A
282	23-24.5	66.5-73	4.12	–	4.16	J→C	C	313	18	215-216	9.17	9.17	9.17	B	B
283	26.5	129	4.15	–	4.15	A	A	314	12-14	129.5-133.5	9.17	9.23	9.29	J→A→J→C→J→A	C
284	28-30	102-105	4.18	–	4.18	B	B	315	22	247	9.19	–	9.19	A	A
285	7	63	4.19	–	4.19	A	A	316	20	215-215.5	9.19	–	9.19	A	A
286	30.5	342	4.19	–	4.20	A	A	317	29.5-30.5	338.5-339.5	9.29	10. 5	10.11	J→C→E→D→C→J	E
287	3-3.5	297.5-298	4.22	4.27	5. 2	J→A→C→A→B	C	318	16-16.5	4-5.5	10. 2	–	10. 2	B	B
288	26-27.5	28.5-33.5	4.23	–	4.25	B→D	D	319	32.5-40.5	287-298	10. 2	10. 8	10. 9	A→B→J→B	J
289	5	212.5	5. 4	–	5. 4	A	A	320	33	322	10. 5	–	10. 5	A	A
※290	24-36	332.5-348.5	5.15	5.21 5.22	5.28	D→E→C→E→J	E	321	20.5-22	315-317	10. 8	–	10. 8	B	B
291	2.5	299.5	5.20	–	5.20	A	A	※322	18-24.5	186.5-198	10. 9	10.16	10.21	J→E→C→H→E→C	H
292	20-23	245.5-255.5	5.26	5.28	6. 1	B→D→C→J→C	D	323	16.5	154	10.20	–	10.21	A	A
293	27.5	334	6.14	–	6.14	A	A	324	26.5-34.5	352.5-5	10.25	10.31	11. 6	D→E→C→J	E
294	31-32	324.5-325.5	6.17	–	6.17	B	B	325	22.5-25	47.5-50	10.27	10.27	10.27	B	B
295	24.5	333.5	6.18	–	6.18	A	A	326	15.5-17	218.5-222.5	11. 5	–	11. 5	B	B
296	30-32.5	321-324	6.19	6.19	6.19	B	B	327	16-17	225	11. 7	–	11. 9	J→B	J
297	17.5-21	256.5-265	6.22	6.24	6.30	J→D→C	D	328	17.5	166	11. 9	–	11.11	A	A
298	28-31	149-160	6.26	–	6.30	C→G→C→B	G	329	30-31	270-272	11.10	–	11.12	B→A	B
299	26.5-27	24-28	7.15	–	7.17	A→B→A	B	330	34-35	269-270	11.12	–	11.12	J	J
300	20-21	250-253	7.21	7.22	7.23	B	B	331	27.5	356.5	11.22	–	11.25	A	A
301	18-19	219-222	7.23	–	7.23	B	B	332	25-25.5	242-243.5	12. 7	–	12. 8	B	B
302	28-31	136.5-147.5	7.23	7.30	8. 3	J→G→E→C→E→G→C→A	E	333	22-23	14-18	12.18	–	12.20	J→C→A	C
303	23-24	216-219	7.24	–	7.24	B	B	334	13-15	321.5-323.5	12.26	–	12.26	B	B
304	20-22.5	148.5-153.5	7.30	–	7.31	B	B								

1987年に観測した黒点群 (南半球)

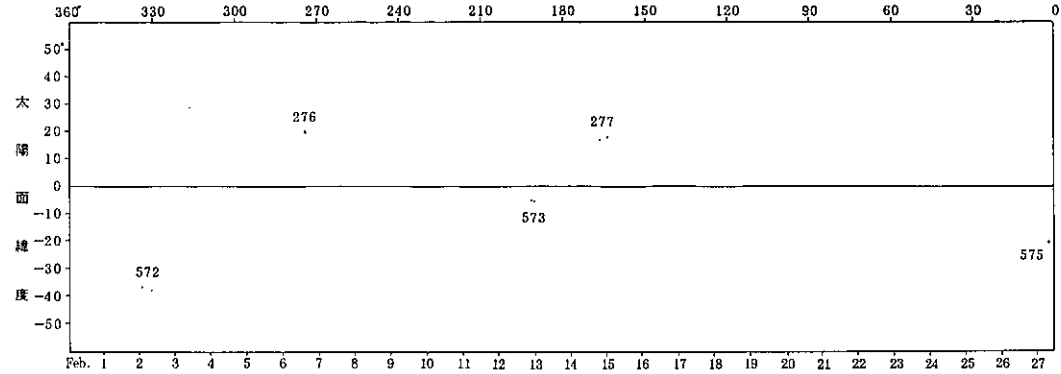
群番号	緯 度	経 度	観測の始め	中央子午線通過日	観測の終り	群型の変化	最盛期の群型	群番号	緯 度	経 度	観測の始め	中央子午線通過日	観測の終り	群型の変化	最盛期の群型
	(−)		月 日	月 日	月 日				(−)		月 日	月 日	月 日		
S 568	25	140.5	1.15	–	1.15	A	A	S 577	32-34	74.5-75	3.15	–	3.19	J-C	J
569	26	128	1.18	–	1.18	A	A	578	18-20	120.5-123.5	3.18	–	3.18	B	B
570	22.5	86	1.19	–	1.20	A	A	579	24.5	20	3.29	–	3.29	A	A
571	23.5-25.5	124.5-128	1.21	1.21	1.26	A→D→C→A	D	580	22-26	173-188.5	4. 5	4. 9	4.15	B→D→E→G→C→J	E
572	37.5-38	330-333.5	1.28	–	1.28	A→B	B	581	24.5	203-206	4. 8	–	4. 9	B→A	B
573	5-5.5	190-191.5	2.10	–	2.10	B	B	※582	29.5-36	121.5-138	4. 8	4.13	4.20	G→E→H→E→J	E
574	31.5-32.5	341-344.5	3. 2	–	3. 3	C-B	C	583	5-7.5	124.5-127.5	4. 8	4.13	4.19	J→C→J→C→J	J
575	20.5	362	3. 5	–	3.5	A	A	584	30-32	117.5-120.5	4.11	4.14	4.14	B→A	B
576	22	178.5	3.15	–	3.15	A	A	585	17-18	107-110	4.15	–	4.17	A→B→A	B

1987年に観測した黒点群 （南半球）

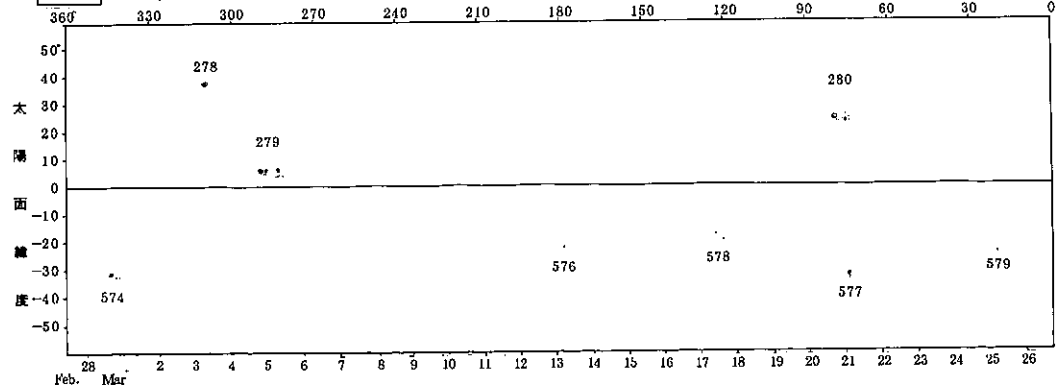
群番号	緯度	経度	観測の始め	中央子午線通過日	観測の終り	群型の変化	最盛期の群型	群番号	緯度	経度	観測の始め	中央子午線通過日	観測の終り	群型の変化	最盛期の群型
	(−)		月 日	月 日	月 日				(−)		月 日	月 日	月 日		
S 586	5	97-99	4.16	−	4.16	B	B	631	35	217.5	10. 9	−	10.10	A	A
587	28	89.5-92	4.16	−	4.16	B	B	632	28-30.5	184.5-187	10.11	(10.16)	10.21	J	J
588	6	116	4.17	−	4.17	A	A	633	22-27	237.5-245	10.13	−	10.18	B→D→A	D
589	24-26	1.5-4	4.21	−	4.25	B→A	B	634	21.5-23	207-213.5	10.14	10.15	10.21	B→D→J→A	D
590	42	333	4.22	−	4.22	A	A	635	27-27.5	158.5	10.14	−	10.14	A	A
591	27.5-29.5	278-281	4.29	4.29	5. 4	A→B→A	B	636	40	155.5	10.15	−	10.15	A	A
592	22.5-25	178-179	5. 2	5. 7	5. 8	J→A	J	637	24	142.5	10.18	−	10.18	A	A
593	29-33	114-125	5. 5	5.11	5.16	D→E→D→J	E	638	30-40	111.5-118	10.20	10.22	10.23	B→C	C
594	30	177	5. 7	5. 7	5. 7	A	A	639	30-31	93-96.5	10.20	−	10.23	C→J→C→B	C
595	5-6	131-132	5. 8	−	5.10	A	A	640	33-35	87-89	10.20	−	10.23	C→B→D	D
596	21	84	5.10	−	5.10	A	A	641	42-43.5	111-113.5	10.21	10.22	10.23	B→C→B	C
597	22.5-25	347.5-349.5	5.15	5.21	5.21	C→J→A	C	642	24	126.5-130	10.25	−	10.25	B	B
598	24	86	5.19	−	5.19	A	A	643	35	85.5-87	10.27	−	10.27	A	A
599	18-20	80-82.5	5.19	−	5.19	C	C	644	20-22.5	42.5-49.5	10.27	10.27	11. 1	B→D→J	D
600	18-20	82-84	6.12	−	6.12	B	B	645	20	347.5-349.5	10.27	−	10.29	B→C	C
601	10-11	61-66	6.12	−	6.12	C	C	646	19-21	340.5-345	10.29	11. 1	11. 3	A→B	B
602	4-5	345-351.5	6.18	−	6.18	B	B	647	24	261.5	11. 3	−	11. 6	J-A	J
603	30-31	255.5-257	6.18	6.24	6.28	J→C→J→A→B→A	C	648	20-22	247-253.5	11. 3	−	11.11	C→D→C→J→A	D
604	34	262	6.27	−	6.27	A	A	649	27.5	255.5	11. 5	−	11. 5	A	A
605	30-31	223-226	6.28	−	6.28	B	B	650	26	248.5	11. 6	−	11. 6	A	A
606	17.5-19.5	110.5-116	7. 8	−	7. 9	B-C	C	651	25	258	11. 7	−	11. 7	A	A
607	30-33	240-242	7.16	7.22	7.28	A→J	J	652	24-25	238-242	11. 9	11. 9	11.10	B	B
608	25-30	250-260	7.21	7.21	7.26	D→B→D→E	E	※653	21.5-28	111.5-122	11.12	11.18	11.24	H	H
609	20-26	179-189	7.21	(7.21)	8. 1	C→D→E→D→C→B→A	E	654	18-23	53-64	11.17	11.22 11.23	11.26	J→D→E→C	E
610	17.5-19	220.5-225	7.23	−	7.23	A	A	655	16	131.5-133.5	11.18	−	11.20	A→B→A	B
611	19	196-198	7.23	−	7.23	A	A	656	15	105	11.18	−	11.18	A	A
612	19	228	7.24	−	7.24	A	A	657	32-35	66-75.5	11.22	−	11.26	B→C→D→G→E	E
613	20-21.5	186.5-189.5	7.28	−	7.28	B	B	658	22-22.5	351-354	11.23	−	11.26	A→B	B
614	27-28	169.5-175.5	7.29	−	7.31	A-B	B	659	21-22	316.5-320	12. 1	−	12. 3	B→A	B
615	21-24	41.5-50.5	8. 2	8. 7	8.12	B→C→B→D→E→G	E	660	20-22.5	233-241.5	12. 5	(12.6)	12.10	B→D	D
※616	22-26	279-287	8.10	8.16	8.22	J→H→D→H→J→A	H	661	35-35.5	266	12.10	−	12.10	A	A
617	28-32.5	240-247	8.12	8.19	8.24	J→H	H	662	19-21	221-224.5	12.10	−	12.10	C	C
618	20-23.5	234.5-241	8.13	8.19	8.24	D→B→A→C→B	D	663	20.5	168.5	12.13	−	12.13	A	A
619	23	304.5	8.16	−	8.16	A	A	664	32-35	64-67.5	12.13	12.19	12.26	J→H→J	H
620	21	275.5-277.5	8.21	−	8.21	B	B	665	25-27	101-104.5	12.14	12.17	12.19	A→B→A	B
621	22-23.5	47-49.5	8.28	−	9. 2	A→B	B	666	31.5-32	56-58	12.14	−	12.18	A→J→C→A	C
622	24	5	8.31	9. 6	9. 8	A→J→A	J	667	26	63	12.15	−	12.15	A	A
※623	17-24	335-346	9. 2	9. 7 9. 8	9. 8	J→E→C→E	E	668	17	106-108	12.19	−	12.19	B	B
624	24-26	275-279	9. 7	−	9. 8	J→C	C	669	32-33	49-49.5	12.19	−	12.20	A	A



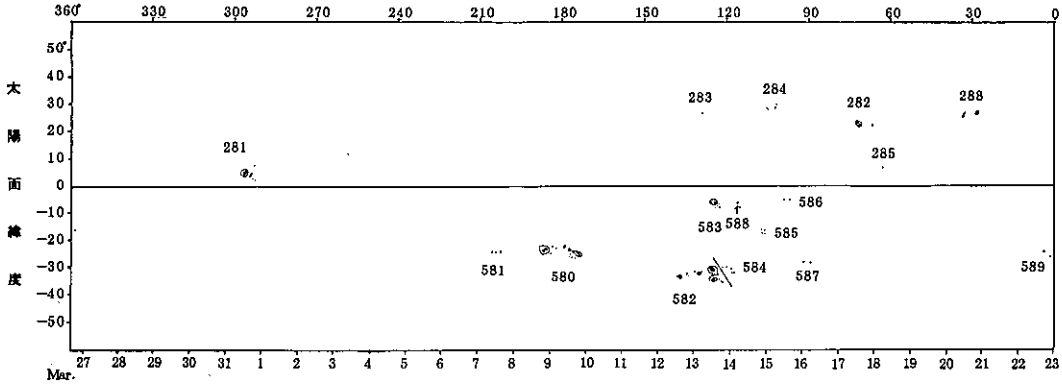
1785 1987年2月1日 − 2月27日



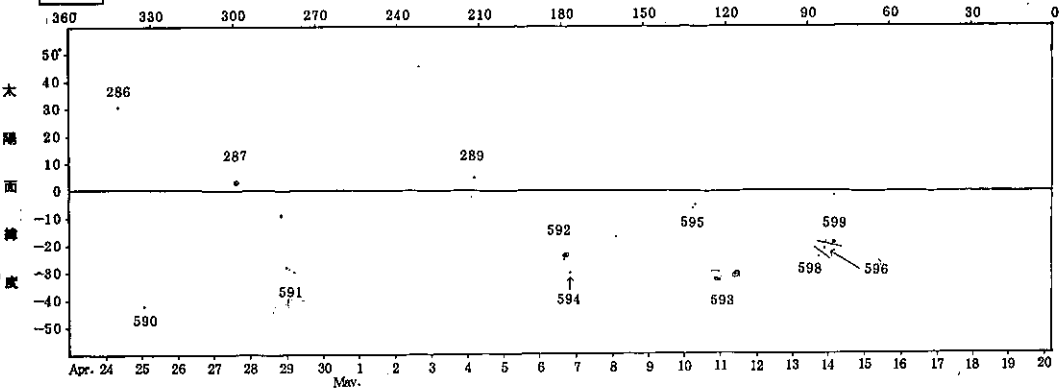
1786 1987年2月28日 − 3月26日



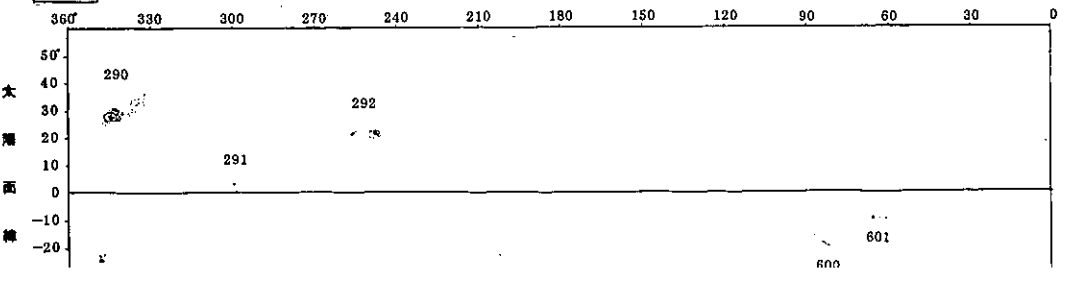
1787 1967年3月27日 — 4月23日

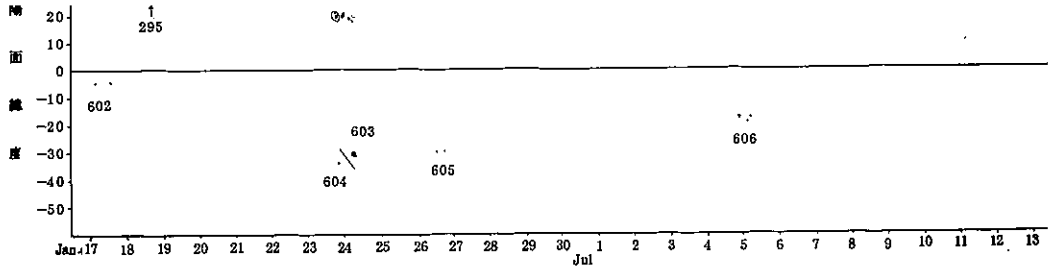


1788 1967年4月24日 — 5月20日

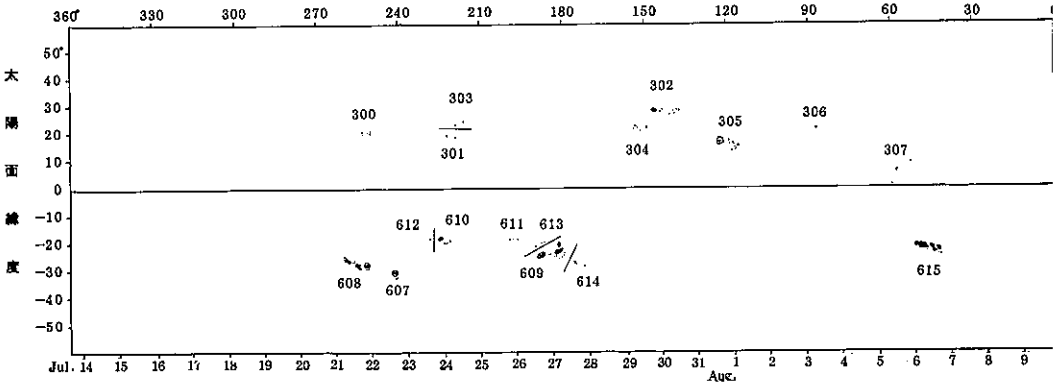


1789 1967年5月21日 — 6月16日

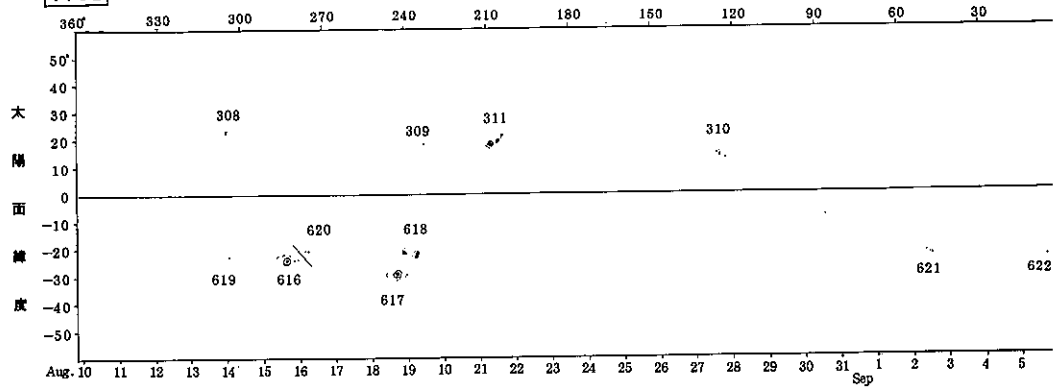




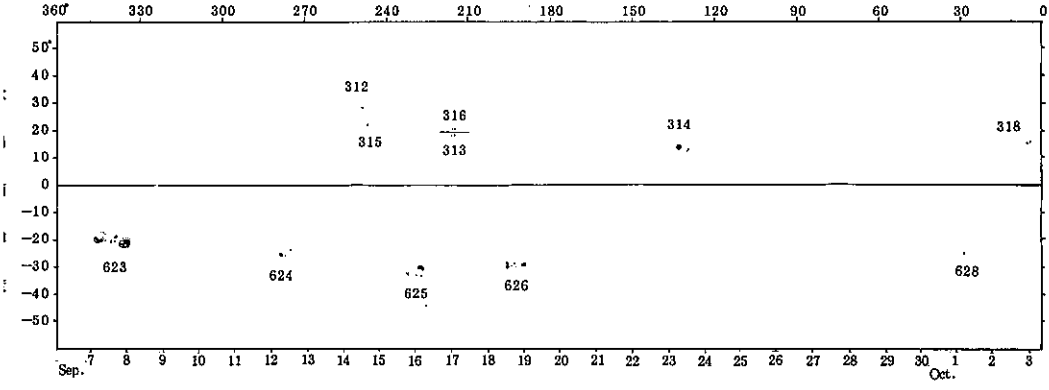
1791 1967年7月14日 — 8月9日



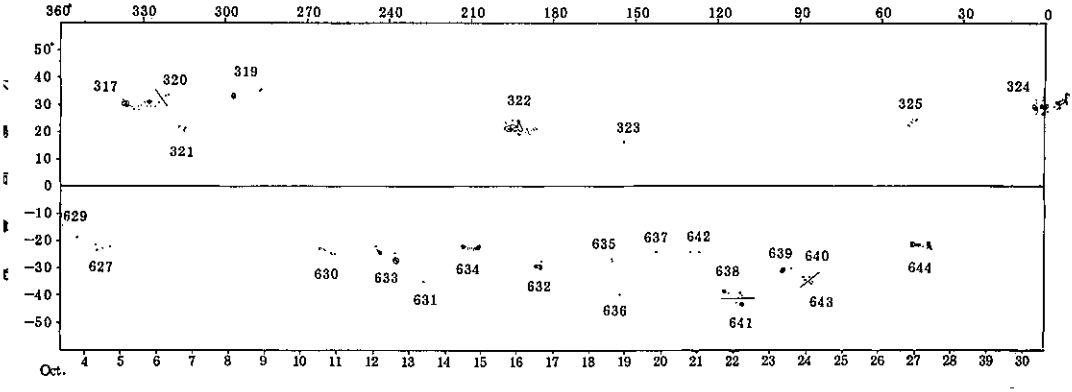
1792 1967年8月10日 — 9月6日



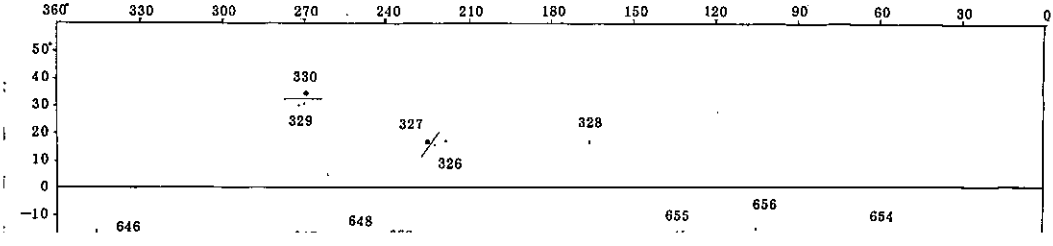
1793 1987年9月7日 − 10月3日

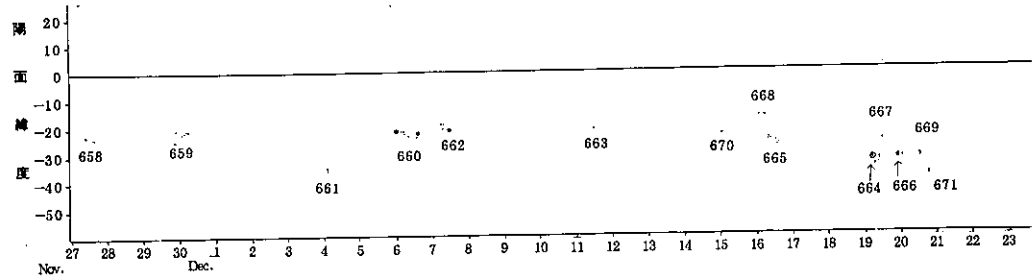


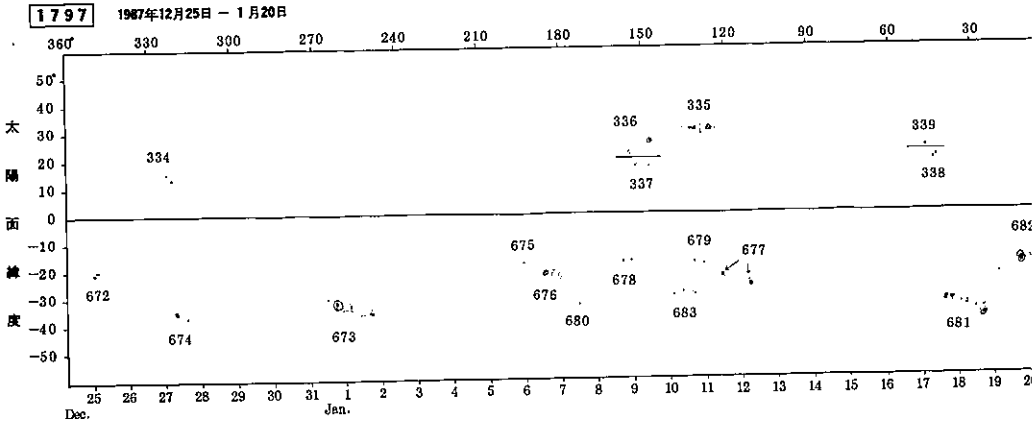
1794 1987年10月4日 − 10月30日



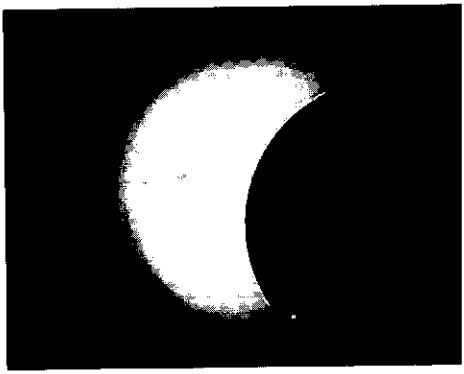
1795 1987年10月31日 − 11月26日







1989年9月23日、部分日食（沖縄で金環食）の当館における観測風景



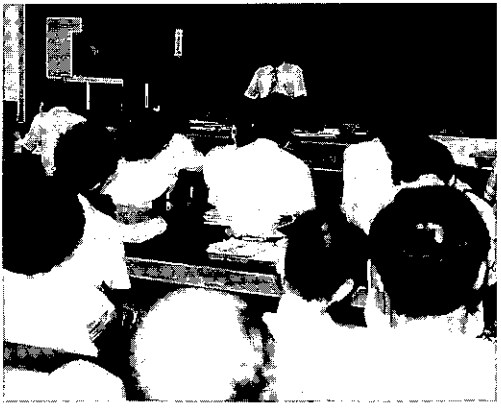
部分日食（1989年9月23日11時9

4　教育普及活動

）講　演　会

企画展「稲を伝えた人々」講演会

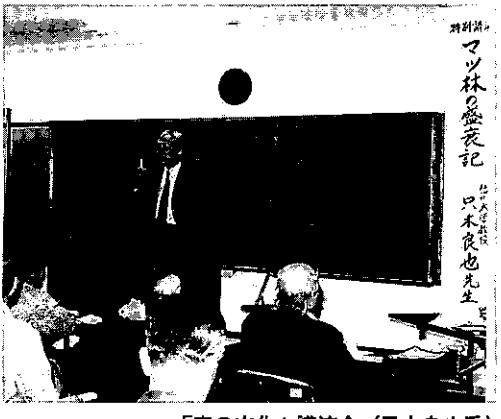
日　時　昭和62年８月９日午後２時～４時
会　場　会議室
演　題　「弥生文化の波及と定着」
講　師　神村透（県史編纂委員）
聴講者　72人
内　容　本年報のⅥ章に講演録を掲載したので参照されたい。



「稲を伝えた人々」講演会（神村透氏）

特別企画展「森の文化」講演会

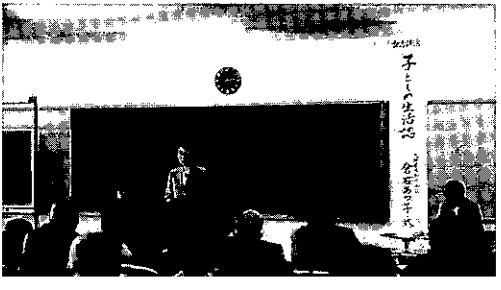
日　時　昭和62年11月15日午後２時～４時
会　場　会議室
演　題　「マツ林の盛衰記」
講　師　只木良也（信州大学教授）
聴講者　55人
内　容　東京大学教養講座15『森の文化』（東京大学出版会・1987年７月）所載の「森の文化史」の項と内容が重複するため、その文献を参照されたい。



「森の文化」講演会（只木良也氏）

企画展「子どもの生活誌」講演会

日　時　昭和63年3月13日午後2時～3時15分
会　場　会議室
演　題　「子どもの生活誌
　　－遊びをめぐって－」
講　師　倉石あつ子（県史編纂委員）
聴講者　36人
内　容　子どもの生活誌を産育儀礼（腹帯・宮参り・食い初めなど）、遊び仲間、



内　容　曇天のため、プラネタリウムでの学習になった。星座早見盤の使い方、春の星座の探方と解説。

(2)　夏の天体教室

日　時　昭和62年８月22日18時30分～20時

会　場　天体学習室（プラネタリウム）

受講者　45人

内　容　曇天のためプラネタリウムでの学習になった。夏の星座解説と探し方。９月23日の部日食についての解説。

(3)　秋の天体教室

日　時　昭和62年11月14日18時～20時

会　場　天体学習室（プラネタリウム）

受講者　46人

内　容　曇天のためプラネタリウムでの学習になった。ブラッドフィールド彗星の見つけ方。月31日のプレアデス星団の食の見方。秋の星座解説と探し方。

(4)　第11回プラネタリウムコンサート

日　時　昭和62年６月13日18時30分～19時50分

参加者　87人

内　容　春の星空とデュエット曲

曲　目

No.	曲　　名	歌　　手　　名
1	やさしくマイハート	ホイットニー・ヒューストン＆ジャーメイン・ジャクソン
2	エンドレス・ラブ	ライオネル・リッチー＆ダイアナ・ロス
3	オン・マイ・オウン	パティ・ラベル＆マイケル・マクドナルド
4	シスターズ・アー・ドゥーイン・イット	アレサ・フランクリン＆アン・レノックス
5	パラダイス	アン・ウイルソン＆マイク・レノ
6	イッツ・ユー	スティービー・ワンダー＆ディオンヌ・ワーウィック
7	オール・オブ・ユー	ダイアナ・ロス＆フリオ・イグレシアス
8	プッシュ	ピーター・ウルフ＆アレサ・フランクリン
9	愛と青春の旅立ち	ジョー・コッカー＆ジェニファー・ウォーンズ
10	ダブル・オア・ナッシング	ケニー・ロギンス＆グラディス・ナイト
11	ホールド・ミー	ホイットニー・ヒューストン＆テディ・ペンターグラス

(5)　第12回プラネタリウムコンサート

日　時　昭和62年８月９日18時30分～19時50分

参加者　90人

内　容　夏の星空とジャズ

曲　目

No.	曲　　名	歌手・演奏
1	アマポーラ	山下達郎
2	星影のステラ	アニタ・オデイ
3	虹の彼方に	ローズマリー・クルーニー
4	ホワッツ・ニュー	リンダ・ロンシュタット
5	ユー・ド・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ	ヘレン・メリル
6	レフト・アローン	マリーン
7	マスカレード	カーメン・マクレエ
8	マイ・ファニー・バレンタイン	チェット・ベイカー
9	ジャスト・ザ・トゥー・オブ・アス	グローバー・ワシントン　Jr
10	スターダスト	ウィリー・ネルソン

) 第13回プラネタリウムコンサート

日　時　昭和62年10月24日18時45分～20時

参加者　67人

内　容　秋の星空とフォークソング

曲　目

No.	曲　　名	歌　　手
1	遠い世界に	五つの赤い風船
2	友　　よ	岡林信康・高石友也
3	さよならをするために	ビリー・バンバン
4	主人公	さだまさし
5	とまどうペリカン	井上陽水
6	新宿恋物語	大塚博堂
7	秋止符	アリス
8	秋の気配	オフコース
9	ジェラシー	井上陽水
10	人間なんて	吉田拓郎
11	傘がない	井上陽水

) 第14回プラネタリウムコンサート

日　時　昭和62年12月19日18時30分～20時

参加者　85人

内　容　クリスマス特集

曲　目

No.	曲　　名	歌手名・演奏者名
1	アヴェ・マリア	カルロ・ベルゴンツィ
2	クリスマスの灯	ボビー・ノリス
3	ザ・クリスマス・ソング	ナット・キング・コール
4	われら3人の東の王	シーラ・ジョーダン
5	恋人がサンタクロース	松任谷由実
6	クリスマス・イン・ニューオリンズ	ルイ・アームストロング

2	バック・イン・タイム	ヒューイ・ルイス&ニューズ
3	リスペクト	アレサ・フランクリン
4	ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ	オーティス・レディング
5	男が女を愛するとき	パーシー・スレッジ
6	グルーヴィン	ラスカルズ
7	ダーリン	山下達郎
8	ユア・アイズ	山下達郎
9	アマポーラ	エンニオ・モリコーネ
10	スタンド・バイ・ミー	ベン・E・キング
11	ジャンピン・ジャック・フラッシュ	ローリング・ストーンズ
12	サプライズ・サプライズ	グレッグ・バージ
13	愛は消えない	アリソン・リード
14	雨に濡れても	B・J・トーマス
15	ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード	ビートルズ

(9) 春の地質教室

日　時　昭和62年5月10日9時～16時

場　所　浅川地域周辺

受講者　15人（市内在住小学校5年生以上）

講　師　竹内順治（松代小学校教頭）

内　容　浅川地域の地層観察と化石採集を行った。午前中は、岩石の種類等についての説明を聞いた後、かつて石油を産出したことのある浅川泥岩層や長野市街地西方の“白岩”として知られている裾花凝灰岩層等の地層の観察を行った。午後は、化石についての話を聞いた後、アカガイやホタテガイ等の化石を採集した。また、午前に学習したことをふまえながら、地層のスケッチを行い、地層の分類についても学習した。

(10) 秋の地質教室

日　時　昭和62年10月25日9時～16時

場　所　飯縄山周辺

受講者　3人（市内在住小学校5年生以上）

講　師　竹内順治（松代小学校教頭）

内　容　飯縄山周辺の岩石を採集し、その生いたちについて学習した。午前中、戸隠地質化石園を見学し、飯縄山の生いたちについて講義を受けた後、現地では、火山岩の採集・分類等を行った。午後は火山岩の産状を観察し、そのスケッチを行うとともに、地形や地図を注意深く判読することが火山の生いたちを知る手がかりになること等を学習した。

(11) しめ縄教室

日　時　昭和62年12月16日・20日9時30分～15時30分

会　場　会議室

受講者　16日29人、20日27人

材料費　600円
内　容　縄のなえる成人と限定して募集したため、高年齢層の方々が多かった。ごぼうじめ、しゃくしじめ、輪じめ、横じめ、大黒じめの５種類を作り、持ち帰った。

民　俗　講　座
日　時　昭和62年８月23日14時～16時
会　場　会議室
演　題　「山の祭りと民俗芸能」
講　師　田口光一（県史編纂委員）
受講者　65人
内　容　講演録を刊行したので、参照されたい。

考 古 学 講 座
日　時　昭和62年７月26日14時～16時
会　場　会議室
演　題　「ドングリ食について」
講　師　渡辺誠（名古屋大学助教授）
受講者　62人
内　容　講演録を刊行したので、参照されたい。

歴　史　講　座
日　時　昭和62年９月６日10時～15時30分
場　所　教室・市内
演　題　「近世の宿場めぐり」
講　師　山口純一（博物館副館長）
受講者　19人
内　容　午前中は市内における近世の宿場の様子を学習し、午後から矢代宿・丹波島宿・川田宿に出かけて、実際に見学した。

自　然　講　座
日　時　昭和62年６月21日・８月２日・10月18日
場　所　木島平村カヤノ平自然休養林
演　題　「森の四季」
講　師　和田清（信州大学助教授）
受講者　20人
内　容　春・夏・秋と３回実施したが、季節ごとに変化する森の姿を十分に堪能する事ができた。

茶臼山の地すべり	7月26日	A 4 二つ折	自然史館企画展パンフレット
〃	〃	B 5 ・16頁	自然史館企画展図録
博物館だより　第8号	8月10日	B 4 二つ折	企画展特集
ゆみちゃんの星占い		A 4 二つ折	プラネタリウムパンフレットNo25
森の文化	10月 4 日	〃	特別企画展パンフレット
〃	〃	B 5 ・32頁	特別企画展図録
博物館だより　第9号	10月12日	B 4 二つ折	特別企画展特集
天の川の秘密		A 4 二つ折	プラネタリウムパンフレットNo26
年報　第5号	1月30日	B 5 ・73頁	昭和61年度活動報告
子どもの生活誌	2月21日	B 5 ・両面刷	企画展パンフレット
〃　　ー民話調査の記録ー	〃	B 5 ・48頁	企画展図録
博物館だより　第10号	〃	B 4 二つ折	企画展特集
ドングリ食について	2月25日	B 5 ・30頁	考古学講座講演録
山の祭りと民俗芸能	〃	B 5 ・29頁	民俗講座講演録
宇宙を変えた人たち		A 4 二つ折	プラネタリウムパンフレットNo27

4) 博物館実習

実習生　清水隆寿（立正大学）
　　前島幸子（共立女子大学）
　　野村明正（東洋大学）
期　間　昭和62年7月28日～8月3日（7日間）

実習日程概要

月／日	実習事項	実習内容
7／28	実習にあたって	実習心得と実習計画（山口）・館長講話（館長） 博物館の施設と機構（佐野）・地域博物館の役割（副館長）
7／29	常設展示・企画展示	常設展示の構想と構成（和田）・企画展示の構想と構成（山口）
7／30	調査研究・収蔵整理等の実習	資料の受入と収蔵（山口）・博物館と保存科学（山口） 民俗資料の調査と整理（安室）
7／31		歴史資料の取扱いと整理（藤森）・博物館とプラネタリウム（大蔵）・プラネタリウム実習（大蔵）
8／1		自然史館常設展示（塩入）・自然資料の収集と整理（唐沢）・市内関連施設の見学（副館長）
8／2		受付・展示室・案内実習（薮崎・清水）
8／3	まとめ	展示室清掃・企画展構想実習発表質疑・総括反省会

III 博物館収蔵資料

1 購入資料

1) 図書

書名	発行所
朝鮮考古資料集成（付録）	出版科学総合研究所
北信濃の美術 16人集	郷土出版社
雲坪	信濃毎日新聞社
全国博物館総覧1(2)	日本博物館協会
広辞苑 第三版	岩波書店
新漢和辞典改訂版	大修館書店
現代用字辞典	岩波書店
モロッコの恐竜	築地書館
日本・朝鮮・中国一日食月食宝典	雄山閣
日本の暦	雄山閣
国史・国文に現れる星の記録の検証	雄山閣
暦と時の事典	雄山閣
接着のおはなし	日本規格協会
塗料の選び方・使い方	〃
防錆防食技術アニマル	〃
色の常識	〃
試薬	〃
塗料	〃
接着	〃
岩波写真文庫新風土記 1 北海道（東北部）	岩波書店
〃 2 北海道（中央部）	〃
〃 3 北海道（南部）	〃
〃 4 青森県	〃
〃 5 岩手県	〃
〃 6 宮城県	〃
〃 7 秋田県	〃
〃 8 山形県	〃
〃 9 福島県	〃
〃 10 茨城県	〃
〃 11 栃木県	〃
〃 12 群馬県	〃
〃 13 埼玉県	〃
〃 14 千葉県	〃
〃 15 東京都	〃
〃 16	〃
岩波写真文庫新風土記23 岐阜県	岩波書店
〃 24 静岡県	〃
〃 25 愛知県	〃
〃 26 三重県	〃
〃 27 滋賀県	〃
〃 28 京都府	〃
〃 29 大阪府	〃
〃 30 兵庫県	〃
〃 31 奈良県	〃
〃 32 和歌山県	〃
〃 33 鳥取県	〃
〃 34 島根県	〃
〃 35 岡山県	〃
〃 36 広島県	〃
〃 37 山口県	〃
〃 38 徳島県	〃
〃 39 香川県	〃
〃 40 愛媛県	〃
〃 41 高知県	〃
〃 42 福岡県	〃
〃 43 佐賀県	〃
〃 44 長崎県	〃
〃 45 熊本県	〃
〃 46 大分県	〃
〃 47 宮崎県	〃
〃 48 鹿児島県	〃
〃 49 沖縄県	〃
伊那 第四巻 昭和30年度	伊那史学会
NHK 地球大紀行 1	日本放送出版協会
〃 2	〃
研究報告 8巻1号	国立民族学博物館
〃 8巻2号	〃
〃 8巻3号	〃
〃 8巻4号	〃
〃 9巻1号	〃

〃　3号	〃
〃　4号	〃
〃　5号	〃
国立民族学博物館研究報告 7巻4号	〃
天体位置表　No684	海上保安庁
NHK地球大紀行3	日本放送出版協会
日本農業発達史　1	中央公論社
〃　2	〃
〃　3	〃
〃　4	〃
〃　5	〃
〃　6	〃
〃　7	〃
〃　8	〃
〃　9	〃
〃　10	〃
日本農業発達史　別巻上	〃
〃　〃　下	〃
木曽谷の地質	木曽印刷
川辺村誌	川辺村誌編纂会
小布施町史	小布施町史刊行会
都名所図會　左青龍	皇都書林
〃　右白虎	〃
〃　平安城尾	〃
〃　平安城	〃
〃　前朱雀	〃
〃　後玄武	〃
鬼無里村史	鬼無里村史編集委員会
戸隠村誌	戸隠村誌刊行会
屋敷神の研究	直江廣治
信濃宝鑑(上)	歴史図書社
〃　(中)	〃
〃　(下)	〃
長野県下水内郡地質誌	下水内教育会
一志茂樹博士喜寿記念論集	一志茂樹先生喜寿記念会
東部町の遺跡と文化財	五十嵐幹雄
NHK地球大紀行　4	日本放送出版協会
復刻版　考古学論叢　第一巻	宗野信彦
〃　〃　第二巻	〃
〃　〃　第三巻	〃
角川日本地名大辞典　42　長崎県	角川書店

天文ガイド編	誠文堂新光社
関東の生業2　漁業・諸職	明玄書房
南中部の生業2　〃	〃
北中部の生業2　〃	〃
近畿の生業2　〃	〃
四国の生業2　〃	〃
中国の生業2　〃	〃
東北の生業2　〃	〃
北海道の生業2　〃	〃
沖縄・奄美の生業2　〃	〃
九州の生業2　〃	〃
南極の科学2 オーロラと超高層大気	古今書院
〃　4　氷と雪	〃
〃　5　地学	〃
〃　7　生物	〃
〃　9　資料編	〃
鳥類学名辞典	東京大学出版会
中国の星座の歴史	雄山閣
信州山岳百科 I	信濃毎日新聞社
〃　II	〃
〃　III	〃
九州・沖縄地方の民具	明玄書房
中国・四国地方の民具	〃
近畿地方の民具	〃
中部地方の民具	〃
関東地方の民具	〃
北海道・東北地方の民具	〃
シリーズ日本の自然1 火山と地震の国	岩波書店
〃　2　日本の山	〃
〃　3　日本の川	〃
〃　4 日本の平野と海岸	〃
〃　5　日本の気候	〃
〃　6　日本の生物	〃
〃　7 日本列島をめぐる海	〃
〃　8　自然の猛威	〃
長野県歴史大年表　原始～近世編	郷土出版社
〃　近代～現代	〃
日本第四紀地図	日本第四紀学会
角川日本地名大辞典1北海道　(上)	角川書店
〃　〃　(下)	〃
NHK　地球大紀行5	日本放送出版協会

書　　名	発行所
角川日本地名大辞典　43　熊本県	角川書店
茅野市史　中巻　中世・近世	茅野市
ＮＨＫ　地球大紀行６	日本放送出版協会
長野県統計書	長野県統計協会
原色武田遺宝集	(財)武田信玄公宝物保存会
長野県気象累年報　明治22～27年	長野測候所
長野県気象年報　昭和27～28年	〃
長野県史通史編第三巻中世二	長野県史刊行会
〃　第四巻近世一	〃
芸能の谷〈伊那谷〉第一巻　日本芸能史のルーツ	三隅治雄
〃　〃　第二巻　芸能のパノラマ	〃
〃　〃　第三巻　写真・祭り全集	〃
〃　〃　第四巻　山国の文化再興	〃
頸城村史　通史編	頸城村史編さん委員会
〃　資料編	〃
角川日本地名大辞典40　福岡県	角川書店
和時計調査報告　垂揺球儀	和時計学会
世界の日時計	豊住書店
日時計＝最古の科学装置	海鳴社
日本の時刻制度	白石静男
日本アマチュア天文史	佐竹久男
星座めぐり　春夏秋冬	小川茂男
惑星のリングはなぜあるのか	岩波書店
信州のルネサンス	信濃毎日新聞社
日本列島―その形成に至るまで―(I)	古今書院
〃　(II上)	〃
〃　(II下)	〃
〃　(III上)	〃
〃　(III中)	〃
〃　(III下)	〃
古文化財の科学	思文閣
明治農書全集　第11巻	農山漁村文化協会
愛知大学綜合郷土研究所研究叢書II　近世の山間村落	名著出版
民俗博物館論考	慶友社
比較考古学試論	雄山閣
骨角器の研究縄文篇 I　考古民俗叢書(22)	慶友社
〃　II　〃　(23)	〃
東アジア葬・墓制の研究	第一書房
仏教民俗学大系２　聖と民衆	名著出版
〃　３　聖と他界観	〃

書　　名	発行所
図説　われらの太陽系２　太陽のすべて	朝倉書店
〃　３　水星のすべて	〃
〃　４　金星・地球・火星	〃
〃　５　月のすべて	〃
〃　６　小惑星・木星のすべて	〃
〃　７　土星のすべて	〃
近江文化第１～24号	近傳建設後援会
民俗文化第１～27号	滋賀民俗学会
〃　第28～51号	〃
〃　第52～75号	〃
〃　第76～99号	〃
〃　第100～123号	〃
〃　第124～147号	〃
〃　第148～171号	〃
〃　第172～195号	〃
〃　第196～219号	〃
〃　第220～231号	〃
北海道の歳時習俗	明玄書房
東北の歳時習俗	〃
南中部の歳時習俗	〃
増補改訂　正倉院宝物　北倉	朝日新聞社
北中部の歳時習俗	明玄書房
関東の歳時習俗	〃
近畿の歳時習俗	〃
四国の歳時習俗	〃
中国の歳時習俗	〃
九州の歳時習俗	〃
沖縄奄美の歳時習俗	〃
松代の大本営	郷土出版社
奈良国立文化財研究所基準資料VII瓦編６	真陽社
〃　〃７	〃
〃　〃８	〃
〃　〃９	〃
北陸の古代寺院	桂書房
宇宙天文大辞典	丸善
長野県の大正時代(上)・(下)	図書刊行会
長野県の風土記	旺文社
山国の生活誌　伊那谷１	新葉社
〃　〃　２	〃
国宝高松塚古墳壁画	第一法規出版

〃	森林は生きている ー森の生物たちー	〃

2 寄 贈 資 料

1) 歴 史 資 料

資料名	数量	寄贈者（敬称略）
千載松輪切り	1	若 槻 吉 区（若 槻）
抽 選 箱	1	長野市選挙管理委員会
萬 宝 図 会	1	佐 枝 藤 静 子（荒 木）
一札之事（弘化３年）	1	山 口 立 雄（新諏訪町）
村送一札之事（天保９年）	1	〃
暦一覧（明治34年・上田）	1	〃
地球図説里程（扇子）	1	〃
善光寺仁王門鬼瓦	1 対	善光寺事務局（元善町）
〃 飾り屋根瓦	12	〃
天神観念之詞	1	青 木 重 之（稲里町）
手 習 い 手 本	18	〃

2) 自 然 資 料

資料名	数量	寄贈者（敬称略）
南極VANDA LAKEの砂	1	竹 内 丑 雄（東京都）
南極Mt.EREBUSの石	1	〃
南 極 地 図	1	〃
ハワイキラウエア火山の溶岩	1	〃
宮古島サンゴ	1	〃
南 極 の 岩 石	4	児 島 秀 康（東京都）

3) 民 俗 資 料

分類	資料名	数量	寄贈者（敬称略）
衣	わ ら じ	5	若 槻 昭 隆（三 才）
	くし・こうがい	24	柄 沢 卿 太 郎（上駒沢）
	山 高 帽	1	青 木 覚 浄（篠ノ井）
	洋 服	1	〃
	大 礼 記 念 章	1	〃
	終 身 章	1	〃
	日 和 下 駄	1	青 木 福 久 松（松 代）

分類	資料名	数量	寄贈者（敬称略）
	理髪用椅子	1	磯野謙介（安茂里）
	髭そり用カップ	1	〃
	バリカン	1	〃
	燕尾服	2	丸山憲綱（三輪）
	フロックコート	1	〃
	シルクハット	1	〃
	山高帽	1	〃
	皮手袋	1	〃
	喪章	3	〃
	蝶ネクタイ	1	〃
	予備ボタン	1	〃
	カラー襟	1	〃
	革靴	1	竹之内袈裟雄（桜新町）
食	水筒	1	〃
	羽釜	1	稲葉邦正（松代）
	しぼり機	1	若槻昭隆（三才）
	七ツ鉢	1	〃
	箸立て	1	栗林亨（松代）
	菓子箱（「森永キャラメル」）	3	柄沢卿太郎（上駒沢）
	漬物桶	1	松浦長司（松代）
	こね鉢	1	〃
住	蠅とり器	1	小池あい子（丹波島）
	ねここたつ	1	牧野光弘（上松）
	有明あんどん	1	磯野謙介（安茂里）
	炉ぶち	1	稲葉邦正（松代）
	火桶	1	〃
	掛札（「教化報国」）	1	〃
	こんろ	1	〃
	手あぶり	1	栗林亨（松代）
	火鉢	1	〃
	便器	2	〃
	つぐら	1	〃
	ひのし	1	〃
生産生業（狩猟）	薬きよう	1	稲葉邦正（松代）
	火薬分量計		〃
	火薬入れ	1	〃
（養蚕）	桑切り機	1	〃
（染織）	座繰	1	〃
	糸撚り機	1	〃
	糸わく	9	酒井ふさ江（川中島）

	かみつけ板	1	宮下正次（戸隠村）
	まんがね	1	〃
	きねく	2	〃
	わす	3	〃
	はけ	21	〃
	たたきいし	1	〃
	かま	1	〃
	かみつけぼう	1	〃
	山中紙	12	〃
	くご	12	〃
	こうぞ皮	6	〃
交通・運輸・通信	商用葉書他	9	柄沢卿太郎（上駒沢）
	絵はがき	75	〃
交易	銭箱	1	磯野謙介（安茂里）
	匁ばかり	1	稲葉邦正（松代）
	棒ばかり	1	柄沢卿太郎（上駒沢）
信仰・民俗知識	御幣（荒神さん）	6	稲葉邦正（松代）
	牛の角（犬の薬用）	1	〃
	硯	1	若槻昭隆（三才）
芸能・娯楽	オルガン	1	岡本武（戸倉町）
	幻灯機	1	磯野謙介（安茂里）
	幻灯機フィルム	4	〃
	下駄スケート	1	栗林亨（松代）
	下駄スケート	1	西村武（小柴見）
	郷土玩具コレクション	271	宮澤長平（横浜市）
	レコード盤	30	柄沢卿太郎（上駒沢）
	写真帳	1	〃
年中行事	雛人形（大正15年）	2	〃
	〃（昭和6年）	4	〃
	〃（昭和27年）	1	〃
	〃（昭和31年）	3	〃
	〃 付属品（大正15年）	3	〃
	〃 〃（昭和6年）	3	〃
	〃 〃（昭和27年）	1	〃
	〃 〃（昭和31年）	1	〃
	雛人形	7	宮下つや（箱清水）
	天神祭提燈	4	檀田子供中（檀田）
	祇園祭屋台（模型）	1	小池秀子（日詰）
	盆提燈	2	柄沢卿太郎（上駒沢）

4) 文 献 資 料

書　　名	寄　贈　者
20年のあゆみ	神奈川県立博物館
静岡の花火	静岡市立登呂博物館
あかりの道具	名古屋市博物館
古図に見る日本の建築	国立歴史民俗博物館
弥生時代　米づくりの始まる頃	八戸市博物館
根室市の自然と文化財	根室市教育委員会
八戸の絵馬	八戸市博物館
西宮歴史散歩	西宮市教育委員会
年報　第3号	八戸市博物館
岩清水遺跡	望月町教育委員会
研究業績　24号	信州大学教育学部
研究報告　8	岡山県立博物館
年報　No.4	市立市川歴史博物館
福島古窯跡	木曽福島町教育委員会
年報　2	明治大学学芸員養成課程
岐阜市歴史博物館	岐阜市歴史博物館
岐阜県の名宝	〃
近世大名の生活と美	〃
美濃の和紙	〃
川合遺跡現地説明会	静岡県埋蔵文化財研究所
研究紀要 I	〃
静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査の概要	〃
横山遺跡	〃
宮下遺跡（遺構編）	〃
内荒遺跡（遺構編）	〃
有東遺跡	〃
駅逓御用留（その1）	郵政省逓信博物館
平住宿民俗誌	佐々木　勝・佐々木美智子
研究紀要　第24巻	大分県立芸術短期大学
博物館学紀要（第11）	国学院大学博物館研究室
考古学資料館紀要(3)	国学院大学考古学資料館
南極の科学　6　南隕石	知内桂三
近世・近代文書目録	沼津市歴史民俗資料館
沼津市博物館紀要11	〃　・沼津市明治史料館
東京都の自然（13号）	東京都高尾博物館
研究紀要　No.12	宮崎県総合博物館
家例年中行事	世田谷区教育委員会
史跡分布図	全国史跡整備市町村協議会 北信越地区協議会
交通博物館概要（S61版）	交通博物館
〃　ガイドブック	〃
佐原家文書 (一)	福山城博物館友の会
ふくしまの顔	福島県立博物館
研究紀要 4 号	群馬県埋蔵文化財調査事業団

所蔵目録目録	
小樽海岸の自然（海産）	〃
〃　（陸産）	〃
'86　要　　覧	北海道開拓の村
太田川の舟運	広島市教育委員会
広島市における麻苧の製造と民俗	〃
歴史研究　5月号	新人物往来社
館　　報　10号	岐阜県博物館
岐阜県立博物館調査研究報告	〃
幕末の動乱と紀州	和歌山市立博物館
年　　報　No.10	平塚市博物館
自然と文化　No.10	〃
要　　覧	元興寺文化財研究所
瑞浪市化石博物館研究報告　13号	瑞浪市化石博物館
濃飛の弥生時代	岐阜県立博物館
冷泉家の歴史と文化	石川県立博物館
尾花沢の歴史と文化	尾花沢市地域文化振興会
芭蕉と清風	芭蕉清風歴史資料館
貝塚が語る縄文人のくらし	小山市立博物館
高見原遺跡 (21)	駒ケ根市教育委員会
辻沢南遺跡 (22)	〃
高見原遺跡 (23)	〃
群馬の名宝（仏教美術）	群馬県立歴史博物館
紙	市立市川歴史博物館
萬葉乃衣食住	飛鳥資料館
高井鴻山	高井鴻山学術調査研究委員会
生涯教育に関する県民意識調査結果報告書	長野県教育委員会
自然教育園報告　18号	国立科学博物館附属自然教育園
設問板の手引	〃
研究紀要　No.10	半田市立博物館
大阪府立泉北考古資料館の概要（1986）	大阪府教育委員会
染と型紙	東北歴史資料館
豪徳寺	世田谷区教育委員会
神奈川自然誌資料　8	神奈川県立博物館
研究紀要　4号（1987）	栃木県立博物館
群馬県立歴史博物館所蔵資料目録（自然）	群馬県立歴史博物館
ひな人形と武者のぼり	佐野市郷土博物館
研究調査報告書　第14集	浦和市立郷土博物館
要　　覧　1987	神奈川大学日本常民文化研究所
館　　報　14	茨城県立歴史館
アイヌの足跡	アイヌ民族博物館
アイヌ古式舞踊	〃
アイヌと野鳥　I	〃
注口土器	大田区立郷土博物館
国立歴史民俗博物館研究報告　12集	国立歴史民俗博物館
アイヌ民族博物館研究報告	アイヌ民族博物館
館　　報　4号	箱根町立郷土博物館
埼玉県立自然史博物館研究報告（5号）	埼玉県立自然史博物館
収蔵資料目録　第1集	〃

埋蔵文化財発掘調査報告書	一宮町教育委員会
友の会活動	十日町市博物館友の会
十日町の城跡	十日町市博物館
信濃川の水害と治水	〃
民家	〃
山内軍平文庫図書目録	〃
秋田県立博物館研究報告	秋田県立博物館
収蔵資料目録　自然II	〃
施設概要	府中市郷土の森
「鏡の歴史」展	石巻市文化センター
年報　10	北九州市立歴史博物館
日本の貨幣	〃
玉手山8号墳墳丘測量調査概報	柏原市教育委員会
松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報	〃
柏原市埋蔵文化財発掘調査概報	〃
調査研究報告　2号	千葉県立大利根博物館
年報　10	千葉県立房総風土記の丘
中本田遺跡・堂の前遺跡	韮崎市教育委員会
明治の雅人たち	岐阜市歴史博物館
五島美術館名品展	〃
年報　第5号	氷見市立博物館
根井貝塚発掘調査報告書	岩手県立博物館
収蔵資料目録　第2集	〃
研究紀要　第3号	八戸市博物館
古地図	岐阜市歴史博物館
古田城跡	茅野市教育委員会
矢ノ口遺跡	〃
磯並遺跡	〃
縄文のデザイン	武居幸重
探訪善光寺	伊藤博文・糟谷雅章
星と音楽の夕べ	石川県立中央児童会館
埋蔵文化財発掘調査報告書1（本文・写真）	長野県埋蔵文化財センター
研究報告　第22号	長岡市立科学博物館
展示解説	松本市立考古博物館
有馬廃寺跡発掘調査概報	渋川市教育委員会
中筋遺跡	〃
県北部の民俗（I）	神奈川県立博物館
愛媛の自然　29巻1号	愛媛自然科学教室
〃　〃 2	〃
〃　〃 3	〃
〃　〃 4	〃
〃　〃 5	〃
〃　〃 6	〃
久万高原とその周辺の自然	愛媛県立博物館
海の貝	〃
北海道開拓の村ガイド	北海道開拓の村
北海道の手橇	北海道開拓記念館

尼崎市中ノ田遺跡II	尼崎市教育委員会
季刊　信　濃　路	信 濃 路 出 版
古代下野国の歴史	栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
蛸　の　浦　貝　塚	大舟渡市立博物館
川崎市域自然調査の報告	川崎市教育委員会
川崎市青少年科学館年報　No.4	〃
東京農工大学科学技術展'87	東京農工大学繊維博物館
立山町埋蔵文化財分布調査報告II	立山町教育委員会
辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要	〃
図書目録―原文庫―	松本市立考古博物館
安　堂　遺　跡	柏原市教育委員会
柏原市遺跡群発掘調査概報芝山古墳群・大原遺跡	〃
高井田横穴群II	〃
歴　　博　2 3	国立歴史民俗博物館
安　源　寺　III	中野市教育委員会
人生儀礼緊急調査報告書	青梅市教育委員会
山口県の自然　第5巻第7号	山口県立博物館
館　　報　10号	〃
山口県立山口博物館研究報告　第13号	〃
市　政　の　概　要	守　口　市
守口市統計書	〃
長崎市立博物館々報	長崎市立博物館
群馬県立歴史博物館紀要	群馬県立歴史博物館
年　　報　No.15　昭和61年度	福岡市立歴史資料館
年　　報　昭和61年度	半田市立博物館
長野県のシダ植物	大　塚　孝　一
地域文化〔創刊号〕1987－7	八十二文化財団
石山寺蔵　源氏物語絵展	思文閣美術館
第34回　信州書芸展図録	信 州 書 芸 会
年　　報　1987	若狭歴史民俗資料館
活動報告書　S61　No.1	福井市立郷土自然科学博物館
会　　報　第15号	福井県博物館協議会
会　　報　第9号	富山県博物館協会
化　　石	調布市郷土博テーマ館
会　　報　昭和61年度	西宮市立郷土資料館
大阪市立博物館報　No.26	大阪市立博物館
殿竹遺跡予備調査報告書	世田谷区教育委員会
槇　の　内　遺　跡	野田市遺跡調査会
貝塚博物館紀要　No.14	千葉市立加曽利貝塚博物館
丸　山　遺　跡	野田市遺跡調査会
加曽利貝塚博物館20年の歩み	千葉市立加曽利貝塚博物館
紀　　要　第4集	塩尻市立博物館
大　　蔵	世田谷区教育委員会
砧中学校遺跡	〃
鳥山南原遺跡	〃
下神明遺跡II	〃
根津山遺跡群	〃
滝ケ谷遺跡	〃

1985年度　年　　報	世田谷区教育委員会
世田谷の近代建築　第１輯	〃
壬　遺　跡　1987	国学院大学文学部考古学研究室
物見処遺跡　1987	〃
明治大学刑事博物館目録　第52号	明治大学刑事博物館
明治大学刑事博物館資料　第９集	〃
明治大学刑事博物館年報　18	〃
後　田　遺　跡	群馬県教育委員会
三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚上青梨子古墳	〃
史跡　平出遺跡	塩尻市教育委員会
ウォッチング大百科	学習研究社
後　平　遺　跡	佐久町教育委員会
新発田市の文化財	新発田市教育委員会
土口将軍塚古墳	長野市教育委員会
昭和59年度収集収蔵品目録	福岡市博物館建設準備室
大山の信仰と歴史	平塚市博物館
古代の浜松	浜松市博物館
企画展　わ　ら	岐阜市歴史博物館
山形県立博物館報　S61	山形県立博物館
蔵　王　連　峰	〃
山形県立博物館研究報告　第７号	〃
〃　第８号	〃
館　報　第８号	富山市科学文化センター
古代人の食生活	上田市立信濃国分寺資料館
浮世絵に描かれた沼津	沼津市明治史料館
川崎交通史展	川崎市立産業文化会館
懸仏への祈り	石川県立歴史博物館
国立歴史民俗博物館研究報告　第13集	国立歴史民俗博物館
〃　第14集	〃
〃　第15集	〃
富士見市遺跡群Ⅴ	富士見市教育委員会
勝瀬原遺跡群Ⅰ	富士見市遺跡調査会
針ケ谷遺跡群	〃
群馬県立歴史博物館調査報告書　第３号	群馬県立歴史博物館
相模原の炭焼き	相模原市教育委員会
橋　本　遺　跡	〃
埋蔵文化財発掘調査概報集	〃
柴崎第１号墳発掘調査報告書	一宮町教育委員会
櫛田神社収蔵品目録	福岡市教育委員会
常設展示解説　1987	世田谷区郷土資料館
世田谷区立郷土資料館概要	〃
大場家と代官屋敷	〃
あかりのコレクション	〃
岐阜市歴史博物館年報　No.1	岐阜市歴史博物館
常設展示の案内	〃
研究紀要　1987	〃
日本地質文献目録　1986	地質調査所
研究連絡誌　第17号	千葉県文化財センター

足羽山の今昔	〃
宮永家文書　その一	氷見市立博物館
森将軍塚古墳　1986	更埴市教育委員会
江浦の水祝儀	沼津市教育委員会
長浜城跡詳細分布調査報告書	〃
大平新城館跡発掘調査報告書	〃
豆生田遺跡詳細分布調査報告書	〃
雄鹿塚遺跡詳細分布調査概報	〃
平沼吹上遺跡発掘調査報告書	〃
上野国分僧寺・尼寺中間地域	群馬県教育委員会
下東西遺跡	〃
収蔵資料目録 4	九州歴史資料館
妻有の女衆と縮織り	十日町市博物館
久保寺今昔	久保寺史刊行会
狩野派の画人たち	名古屋市博物館
防災科学技術研究資料第119号　長野県における被災地震史料集	諏訪　彰
防災科学技術研究資料第121号　松代地震センター20年のあゆみ	〃
松代群発地震資料報告	〃
善光寺の匠と技	相原文哉
戸倉町の文化財（記念物編）	戸倉町教育委員会
〃　（石造文化財編）	〃
戸倉町古文書目録	〃
研究紀要　第4号	神戸市立博物館
神戸市立博物館年報　No.4	〃
時報　第19号（S62）	仙台市科学館
鳥羽遺跡（本文・図版）	群馬県教育委員会
糸井宮前遺跡 II	〃
日高遺跡	〃
南部馬と人びとのくらし	八戸市博物館
歴博　24号	国立歴史民俗博物館
いたばし風土記	板橋区教育委員会
徳丸三ツ和遺跡	〃
中山道と板橋宿	〃
板橋区立郷土資料館紀要　第6号	〃
志村坂上遺跡B地点	〃
成増との山遺跡予備調査報告書	〃
いたばしの河川	〃
いたばしの文化財	〃
昭和54・55・56年度　遺跡発掘調査報告	野本孝明
昭和57年度　遺跡発掘調査報告	〃
昭和58年度　〃	〃
昭和59年度　〃	〃
昭和60年度　〃	〃
久ケ原遺跡	〃
アイヌ文化の基礎知識	アイヌ民族博物館
大田区遺跡地名表	大田区教育委員会
伊場遺跡遺物編 4	浜松市教育委員会
植物化石展	福島県立博物館

吹之江遺跡	新島本村教育委員会
館蔵品目録　1985	姫路市立美術館
年報　昭和59年度	〃
姫路城	姫路市
高井田遺跡 II	柏原市教育委員会
大阪市立自然史博物館館報	大阪市立自然史博物館
飛鳥・藤原宮発掘調査概報　17	奈良国立文化財研究所
竹づくし文化考	小出九六生
房総のむら年報１ ―昭和61年度―	千葉県立房総のむら
'87　要覧	北海道開拓記念館
岩手の風土と伝統産業	〃
日本海―空白の中世蝦夷世界をさぐる―	〃
十二講	下高井郡山ノ内町和合会
文化財調査報告書　第17集	前橋市教育委員会
〃　第16集	〃
前橋の文化財保護	〃
地学教育　第40巻第５号	日本地学教育学会
ガンダーラ彫刻展	松屋銀座美術部
小角田前遺跡	群馬県教育委員会
地域文化　Vol. 2　1987－10	八十二文化財団
'87　要覧	北海道開拓の村
小松城	小松市立博物館
城下町・名古屋	名古屋市博物館
館蔵品図録 II	〃
はこぶ	海南市立歴史民俗資料館
加賀藩・富山藩の天文暦学	富山市科学文化センター
神奈川県立博物館研究報告　人文科学―13号―	神奈川県立博物館
飛騨の匠	岐阜県博物館
第21回企画展　開館５周年記念図録	栃木県立博物館
神奈川自然誌資料２（1981）	神奈川県立博物館
丹沢山地東斜面とその山麓部の蘚苔類目録第一報	〃
八王子の歴史と文化	八王子市郷土資料館
八王子市郷土資料館年報　S 59、60年度	〃
石川日記（九）	国立公園協会
昭和60年度　自然環境影響調査報告書	〃
長岡の文化財	長岡市教育委員会
長岡市の教育	〃
展示解説	長岡市立科学博物館
長岡市立科学博物館報　No.50	〃
〃　No.51	〃
横山遺跡試掘調査概報	〃
三貫梨遺跡―第１次調査―	長岡市教育委員会
藤橋遺跡	〃
三貫梨遺跡―第２次発掘調査―	〃
横山遺跡	〃
笹山遺跡	〃
大萱場遺跡	〃
福井県立博物館紀要　第２号	福井県立博物館

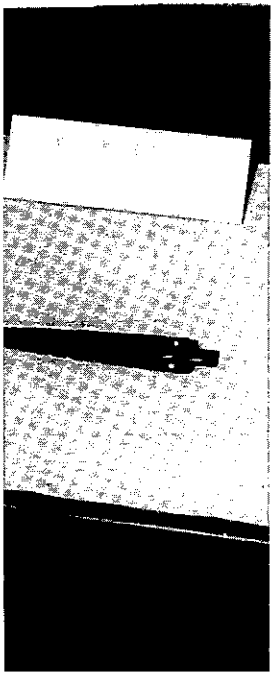
季刊　星の手帖　86秋	星の手帖社
会津の仏像	福島県立博物館
東北歴史資料館年報　昭和61年度	東北歴史資料館
研究紀要　第12巻	〃
茂木町小貫地区文化財所在調査	栃木県立博物館
朝鮮通信使と紀州	和歌山市立博物館
研究紀要　2	〃
和歌山市立博物館報	〃
北浦古墳群・立石墳墓群	豊岡市教育委員会
日撫・正福寺谷横穴墓群	〃
日撫・備後衆山砦址	〃
玉手山遺跡	〃
特別展　若狭の秘仏	福井県立若狭歴史民俗資料館
自由美術'87	自由美術協会
歴博　第25号	国立歴史民俗博物館
九品仏一浄真寺	世田谷区立郷土資料館
奈良時代の都と出雲びとの世界	島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
山々への祈り	福井県立博物館
〃　追録	〃
教育の原点をもとめて	岡山県立博物館
年報　第12号	読谷村歴史民俗資料館
読谷村立歴史民俗資料館紀要　第11号	〃
県外出土の信楽焼	近江風土記の丘資料館
厚木の考古資料 I	厚木市教育委員会
箱根神社の歴史と祭	箱根町立郷土資料館
北国を駆けた戦国の武将たち	石川県立歴史博物館
中根雪江筆　橋本左内事迹	福井市立郷土歴史博物館
田中城と本多氏	藤枝市郷土博物館
藤枝の歴史	〃
藤枝市郷土博物館	〃
北上市立博物館研究報告　第6号	北上市立博物館
伊達政宗と家臣たち	仙台市博物館
みちのくの名宝	〃
京都大学文学部博物館	京都大学文学部博物館
増村益城展	熊本県立美術館
本郷尺地遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
地学教育　第40巻第6号	日本地学教育学会
北上川の伝説	北上市立博物館
昭和59年度　国庫補助事業による出土遺物の実態調査報告書（沖縄・九州・中国・四国地方）	元興寺文化財研究所
〃（近畿・中部・関東地方）	〃
昭和61年度　国庫補助事業による出土遺物の実態調査報告書	〃
昭和58年度　国庫補助事業による出土青銅製遺物の実態調査報告書	〃
須永文庫資料展	佐野市郷土博物館
古代官道と甲斐の文化	山梨県立考古博物館
東国における古式須恵器をめぐる諸問題　第I分冊	北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
〃　第II分冊	〃
毎日グラフ別冊　古代史を歩く[5]　東国	毎日新聞社
特別展　霞ケ浦の貝塚文化	茨城県立歴史館

資料図録 No.37	郵政省通信博物館
駿河　楠ケ沢古墳群	静岡市教育委員会
瀬名3号墳	〃
一橋徳川家名品図録	茨城県立博物館
山村のくらしI	京都府立山城郷土資料館
四ツ池古墳群	浜松市文化協会
龍門池遺跡	〃
浜松市半田山遺跡(V)発掘調査報告書	浜松市教育委員会
愛媛の自然　29巻7号	愛媛自然科学教室
〃　29巻8号	〃
〃　29巻9号	〃
〃　29巻10号	〃
〃　29巻11号	〃
〃　29巻12号	〃
神奈川大学日本常民文化研究所調査報告　第12集 仕事着－西日本編	神奈川大学日本常民文化研究所
シンポジウム須坂の古墳文化を語る	須坂市教育委員会
長野県埋蔵文化財センター年報3	長野県文化財センター
草野ダム関連遺跡発掘調査報告III	山口　明
日向遺跡　母畑地区遺跡発掘調査報告16	〃
〃　19	〃
上ノ原遺跡	〃
真野ダム関連遺跡発掘調査報告V	〃
国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告IV	〃
文学部学芸員課程研究報告　第1冊	立命館大学文学部
大塚家文書	八王子市郷土資料館
佐久市立近代美術館年報　昭和58～61年度	佐久市立近代美術館
年報　昭和61年度	神奈川県立博物館
八王子市千人同心関係文書目録	八王子市教育委員会
地域文化　Vol 3　1988－1	八十二文化財団
地方債月報　1987.12	地方債協会
写真で見る芋井小学校の今昔	芋井小学校統合八十周年記念誌編集委員会
第28回企画展　上州の正月	群馬県立歴史博物館
長野市の埋蔵文化財第23集　横田遺跡群・富士見遺跡	長野市教育委員会
長野市の埋蔵文化財第22集　長野吉田高校グランド遺跡	〃
長野市の埋蔵文化財第21集　芹田小学校遺跡	〃
長野市の埋蔵文化財第20集　三輪遺跡(2)	〃
保存科学研究室紀要(3)	元興寺仏教民俗資料研究所
〃　(4)	〃
〃　(5)	〃
〃　(6)	〃
特別展資料16　灯台のしくみ	和歌山市立こども科学館
〃　17　紀の川の自然	〃
〃　18　地図の世界	〃
〃　20　世界の木のおもちゃ	〃
〃　21　塩の科学	〃
ガイドブック－展示解説－	〃
あゆみ　S56.5～S61.6	〃
特別展　日本の厨	〃

武田信玄展	サンケイ新聞社
古代史を歩く⑨　信濃・越	毎日新聞社
第3回特別展　暦と和時計	浜松市博物館
綾羅木郷遺跡　1987	下関市教育委員会
岐阜県の名宝	岐阜市歴史博物館
岐阜市歴史博物館年報　No.1	〃
小中学校教師用　博物館団体利用の手引	〃
岐阜市歴史博物館	〃
日本刀の美と世界の刀	鹽竈神社博物館
南富士台遺跡　1987	市原市文化財センター
沢遺跡　1987	〃
下鈴野遺跡　1987	〃
下ケ谷台遺跡　1987	〃
川中遺跡　1987	〃
上大堀遺跡　1987	〃
毛尻遺跡　S58	毛尻遺跡調査会
常設展示の案内	岐阜市歴史博物館
昭和62年度　特別展 わが町の宝 北九州市の指定文化財展	北九州市立歴史博物館
昭和61年度　北九州市立歴史博物館年報11	〃
第22回企画展　おっと　ハイカラさん	栃木県立博物館
ガンダーラ彫刻展	欧亜美術
那須の遺跡	栃木県立博物館
昭和61年度　佐野市郷土博物館年報	佐野市郷土博物館
立教大学博物館研究	立教大学
歴史読本　4月号	新人物往来社
アジア稲の起源と稲作圏の構造	別府大学付属博物館
わかさのうみ紀要1	福井県立若狭歴史民俗資料館
宮永家文書　その二	氷見市立博物館
長野県の歴史	河出書房新社
縄文文化研究部会紀要1 高山寺式土器をめぐって―縄文早期の諸問題―	帝塚山考古学研究所
歴史考古学を考える―古代瓦の生産と流通―	〃
下斉田・滝川A遺跡　滝川B・C遺跡	群馬県教育委員会
長野県の文化財	八十二文化財団
時計	小田幸子
駒ケ根市の文化財	駒ケ根市の文化財編集委員会
コペル21　3月号	牧野昇
本渡市の文化財	本渡市教育委員会
資料目録　1981.4	歴史民俗資料館
埋蔵文化財発掘調査概報III	三重県教育委員会
でんきさろん　第18号	関西電力滋賀支店
博物館指導者研究協議会	日本博物館協会
博物館を巡る環境と博物館が作り出す環境	〃
所蔵資料目録　第3集	松本市教育委員会
研究報告　第10巻	香川県自然科学館
丹後郷土資料館報	京都府立丹後郷土資料館
はにわ人の世界	埼玉県立さきたま資料館

3 寄託資料

分野	資料名	員数	寄託者（敬称略）
歴史	南原村街道町並図	1	岡沢俊雄（川中島）
	当村御高所持人別帳	1	〃
	間取図（3分冊）	70	〃
民俗	石祠（お八幡さん）	1	相沢忠男（松代町）
	石祠（お稲荷さん）	1	〃
	蓮台	1	
	葬具雛形	1式	川田領家区（若穂）
	百万遍数珠	2	〃
	盤木	1	〃
	棺桶材	1式	〃
	大幟（高井鴻山筆）	1対	上水鉋北河原組（川中島）
考古	銅剣	1	佐良志奈神社（戸倉町）
自然	哺乳動物の肩胛骨化石	1	塚田卓（安茂里）



お八幡さん
（相沢忠男氏寄託）

節 ＼ 内訳	予算額	運営費	稲を伝えた人々	森の文化	子どもの生活誌	プラネタリウム	各種教室等	A事業	一般管理	企画展
(1) 報酬	1,947	1,947								
(2) 給料	26,715	26,715								
(3) 職員手当等	16,752	16,247	120	135	100		150			0
(4) 共済費	6,957	6,505							452	0
(7) 賃金	14,564	9,529	180	600	150		200		3,855	50
(8) 報償費	1,485	155	250	650	150		180			100
(9) 旅費	962	322	150	350	80		10		30	20
(11) 需用費	32,733	25,571	450	1,830	670	300	180	270	3,237	225
(消耗品費)	(3,841)	(2,161)	(40)	(800)	(50)	(100)	(90)	(270)	(310)	(20)
(燃料費)	(3,531)	(2,933)							(598)	
(食糧費)	(155)	(70)	(10)	(30)	(20)		(10)		(10)	(5)
(印刷製本費)	(5,880)	(2,700)	(400)	(1,000)	(600)	(200)	(80)		(700)	(200)
(光熱水費)	(18,651)	(17,031)							(1,584)	
(修繕料)	(701)	(671)							30	
(医薬材料費)	(10)	(5)							5	
(12) 役務費	9,371	4,277	350	4,000	350	0	0		394	0
(13) 委託料	19,002	14,000	550	900	300	880		300	1,872	200
(14) 使用料及び賃借料	1,202	572	50	300	100		20	132	28	
(15) 工事請負費	4,680	100	200	300	100			3,930	50	
(16) 原材料費	270		100	100	50					20
(18) 備品購入費	3,998	1,500		150	150			2,000	198	
(19) 負担金及び交付金	62	62	0	0	0	0	0	0	0	0
(27) 公課費	9	9								
計	140,709	107,511	2,400	9,315	2,200	1,180	740	6,632	10,116	615

A事業…館内排水路補修工事・プラネタリウムズームスライド投影器購入など

2　管理業務（委託料・役務費）

（単位：千円）

名称	金額
空調設備等管理	5,450
空調機器保守（分館）	72
し尿浄化槽管理	600
清掃業務（本館）	6,000
〃　（分館）	1,550
庭園管理	450
くん蒸処理	1,550
エレベーター保守点検	580
警備業務（本館）	384
〃　（分館）	180
プラネタリウム保守点検	770
ターボン冷凍機保守点検	500
合計	18,086

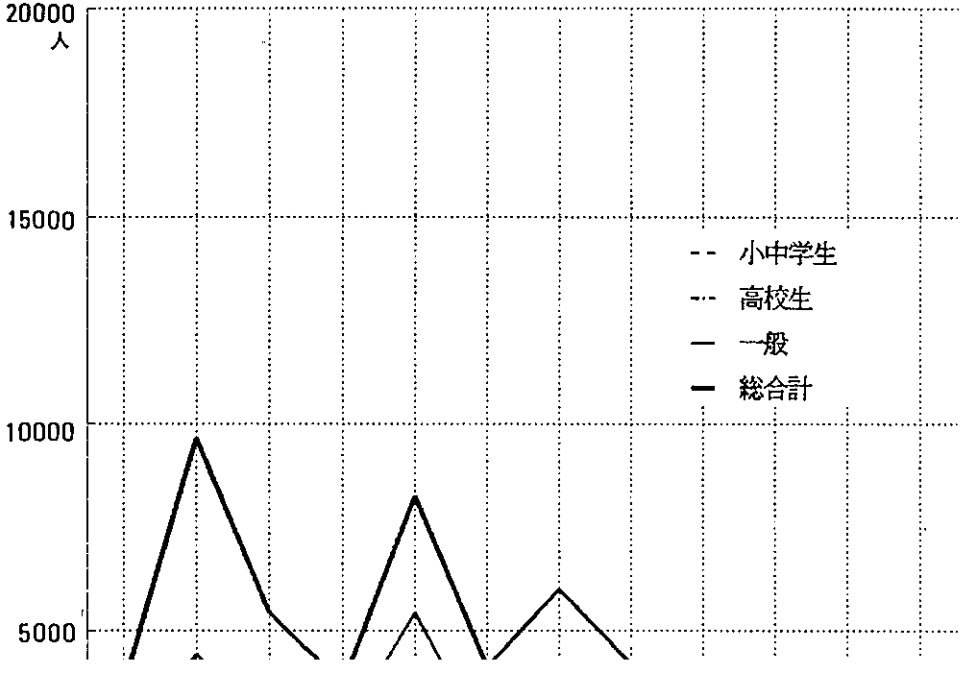
3 入 館 者 状 況

（昭和62年４月～昭和63年３月）

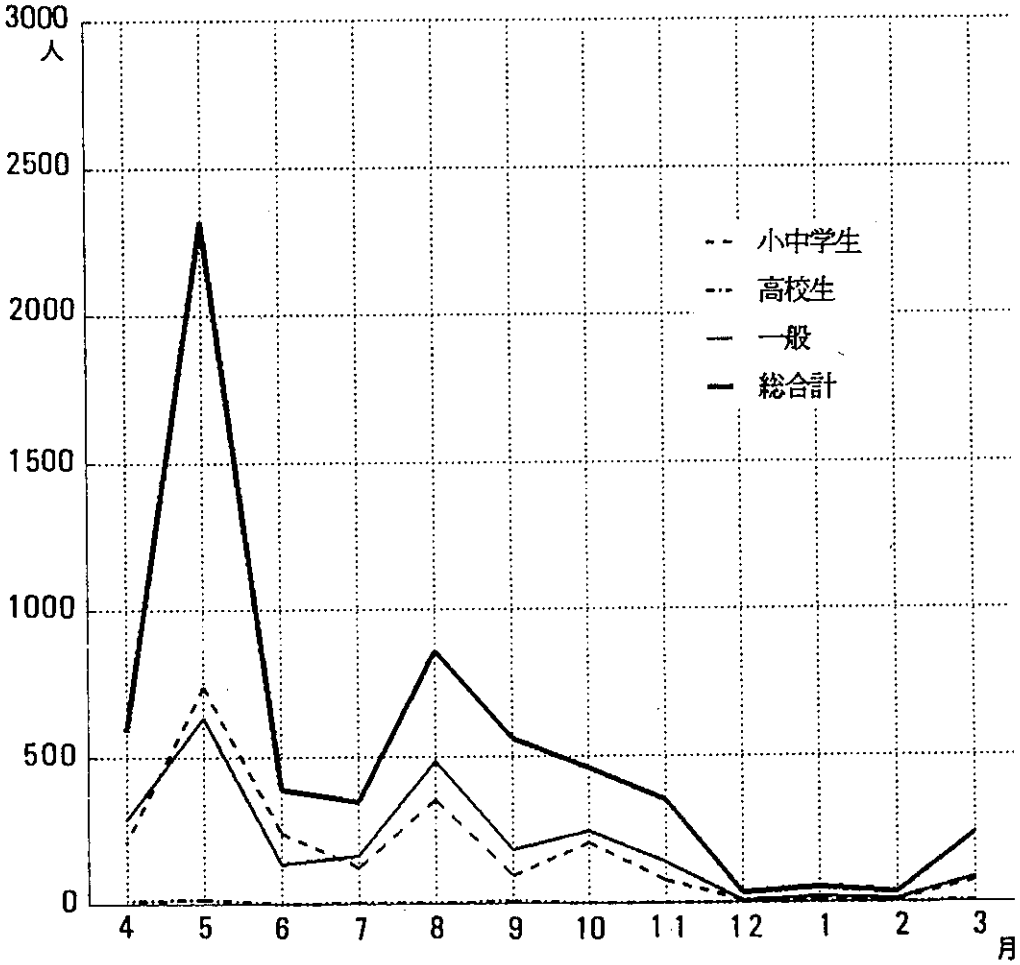
1） 博物館常設展示

常設展示月別入館者数

区分＼月	個人			団体			合計			視察等	総合計	開館日数	一日平均
	一般	高校生	小中学生	一般	高校生	小中学生	一般	高校生	小中学生				
4	1,491	49	885	724	187	203	2,215	236	1,088	134	3,693	25	147
5	2,745	111	1,164	1,696	276	3,272	4,441	387	4,436	399	9,663	27	358
6	1,249	30	417	1,360	0	2,301	2,609	30	2,718	77	5,434	25	217
7	1,349	41	487	1,201	30	573	2,550	71	1,060	29	3,710	27	137
8	3,956	251	2,113	1,487	35	296	5,443	286	2,409	107	8,245	26	317
9	1,196	30	644	989	0	890	2,185	30	1,534	375	4,124	24	171
10	1,515	45	713	2,062	317	1,302	3,577	362	2,015	47	6,001	27	222
11	1,581	53	504	1,771	0	174	3,352	53	678	111	4,194	25	168
12	433	14	113	144	0	269	577	14	382	78	1,051	24	44
1	598	24	230	36	0	0	634	24	230	8	896	17	53
2	845	32	288	104	0	151	949	32	439	31	1,451	23	63
3	2,048	88	948	257	0	10	2,305	88	958	91	3,442	27	127
計	19,006	768	8,506	11,831	845	9,441	30,837	1,613	17,947	487	51,884	297	169



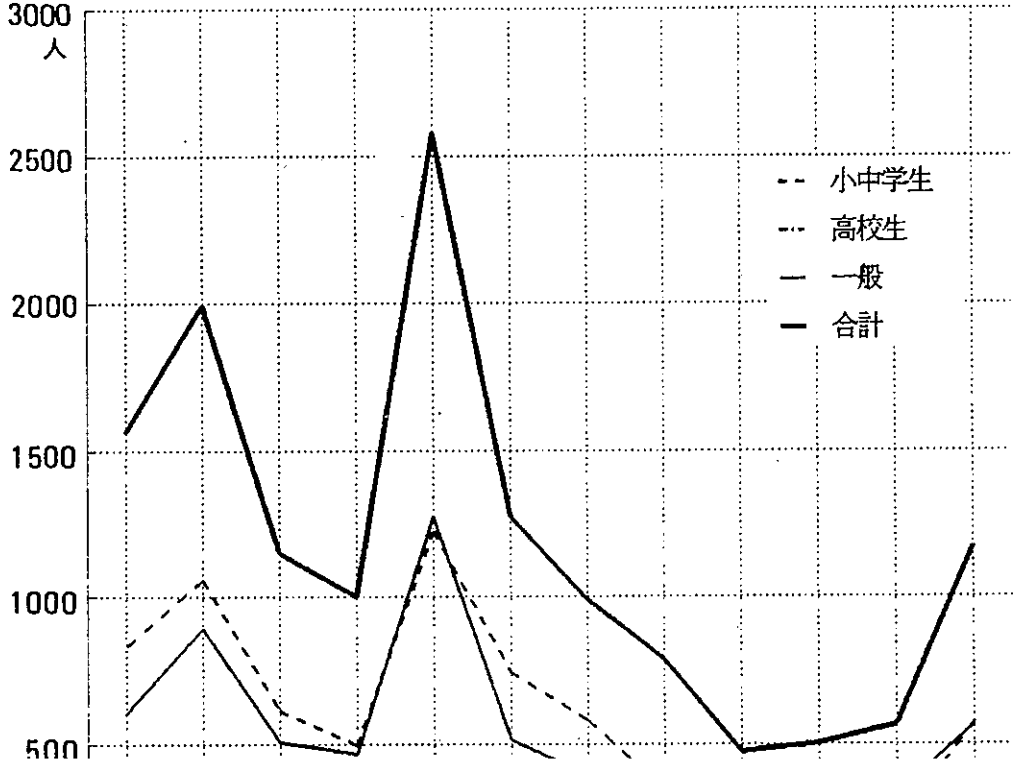
5	594	17	480	41	0	260	635	17	740	928	0	2,320	27	8
6	136	3	99	0	0	144	136	3	243	8	2	392	25	1
7	148	4	102	19	0	25	167	4	127	49	0	347	28	1
8	440	4	323	47	0	33	487	4	356	14	0	861	26	3
9	184	9	95	0	0	0	184	9	95	275	0	563	24	2
10	184	1	136	62	0	68	246	1	204	8	0	459	27	1
11	140	3	78	0	0	0	140	3	78	129	0	350	25	1
12	10	0	9	0	0	0	10	0	9	16	0	35	24	
1	19	0	8	0	0	0	19	0	8	25	0	52	22	
2	14	0	10	0	0	0	14	0	10	12	0	36	23	
3	85	6	74	0	0	0	85	6	74	68	0	233	27	
計	2,244	60	1,628	169	0	530	2,413	60	2,158	1,604	4	6,239	303	2



3) 天体学習室（プラネタリウム）

プラネタリウム月別入館者数

区分	個人			団体			合計			総合計	実施回数(回)	一回平均(人)
	一般	高校生	小中学生	一般	高校生	小中学生	一般	高校生	小中学生			
4	588	35	733	17	94	97	605	129	830	1,564	33	47
5	800	44	818	92	0	242	892	44	1,060	1,996	44	45
6	464	32	443	44	0	169	508	32	612	1,152	31	37
7	457	35	427	12	0	70	469	35	497	1,001	37	27
8	1,263	54	1,205	10	29	18	1,273	83	1,223	2,579	59	44
9	505	16	727	10	0	18	515	16	745	1,276	36	35
10	368	16	426	26	0	154	394	16	580	990	34	29
11	399	15	308	30	0	35	429	15	343	787	38	21
12	254	12	208	0	0	0	254	12	208	474	29	16
1	273	8	222	0	0	0	273	8	222	503	22	23
2	333	2	229	0	0	0	333	2	229	564	28	20
3	565	35	572	0	0	0	565	35	572	1,172	42	28
計	6,269	304	6,318	241	123	803	6,510	427	7,121	14,058	433	32



30日	10,054人	335人

(2) 第16回企画展「稲を伝えた人々」
昭和62年7月19日～8月30日

開催日数	入館者計	1日平均
37日	9,876人	267人

(3) 第17回特別企画展「森の文化」
昭和62年10月4日～11月23日

区分	一般	高校生	小中学生	合計
個人	440	1	161	602
団体	1,338	0	28	1,366
合計	1,778	1	189	1,968

開催日数　44日　1日平均　45人

(4) 第18回企画展「子どもの生活誌」
昭和63年2月21日～3月27日

開催日数	入館者計	1日平均
31日	3,612人	117人

(5) 自然史館第2回企画展「茶臼山の地すべり」
昭和62年7月26日～10月25日

開催日数	入館者計	1日平均
77日	1,983人	26人

4 利 用 状 況

1) 資料の館外貸出

貸出番号	貸出先	資料名	点数
62－1	上田市立信濃国分寺資料館	羽釜（浅川西条遺跡）、把手付甑（古屋敷遺跡）	2点
2	〃	軒平瓦・平瓦（田中窯址）	2点
3	松本市立考古博物館	石器作りビデオテープ	1点
4	長野県史刊行会	中条村宮遺跡出土抜歯人骨紙焼き	1点
5	〃	対旭館等写真資料	23点
6	〃	おふぎや引札紙焼き	1点
7	〃	長野市中ほかの紙焼き	7点
8	河出書房新社	宝貝形土製品（旭町遺跡）他の紙焼き・スライドフイルム	9点
9	徳島市文化振興公社	カラー天体写真紙焼き	2点
10	長野県史刊行会	善光寺瓦（牟礼バイパス遺跡）のスライドフィルム	2点
11	〃	塩崎遺跡群第Ⅲ墓坑群のスライドフィルム	1点
12	河出書房新社	育良神社三州街道中馬絵馬ほか紙やき・スライドフィルム	3点
13	篠ノ井公民館	寛保2年戌の満水絵図（一部）紙焼き	1点
14	毎日新聞社	伊勢宮遺跡木棺墓副葬品一括土器ほか紙焼き	2点
15	サンケイ新聞社	「川中島の戦い」マルチスライドの音声とスライドフィルム	一式
16	長野地区タクシー事業協同組合	常設展示情景ほか紙焼き・スライドフィルム	6点
17	NHK長野放送局	冷蔵器・自転車ほか民俗資料	13点
18	長野県史刊行会	素環頭大刀（若穂上和田）ほか紙焼き・実測図	3点
19	信濃教育会	天体写真スライドフィルム	1点

2）資料等の特別利用

利用番号	申請者名	利用資料名	点数	利用の方法	利用月日
62－1	富田与（筑波大学）	松代町西条絵図（写真）	1	複写	4月1日
2	長野県史刊行会	川田条里・石川条里遺構出土遺物		写真撮影	5月2日
3	島田茂文（中野市）	収蔵展展示の民具		写真撮影	5月10日
4	テレビ信州	収蔵展		報道	5月16日
5	篠ノ井農協	内行花文鏡（川柳将軍塚古墳）	1	写真撮影・掲載	5月19日
6	読売新聞	収蔵展		報道	5月20日
7	岩佐哲夫（川中島小）	古墳時代遺物		写真撮影	5月20日
8	須坂市立博物館	湯谷1号古墳柄頭X線写真		写真掲載	5月24日
9	上西兵八	常設展示積石塚他		写真撮影	6月20日
10	坂本修身（大阪市）	松代地震観測所模型		〃	7月3日

23	氏家等（北海道開拓記念館）	カンジキ	1	写真撮影	10月29日
24	毎日新聞社	常設展示（考古）		写真撮影・掲載	11月1日
25	市民新聞社	特別展	1	報道	11月7日
26	長野県文化財保護協会	三才善光寺道標	1	写真撮影	11月9日
27	長野建設事務所	長野市地籍図（明治・大正）		写真撮影	11月10日
28	小林秀光（名古屋市）	松代地震観測所模型		写真撮影	11月26日
29	毎日新聞社	箱清水式土器セット	1	写真撮影	12月15日
30	宮本忠長建築設計事務所	エントランスホール		写真撮影	12月24日
31	鳥海陽子（松代町）	農具		模写	12月24日
32	日本電信電話株式会社	消防ポンプ		写真撮影・掲載	1月7日
33	鳥海陽子（松代町）	農具		模写	1月14日
34	毎日新聞社	企画展		報道	2月21日
35	環境建築事務所	博物館建物		写真撮影	2月21日
36	長野県史刊行会	田村騒動連判状	1	掲載	2月25日
37	宇佐美龍夫（信州大学）	小林家文書・大平文書ほか	8	熟覧	3月17日
38	織田隆三（大和高田市）	唐箕・もみすり臼ほか民具	6	写真撮影	3月17日
39	濱田浄人（国立科学博物館）	常設展示		写真撮影	3月17日
40	林采震（筑波大学）	収蔵庫		写真撮影	3月24日

V 彙　　報

1　長野市立博物館協議会

1）協議会委員

（任期　昭和61年9月25日から2年間）

職名	氏名	役職	選出区分
会長	花岡直一	元長野市教育長	学校教育（歴史）
副会長	小出ふみ子	長野市文化芸術協議会副会長	社会教育（文芸）
委員	浅川欽一	長野市文化財保護審議会委員	学識経験（民俗）
〃	倉田稔	長野市後町小学校長	学校教育（動植物）
〃	小林計一郎	長野郷土史研究会々長	社会教育（地方史）
〃	瀬戸仁	信州大学教育学部教授	学校教育（国語教育）
〃	島垣	信州大学工学部教授	〃（地震）
〃	中島正美	元長野県教育次長	学識経験
〃	矢沢頼忠	松代藩文化施設管理事務所々長	社会教育
〃	米山一政	長野市文化財保護審議会々長	学識経験（歴史）

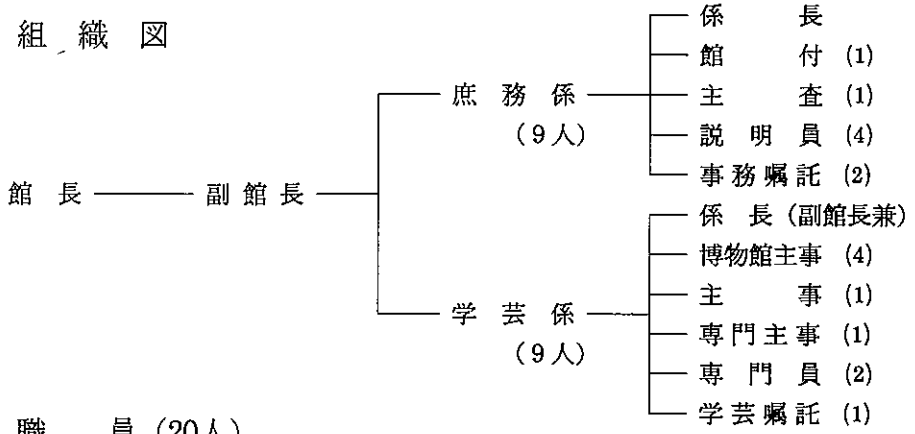
2) 審議会審議経過

和62年10月27日開催
(1)博物館の現況について
(2)今後の博物館運営について
(3)その他

昭和63年3月10日開催
(1)昭和62年度博物館事業について（報告）
(2)昭和63年度事業計画及び予算について
(3)その他

2 組　　織

1) 組織図



2) 職　員（20人）

長	掛川一夫
館長	山口純一
務係長	佐野孝康
付	深沢辰雄
査	石坂きよ
明員	清水正志
〃	薮崎　巌
〃	西川昭史
〃	高野祥子
務嘱託	小池清典（自然史館）
	両角和子（　〃　）
芸係長	（山口純一）
物館主事	山口　明（学芸員、考古）
〃	大蔵　満（　〃　、自然）
〃	安室　知（　〃　、民俗）

長野の方に講演に来るというと非常に億劫なんです。それは、私は下伊那の高森町（旧市田村）に生まれて育ちまして、今は縁があって木曽に養子に入ったもので木曽に住んでいますが、それで南信のことは一応強いのですが、北信には弱いのです。

弥生時代というと、北信の弥生文化は非常に大事なんです。北信地方で研究している桐原健さんや笹沢浩さんといつもけんかするわけで、桐原健さんや笹沢浩さん達は、千曲川の方が大事だとい うわけです。ですから、こういうところへ来て、千曲川の話をしていくと非常に叱られてしまうの ではないかと思いますが、いろいろと教えていただきたいと思います。

何故、弥生時代を研究するようになったかということを、出会いということで話をしていきたい と思います。

考古学の時代というのは、旧石器時代からで、私は中央道で発掘した時は、昭和の遺跡まで掘っ ています。昭和の初め頃、壊した住居の跡を掘ってその池を発掘した時には、いろんな茶碗のかけ らが出てきました。昭和のものですから、普通は捨ててしまうのですが、掘ったものですからみな なとっておこうということで、全部木箱に入れて、とっておいたわけです。そうしましたら、最近 陶磁器の研究が盛んになってきまして、その中から伊万里焼きのすばらしい皿がみつかりました。 いわゆる考古学の時代というのは、10数万年も前から昭和の時代まで地下に埋まっているものを 私達が掘り出してそれをもとにして人々の生活を復元するということにあるわけです。

発掘するということは壊すということとも同じわけです。私も随分遺跡を壊してきています。 きほどちょっと時間があったもので下で待っていた時に、明治大学の大塚初重先生が見えていて 年ぶりかでお会いしました。私が明治大学に入った時は、大塚さんはまだ助手だったのですが、 はもうひげをはやして随分貫禄の先生になっておられました。考古学の実習ということで大室古 群にきておられるということでした。私が大学2年の時に考古学の実習で発掘に行ったのは、名 屋の西志賀貝塚でした。下の特別展示室の最初の陳列ケースにある土器が西志賀貝塚の土器です あれは、私が大学2年の時の夏休みでした。名古屋ですから暑くて暑くてたまらなかったです。 寺で合宿でした。しかも雨が降っていまして遺跡へいくと貝塚のトレンチが一晩で水でいっぱい なっているのです。それをバケツで汲み出すのですが、1メートル以上もたまっている水はなか か汲み出せなくて、ポンプで汲み出しながら掘ったという非常に苦労して発掘した貝塚なのです その土器があそこにあります。また見ていただくとわかりますが、その横に、林里遺跡の遠賀川 土器の壺があります。西志賀貝塚を発掘していましたら、ちょうどまだ梅雨があけなくて、雨・ で途中で発掘ができなくなりまして、それでは、諏訪へ行ってちょっと発掘をやるかということ なりました。名古屋から諏訪に行くには中央線に乗っていくのが一番近いということで名古屋駅 行ったら雨で不通で、それで豊橋に行って飯田線に乗ろうと思いましたらそれも不通で、結局、 岡へ行って身延線で諏訪に入ったという経験をしました。その休みの合い間をとって、私の生ま た高森町の反対側にある豊丘村で掘ったのがあの土器なのです。長さ何メートルトレンチを掘っ かわかりませんが、およそ30メートル近く掘ったかと思います。一番最後の壁を崩していたんで あと10cm手前でやめていたら壺は出てこなかったですね。運というのは不思議なものです。壺が

っと顔を出したのです。そういうことで、その土器もここに並べてありまして何年ぶりかで対面ました。

私が考古学を始めるきっかけになったのは、中学一年生の時に、大沢和夫先生という、今はやめれていますれど長野県考古学会の会長をしておられた先生なのですが、その先生の夏休みのレポーが、土器や石器を拾ってこい、というのだったんです。どこへ行ったら遺物が拾えるかと言った、家へ行って石垣をどんどん端からころがしていけば石皿が出てくるに違いないと言うんです。生の言ったことは本当だと思いまして、家へ帰って畑の石垣を全部一番上だけずっとおこして行っのです。そうしたら本当に石皿が出てきたのです。偶然だと思うのですが、それで、石皿ってこいうところにあるのかと今度は家の近所のまわりの畑へ行っては拾っていましたら、石器が出た土器が出たりしたわけです。この遺跡が北原遺跡という遺跡なのです。これも下に土器が飾ってります。このように北原遺跡という弥生時代を代表する遺跡が自分の家の裏にあったということ、してその次に、ちょうどその頃は、登呂遺跡の発掘の最中だったのです。この登呂遺跡の新聞記を読んでいて、ちょうど中学2年の夏休みでしたから毎日新聞には登呂遺跡のことが載ってくるけです。しばらくたち『古代農村の復元』という本が出版されたと聞きまして、早速その本を買っ読みました。大場磐雄先生が書かれた本です。そこに先生の住所が書いてあったので、私はめずしい土器を発見しましたと手紙を書いたのです。どうめずらしい土器かといいますと、うしろと に文様があるのです。土器には文様は表にしかないというのにうしろにも文様があるのは、これ日本で最初の発見に違いない、と中学2年のことですからそう思い込んだのです。そうしました長い返事を封筒でいただいたのです。このように、大学の先生が手紙をくれたのはうれしい、とれから病みつきになっていくわけです。ところで、その日本で一番最初の発見だといって大さわした土器は、本当は須恵器なんです。須恵器には、うしろに叩いた文様があります。しかし、そいうことで大場先生と知り会いになりまして、中学3年の夏休みに2泊3日で登呂遺跡の発掘に ったわけです。

大場先生に、「東京に来るのだったら長野県にも考古学の偉い先生がいるぞ」と教えてもらったが、尖石遺跡の宮坂英弐先生と諏訪市の藤森栄一先生でした。それで夏休みに帰ってきて秋にさっく尖石遺跡へ行って宮坂先生のところでいろいろと土器をみせてもらったりしたわけですが、そ帰りに諏訪でおりて藤森先生の本屋さんに寄ったわけです。藤森先生は長野県の弥生文化を研究している第一人者で、その先生にいろいろ教わりました。北原遺跡の土器を持っていきましたら、ごい土器を持っているぞと誉めていただいたのです。私は社会科の担任ですが、怒るばかりでめっに誉めませんが、本当は誉めるということは非常にいいことですね。それで、誉めてもらったもで、これはもうすばらしい土器を発見したのだなあ、それではこれを追ってみよう、ということ私は弥生文化に入っていくわけです。藤森先生の推薦もありまして明治大学に入りまして、弥生化では日本の第一人者である杉原荘介先生のもとで勉強しました。卒論は、弥生ではなく条痕文器というので書きました。論文審査でひどくしぼられたことを思い出します。

こういうことで、自分にかかわった先生が弥生時代に関係あったということ、自分が調査した遺がたまたま弥生時代の代表的な遺跡であったということで弥生時代を研究してきたわけです。勿

るということになったわけです。その時に、長野県が大きな役割を、長野市の箱清水の遺跡ですが果たすわけです。報告書に詳しく書いてありますのでそちらの方を見ていただけばわかりますが箱清水に長野西高の校庭を作る時に弥生式土器が数百個出たというのです。この情報が東京に流て、すごい土器の発見だということで、それから弥生式土器というものは一つの形式として成立るのだということになったわけです。ところが、当時の記録が報告書にまとめてあるのですが、百個というのは書いてないのですね。どこから数百個というのがでたのか、そこのところは自分もわからないのですが、数百点が数百個になったのかもしれません。器形のわかる土器も、当時ものをみてもこういう報告ですから、簡単な図でしかないのですけれども、いくつかあります。

もう一つ、この報告書の中で大事なのは、それほど注意はされていないのですけれども、竪穴居址らしいのですが、火事になった住居址か、火事でないかちょっとわかりませんけれど、そこら炭化したものがいくつか出ているのです。その一つに炭化した麦が出ている、と書いてあるんす。ところが、いつのまにかその麦が米になっちゃっているわけです。そこが不思議でしょうがいのですが。どういうことで途中で麦が米になっちゃったかわからないんです。

これが一つのきっかけとなって、弥生時代は石器時代ではなくて農業と関係があったという結つける貴重な発見だったわけです。それがどういうふうに捉えられて弥生時代の中に生きていっかということは、箱清水の学史を追っていないのでわかりませんけれど、学問の歴史の上から見いったときには、箱清水の遺跡というのは重要な役割を持っているわけです。もう一つここで重なことは、弥生時代が縄文時代と違うというところは、農業が始まったということが大きな一つ理由にあげられています。その農業が何であったか、ということで米だということになっているけです。稲作を中心とした米作りが弥生時代であると、それが非常に強くなって定説化されてしまたもので、米以外の農作物というものは、軽視されるか、無視されてしまったんです。そういう過の中で箱清水の炭化麦が消えていってしまったのかもしれません。

最近の本を読んでいくと、非常に畑作ということを大事にしています。農業をやっている方は存知かと思いますが、よほどの条件のいい場所でないと米だけでは生活できないです。私の家もと畑を作っておりました。だから米と畑とは、お互いが補完しあってやっていかなくてはいけないとこういうことで、米が中心であるという考え方では弥生時代は解決できないわけです。

弥生時代の定義としては、一つはそういう稲を中心とした農業を始めた、ということと鉄の道を使ったということが言えます。もう一つは機織り技術です。その他祭祀的なものとかいくつかりますけれど。

縄文時代は、自分の住んでいる場所から近くの野山へ行ったり川へ行って食料を採集してくるけです。それが縄文時代の特色なのです。ところが弥生時代になってくると、そういうものの他食糧を生産するということが大きな変化になってくるわけです。それは、ほとんどの方がご存知と思いますけれど日本人が自分達の手で作り出したものではないのです。B.C200～300年といいすから、今から2千年ちょっと前ですね。中国大陸から、あるいは朝鮮半島を経てきたか、いろな考え方がありますけれど、大陸の文化の影響で日本にその技術がもたらされたわけです。だか山口県の方のお墓を掘ると人骨が出てきますが、その人骨は平均は身長は非常に高いと言われて

ます。男性で162cm前後、女性は150cm前後だそうです。これが当時の日本人の中では比較的高いというのです。普通は男性158cm、女性が147cmでひとまわり小さいのです。そういう点で大陸から人が来たのではないかと言われています。その頃の大陸というのは、始皇帝の秦から前漢へと大きく変化した時代なんです。激動の時代の中で周囲へ中国の大きな動きが伝播していったわけです。それを日本人が受け入れたわけです。だから日本の農業というのは、最初から当時の大陸の一番進んだ技術を受け入れているわけです。苦労して米づくりを覚えたのではなくて、苦労してできあがったものが、日本に入ってきているのだ、と言われています。そこに新しい受けとめ方があるわけです。例えば、今もそうですが、技術革新で今日本はだいぶ外国からいじめられていますけれど、何故、今日本がアメリカを追い越したかは、戦争で負けてゼロから出発した時に、一番新しい工場を造ったからです。アメリカは戦争で負けないもので、古い工場のまま技術革新できないで、それで日本が追いついてしまったのではないか、と言うわけです、それと似たような現象が弥生時代にもあったようです。そういったものは勿論、それを受け入れる日本人の体勢がなければいけないわけです。

縄文時代の最初からですけれど、東日本と西日本という違いは非常に強いわけです。弥生時代でも東日本と西日本の違いは強いし、そういうものは歴史的背景があるわけです。縄文時代の終り頃、西日本の方では突帯文土器という、文様が突帯がついただけの土器があります。参考までにいくつか図を載せてありますが、夜臼式土器という、口縁部のところに突帯がついたあまりかざらない突帯文土器は、だいたい愛知県まであったのです。馬貝塚式土器と書いてあるのが愛知県の突帯文土器です。こういう土器が西日本にだいだい共通してあったのです。それでは、その時長野県にはどんな土器があったのかと言いますと、小諸の氷遺跡で発見された浮線文の氷式土器を基準にしているのですが、東北地方のつながりが強い東日本の土器が分布していたわけです。突帯文土器の人達というのは、東日本とは違った様相をみせています。それは、長い縄文時代から続いている生活をなんとか克服しなければいけない、気候がちょうど寒くなってきている時期で、まわりの山の景色も変わってきている、採れるものもちょっと変化してきていることもあって、何とか新らしい食糧の生産を、と考えている時に、ちょうど中国から新しい技術が入ってきたのでそれを受け入れたのではないか、というのが一般的な考え方であります。それでできた土器が弥生式土器というのが、板付式土器というのです。壺と甕がセットになる、ものをしまっておく壺、ものを煮る甕，こういう新しい土器が弥生式土器で、これから弥生時代と言えるんだ、と言われています。しかし最近は、九州の新しい事実では、夜臼式土器の田んぼも見つかっています。また夜臼式土器よりももう少し古い田んぼも見つかっているのです。それはもうこちらでは縄文時代になってしまうんです。夜臼式土器は縄文時代、夜臼式土器よりも古いのも縄文時代となっているのですが、そこでは米がもう作られている、ということは米を作っていれば弥生時代ではないか、ということになるのです。ですから今、学者の間では２つに分かれています。何を弥生時代にするかという定義からすれば、農業がはじまった時代、稲作を中心とした農業が始まった時代を弥生時代ということにすると、夜臼式土器もその前の土器も弥生時代ということになります。最近それをゼロ期とか前期の前の早期とか言うような風調が出てきましたので、学問がもう少し進歩していくと夜臼式土器も弥生時代に入っ

うことが言えるわけです。ちょっとプリントを開いていただくと、西志賀式土器というのが書い
ありますが、これは名古屋の西志賀貝塚から出た土器です。その下に書いてある林里という土器
見ていただくと器形がよく似ていますね。林里の土器は分析の結果でも名古屋の方から持ってき
土器だということが言われております。こういう壺は、松本の針塚からも、糸魚川の大塚からも
ています。長野県を通りこして糸魚川にでているということで、そこに例をあげといたのですが
最近、糸魚川のは日本海のルートもあるのではないかと言われていますけれど、この大塚遺跡では
水神平式土器も一緒に出ていると書いてあるので、そういうことになってくると、やはり長野県
通っていかなくては理解できない土器ではないかと思います。このように、壺があちこちから見
かって、最近は、東北まで見つかってきているということが言えるわけです。

さきほど九州に始まった弥生文化が、たちまち西日本に広がったその前提として、西日本には
通する突帯文の土器があるというお話をしましたが、ちょっと前へもどってもらいます。プリン
で、板付式と書いてある下に、貝殻山式と書いてあるのがあります。これは、名古屋の貝殻山貝
なんですけれど、板付式と比べてもらいますとよく似ていますね。形が、壺も甕もそっくりです
こういう点からも土器があんまり変化することなく一気に木曽川の下流域まで広がったというこ
が言えるわけです。前の文化圏をそっくり受け継いでいるという一つの事実をそこにも示すわけ
す。九州から木曽川までそっくりはいってきた新しい稲作りの文化が、どうして東日本へさらに
まらなかったのか、一つの疑問に残ってくると思います。これには、理由がいくつか言われてい
す。一番よく言われている理由は、温度差だと言われています。西日本に比べたら日照時間が短
とか、或いは、水温が低いとか、平均気温も低いとか、というのが一つの理由なっているようです
そうすると、稲が育たないということで、耐寒性の早稲の品種を見つけるまで、木曽川の下流で
時ストップして新らしい稲を見つけたところで一気に東日本に入ってきたのではないか、という
が一つの説です。もう一つの説は、さっき夜臼式だとか、馬見塚式だとか言った突帯文土器に対
て、こちらの方の東日本は亀ケ岡土器といういわゆる東北地方から広まってくる飾られた土器が
るわけですれど、この土器が亀ケ岡系の土器なんです。千曲川には、こういう工字文と言うので
が、工作の工字みたいな文様が主になった浮線文で飾られた鉢と壺を中心とした土器を作った人
が、新しい文化を受け入れるのに抵抗したのではないかということが言われています、亡くなら
た山内清男先生は、亀ケ岡系文化が発展したのは、サケやマスがとれたから発展したのではない
と言っています。かつて千曲川にもそういった魚が沢山きたのではないかと思います。それで食
がある程度確保されているから、新しく農業をしなくても良かったのではないかと言うんです。
の時期になってくるともう弥生土器が青森県にまで言っているので、だから米というものを当時
人達が知っていたわけですね。だからどうして本当に入ってこなかったのかというのは、まだわ
らない疑問なのです。

貝殻山式土器とか西志賀式土器を作った人達は、完全に西日本からきた人達です。集団できた
達です。西志賀貝塚も私も発掘に行ったのですが、貝殻が自分の背丈以上につもっています。前期
中期・後期という長い期間でつもったものですけれど、だから農業ばかりではなかったんですね
貝もとっていたわけです。だから農業が入ってきたからといって農業だけで生活がすべてまかな

るわけではなかったわけです。けれども新しい技術として入ってきたのです。その時に、木曽川の下流にはどんな人達が住んでいたか、どういう土器をもっていた人達が住んでいたかと言います、樫王式、水神平式、岩滑式という三つの時期の変化でとらえてあります。アナダラ貝といって、その貝殻のギザギザの背中でひっかいた文様、或いは、ヘラで線を乱雑にかいた文様をもつ、非常に見た目の悪い土器です。こういう土器のことを条痕文系土器と言います。全く、西志賀貝塚のきれいな粘土で作った土器も、きちっとした土器に比べると非常に粗末にみえます。そういう土器をもった人達が木曽川の下流域に居たわけです。ただ西志賀貝塚の人達は、稲を作らなければいけないので、どうしても川のそば、低湿地のあるところ、ということでどうしても住む場所が違ってきます。集落を住み分けしたので、そんなに争いはなかったのではないかと思いますが。果たして、全く争いがなかったかということは断定できないのですが。西志賀貝塚でも貝殻山貝塚でも、こういう新らしい弥生式土器をふつう遠賀川系土器と言います。というのは、こういう土器が一番最初に学問的に調査されたのが北九州市の遠賀川という川で、その川底から発見されたので遠賀川式土器と言いまして、そして大きくは遠賀川系土器という言い方をするわけです。だから西志賀式土器も貝殻山式土器も遠賀川系土器です。そういう土器の中に水神平式などの条痕文系土器が出てくるのです。そして三河や尾張のまわりの条痕文系土器を出す遺跡には、西志賀式土器だとか、貝殻山式土器だとかいった新らしい弥生式土器が出てくるのです。そうすると、どういうことが言えるかと言うと、ものを交換しあっているのですね。ものを交換しているということは、けんかをしている状態ではないのですね。お互いが交流しあって、とれたものを交換したり、技術を交換したりしているのです。そして、どちらかというと、条痕文系土器の人達が、積極的に弥生時代の弥生式土器をもった西志賀の人達、或いは貝殻山の人達と接触して技術をとり入れているようです。ですから、岐阜県の博物館で岐阜県の弥生展というものをやっていまして、そこに籾痕のついている土器が飾ってありますが、条痕文系土器なんです。そうするとやっぱり木曽川下流の条痕文系土器をもった人々は一生懸命勉強して、それなりに変化して、そういう時代的な変化を追いながら発展し、自分達の立場を守りながら弥生時代を受け入れている姿がそこに見えるわけです。

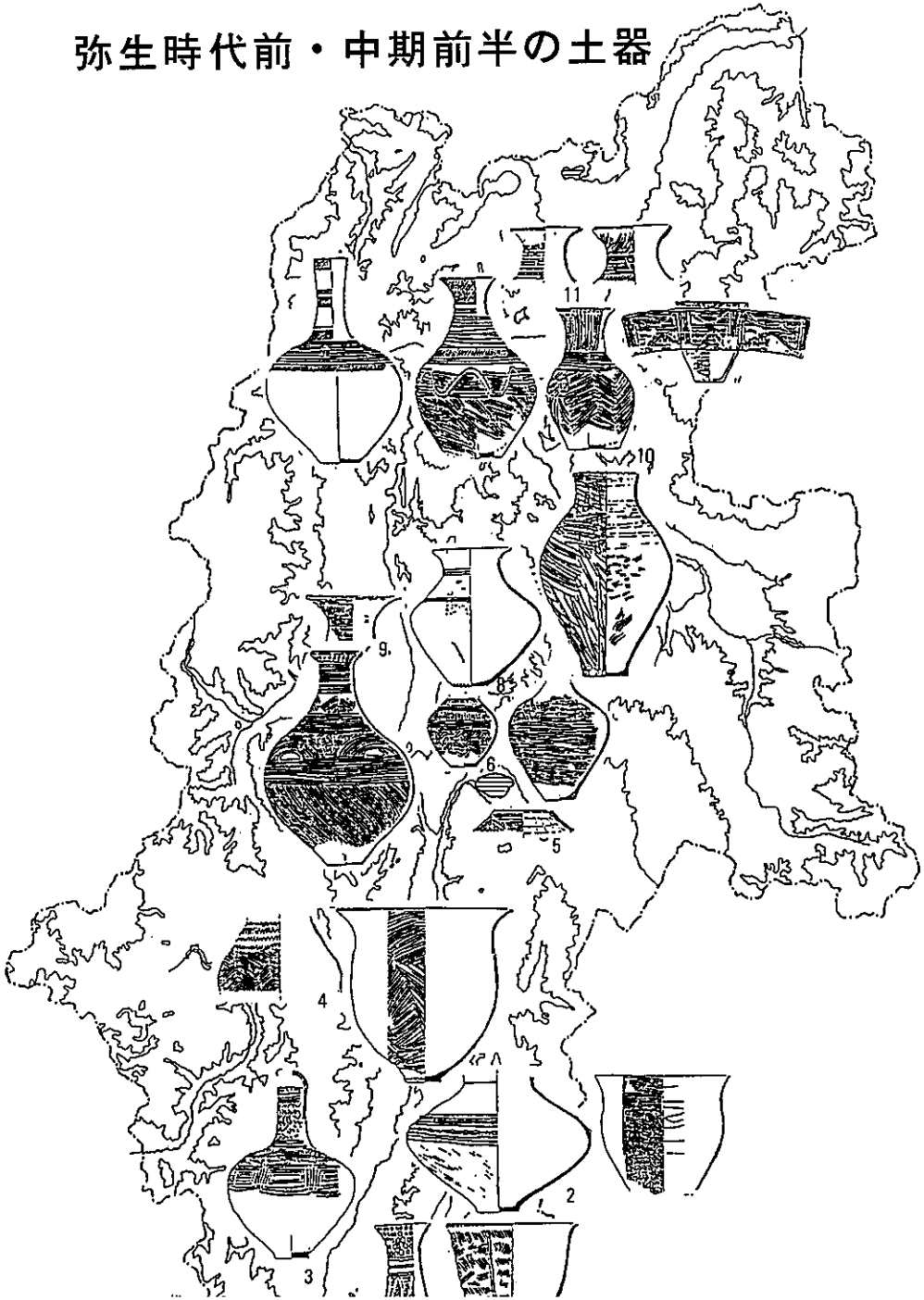
木曽川の下流域に弥生文化がきたという時点で、長野県とは一体どういうところか、ということに入っていきたいと思います。

西日本と東日本の境をどこに置くか、というのは、いろんな立場が出てきます。静岡県、愛知県、岐阜県、富山県あたりの線が、西日本と東日本の境ではないかと言われています。まあ、どちらかと言うと愛知県は西日本の方に強いですね。愛知県、岐阜県は西日本の方の影響が強いということになってくると、東日本の境は長野県ということになってくると思います。長野県は東日本の中にあって一番西に近い地域と捉えてもらえればいいと思います。そこで、西に近いということになると、西からの流れというものを考えてきたときには、長野県に入ってくる西からの道は、一つは木曽川ですね。そして天竜川です。長野県に入ってくる道は、天竜川か、木曽川のどちらかしかないわけです。さきほどもちょっとお話しましたけれど、弥生時代の文化というのはたえず西からきています。山口県或いは北九州にその初源があって、しばらくして近畿地方に、そして大和盆地に中心がくるのです。それもやはり長野県からみると西です。だから西からの文化というのは、どうし

とにかたまっちゃうんです。だから長野県人というのは、非常にかたまっているようで、非常に
域性の強い、県民意識をもっています。

これは、ずっと縄文時代からそうです。土器に非常に違いがあります。長い伝統があるという
うに考えるほかしょうがないですね。それで、弥生式土器も入ってきているわけですけれど、例
ば、長野市伊勢宮の土器について書いて下さいと言われましたが、ところが伊勢宮の土器は非常
地域性が強いのです。だから私にはわからないのですが、書くと約束した以上何とかして書かな
てはならないのですが。非常に南信地方の土器と違います。同じようですが違います。地域性と
うことで第１図のように長野県の地図の中に土器を入れてみました。だいたい出た場所、位置を
れてみました。これを見ると、古い土器、例えば２番、４番、さっき言った水神平式土器がその
ま入ってきているわけです。こういう条痕文系土器とか遠賀川系土器が入ってきます。それが、
本に来ると８番ですね。８番の遠賀川の壺の横にちょっと大きい壺があります。これはもう完全
東日本の土器です。こういう東日本の土器は、三河にはない、もちろん木曽川の下流域にもない
器なんです。長野県では、こういう独特な土器は中部高地でできた土器ではないかと思います。
勢宮の土器は10番です。伊勢宮の遺跡の中からも遠賀川式土器が一片だけ出ています。前に掘っ
荒井さんが採集された中にも一片あるとか言われていますから、長野の善光寺平にも遠賀川系土
がきていることは間違いありません。こういうように、長野県に西からの土器が入ってきており
す。天竜川の方の土器は、どうしてもやはり奥三河を通って入ってきたのだなあと言えます。松
の土器或いは善光寺平の古い土器は、最初は、天竜川を通ってきたのかなあと思っていたのですか
どうも最近の例などをみてみると、ちょっと天竜川の土器とは違っているので、木曽川を通って
たのではないかという気がします。木曽川から松本にきて、松本から犀川を下って善光寺平に落
ついたのではないかという気がします。それで善光寺平へきた２番、４番、８番と言ったような
器が、弥生文化が西日本に一気に広がった時期の土器であると言えると思います。どうもそれを
げたのは、先ほど話しました木曽川下流域の条痕文系土器をもった人達が、新しい稲作技術を身
つけて、新しい土地を求めて東日本へ広めたのではないかと思います。その背景はちょっとなん
も想像できないですけれど、ものすごいエネルギーですね。例えば、木曽の山の中からも開田高
でも条痕文系土器が入っていると言うことは、河を遡って一気にあちこちに広がっていったと言
ことです。今、福島県まで出ています。東北の方にも遠賀川系土器が出ているということがあり
すから、東北までいっている可能性は十分あります。だから遠賀川系土器の人達が九州で農耕技
をとり入れた時に、一気に東海地方にまで、木曽川の下流域まできたと同じようなことを、条痕
系土器の人達がやっているのです。ところが東日本にきた時に不思議なことには、地図でみると
１番、３番、７番、10番の壺を見てもらうとわかるのですけれど、土器の模様に縄文をつけてい
のです。長野県の人達は、新しい文化の波及を受け入れると同時に、すぐに自分達のものにして
るのです。こんな中で、弥生中期という時代になるのですが、７番、６番、10番が多分同じ時期
と思います、10番の土器と７番の土器とでも、同じ時期なのに、やはり南信地方と北信地方とで
違っております。７番は犀川の上流ですから、これはどちらかと言うと南信地方の土器なんですか
南の土器とではもう違いを作り出している。というふうに長野県の地域性がこの時期からもあら

弥生時代前・中期前半の土器



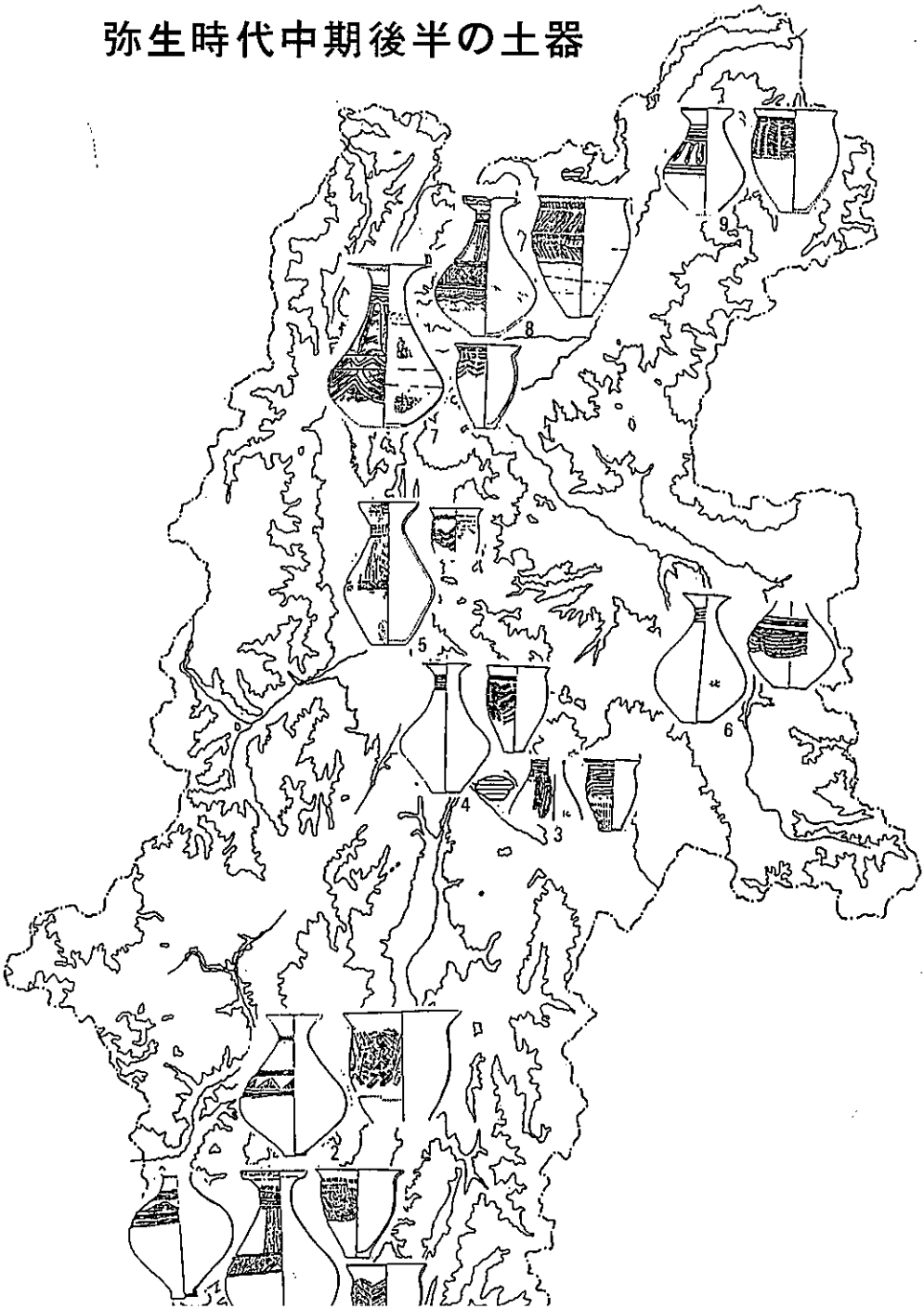
ます。非常に大きい壺に細長い壺がちょっとついた特異な土器なんですが、全く同じ形の土器が
の3番に（下伊那郡高森町弥宣垣外遺跡）にあります。だからそういう点では、同じ時期で共通
た要素をもっています。こういうように共通性をもちながら地域性を示し始めたのが中期前半で
このころから定着してきているのだということが言えるわけです。

それがもっとはっきりしてきたのは、第2図を見て下さい。これが中期後半という時期ですが
縄文の縄の文様をつけた土器がまだまだつくられている時期です。どちらかというと縄の文様を
ける土器は、北信地方に多いのです。まあ、長い伝統ということがあるのでしょう。これに対し
下伊那の土器、1番、2番の土器は、縄文で作る土器もあるのですが、ほとんどが櫛で文様を作
櫛描き文土器になっています。そういう点で、藤森先生は、縄の文様のつく7番、8番のような
器が長野県では一番古い土器で、櫛の文様のつく2番のような土器は新しいのだということを言
れたことがありました。今調べてみると、やはり同じ時期か、かえって2番の方が古いかもしれ
いと思うんです。これはちょっと違う例ですが、木曽には弥生時代の遺跡はないと思っていたの
すが、ちょいちょい掘っていくと弥生時代の遺跡が出てくるのです。つい最近、自分の家の近く
圃場整備で発掘していたら栗林式土器が出てきたんです。だから木曽川まで栗林式土器がいって
るんです。栗林式の土器は、千曲川から犀川を遡って松本平へ行って松本平から鳥居峠を越えて
曽川まで行っているんです。それでその一つが名古屋の朝日貝塚に出ています。名古屋まで持っ
いっているか、交換しているんです。名古屋まで行っているという一つの例として、今度は、木
で発掘した中には、栗林式土器と高蔵式土器という名古屋の土器が入ってきているんです。高蔵
土器というのはまだ長野県では見つかっていなかったんですが、栗林式土器は中期の後半か中頃
土器と言われていたんですが、高蔵式土器は全国的にみると後期なんです。そうすると中期の土
に後期の土器が入ってるとなるとやっぱり栗林式土器は新しいんだなあという感じを持つのです
れど、まだそれは正式な報告書が出ていませんからはっきりは言えません。

そこで、土器を見てもらうとわかりますけれど、北信の方の土器はどちらかと言うと非常に文
で飾ってあります。7番、8番なんかの壺をみますと上から下まで非常に飾ってあります。佐久
土器、諏訪の土器なんかみてみると、文様が頸部のところだけしかありません。下伊那の土器も
頸と肩のところだけ飾ってありますけれど、どちらかというと飾り方は少ないです。そうした中
1番の壺をみてもらうとわかりますけれど、1番の壺は7番、8番の壺とそっくりです。どうも
れは交換した土器ではないかという気がするんです。あれは北信の土器をまねして作った土器で
ないかと言われています。ところが甕の方を見ていくと、随分共通した要素が多いですね。甕の
はどちらかというと北信も南信も櫛で文様をつけてあります。だいたいよく似ています。壺の方
非常に個性が強いです。

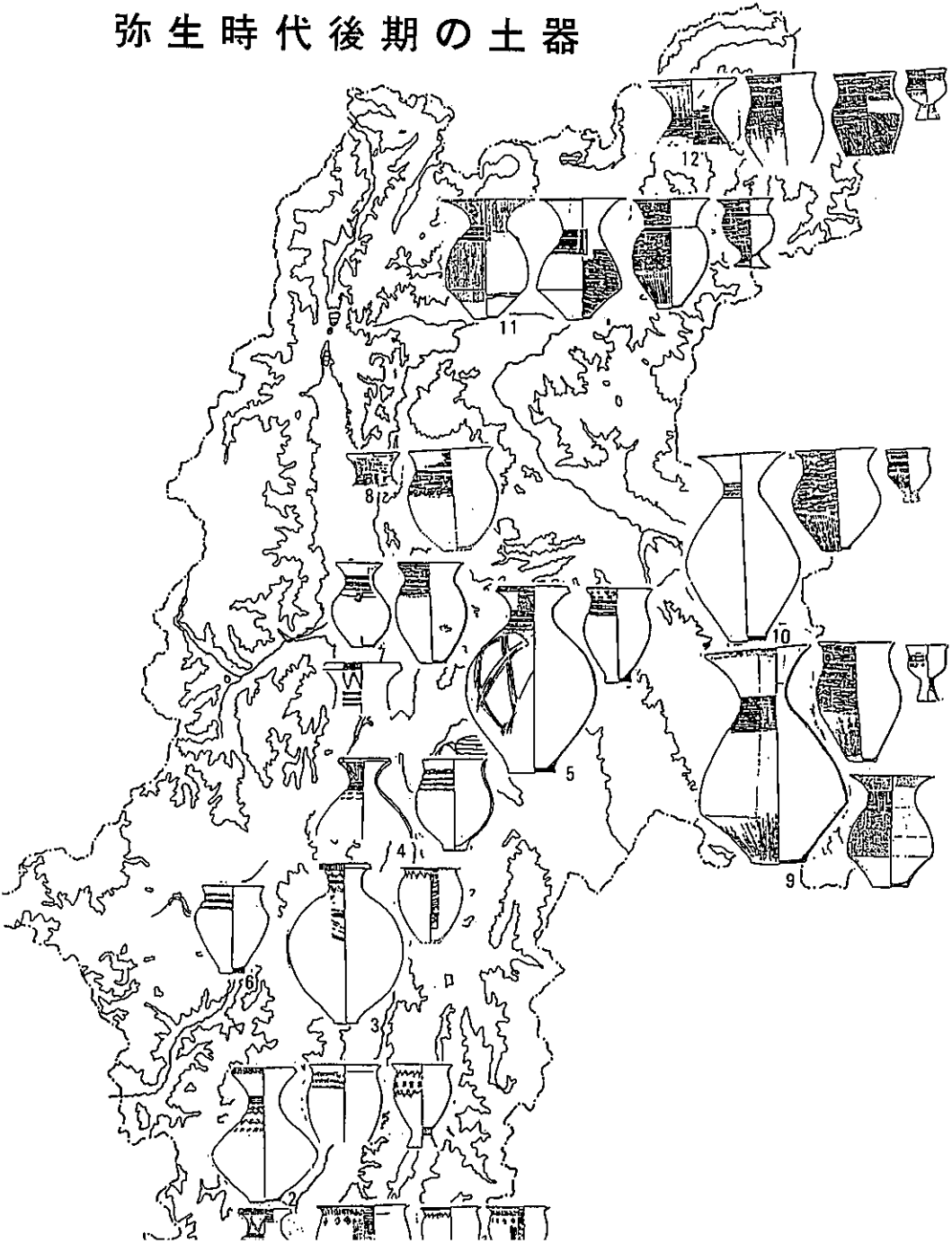
さらに個性が強くなったのは後期です。次の第3図を見ていただくとわかりますけれど、1番
2番が下伊那の土器です。3番、4番が上伊那の土器です。5番が諏訪の土器です。6番が木曽
土器、7番、8番が松本の土器、そして9番、10番が佐久の土器です。11番が善光寺平の土器、
番が飯山の土器です。全部同じ時期ではないんですが、後期でも古い方と新しい方と並べてあっ
りしますから、例えば、2番の方が古くて1番の方が新しい、10番の方が古くて9番の方が新し

弥生時代中期後半の土器



川のいわゆるこれを座光寺原・中島式土器文化圏と言っていますが、そういうふうにとらえていま
す。それに対して千曲川文化圏は、箱清水式土器と言っておりますけれど、まあ、口縁部が開く、
壺の場合は、頸のところに横に櫛で文様をつけてそれを縦に切る、T字文と言っていますけれど、
それと土器を赤く塗ってあります。9番、10番、11番は、口縁部のところは、中側も外側も赤く塗っ
てあります。こういう土器は8番に入ってきています。松本平は最近塩尻まで入ってきています。
5番のところにも箱清水の土器は入ってきています。だから千曲川と天竜川を中心にして、千曲川
の方では箱清水式土器、天竜川の方では座光寺原に中島式土器という土器があって、中間地帯にに
両方が混在してあって、諏訪湖の方はどちらかというと天竜川の色が強い、松本はどちらかという
と千曲川の色が強い、ということが言えます。そういうふうに長野県が大きく2つに分かれて対立
しているんです。この捉え方に、私と、桐原さんや笹沢さんの違いがあるわけです。まあ、天竜川
と千曲川との一番の違いは、自然景観が違うということですね。千曲川の場合は、ほとんど平です
山から山までは平で、山のふもとのところに扇状地がちょっと見えるんです。そして千曲川の中流
の両側に自然堤防があります。自然堤防があって後背湿地があって、自然堤防上に集落が広がると
いうのは、こちらの地形的な景観になっています。標高が300m～400mです。それに対して天竜川
の方は、標高は370m～720mですから少し高いですね。段丘はだいたい10数段数えることができま
す。今日の図録のところにもちょっとありましたが、天竜川のまわりに沖積地があるのです。この
図では、白い部分ですが、白い部分は確かに暴れ川ですね。36年の36水害の時には、この白い部分
は全部埋まってしまったところですね。私の生まれたところは、北原遺跡のここのところですが、
全部洪水でやられちゃいました。だから今代表的な遺跡は、この白い部分より一段上のところがい
い遺跡になっているわけです。古墳群もここに発達しています。何故ここに古墳群が発達している
かと申しますと、この黒い部分のところが段丘でだいたい比高差が100m近くあるんです。50m～
00m近くあって、その段丘の下は湧水が出るわけです。湧水が出るから、湿地ができるんです。だ
からこの白い部分のこの段丘の黒い線と境のところは湧水がでて湿地ができるのと、もう1つは、
段丘を切ってくる川があるんですね。その川を引っぱれば田んぼができます。だからこの田んぼに
より安定した田んぼなんです。千曲川で言えば、自然堤防のうしろ側の後背湿地が安定した田んぼ
ということになるのでしょう。天竜川の方には、阿島遺跡という遺跡がのっていると思います。こ
れを発掘した時には、はしごで入ったことを覚えています。洪水に埋って住居址一軒、丸ごと掘れ
なかったんです。だから一段丘さらに高い上へ登っていくという安定した耕地を求めているんです。
それに対して千曲川は、後背湿地をうまく利用すればいい水田地帯になるわけです。ところが、桐
原健さんは、「天竜川地域は、その農業は、畑作農業で、当時の環境を考えれば、焼畑の段階に入っ
たと思われる。水稲農耕を基盤とする生活と比べれば、低生産性で、不安定な生活で、それが土器
の上にあらわれている」と書いています。私が一番気に入らないのは、“低生産性”というところ
です。生産性が低くて、非安定性…いかにも貧乏たらしいことを言われています。ところが、私の
家も小さな地主なんですが、江戸時代の本棟作りの家です。私は高校時代に本棟作りの家を調べた
のですが、一番大きい家は、十間四方で、蔵が10あるんです。ということは大地主ですね。けっし
て非安定性ではないんです。それに対して、善光寺平の方は何て書いてあるかというと、これは、

弥生時代後期の土器



曲川との違いはない、と一生懸命調べたんですが、あんまり量が多すぎてとうとうまとまらずに
でも机の上に置いてあるんです。けっしてそうとは言えないと思うのです。これはちょっと下伊
人としての発言ですからそう思って聞いて下さい。いつも言うのは、下伊那の方は、西の方の玄
である。だから下伊那の地域性というのは、何でも新しいものを受け入れて、またあきっぽいと
うんです。事実その通りですね。私の性格なんかその通りですね。だからいろんなものをすぐ買
ちゃうんです。それで使わないでみんなしまってあるんです。明治時代の国学の問題でも、社会
義に対しても何でもいろんな新しいことはみんな下伊那に起こってきているんです。下伊那の人
はどちらかというと、人が丸いというんです。北信は人が厳しいと言うんです。人が丸いという
はいいことですが、悪い言葉で言えば優柔不断です。長野の人はどっちかというとはっきりした
とを言いますね。それだけ厳しい印象をよく受けます。

土器の上でみていった場合、壺や甕でみていくと、下伊那の方は文様を作る時に回転台を使っ
文様を描いているのです。長野の方は、同じ櫛描き文でも、手で回しながら描いています。もう
つは、文様がとても集約されてきているわけです。だからそれは、文様が簡素化されてきたとい
ことで、粗末な土器を作るようになったという捉え方もあるかもしれませんけれど、一つは新し
技術をとり入れて作ることによって土器を作る時間をなくしたと自分はそういうふうに捉えたい
です。だから、土器を作る時間を失くすことによって生んだ時間を又違う方に回す、貧しいもの
田んぼや畑を一生懸命作りに行かなければならなかったのかなあ、となっちゃうのですが、その
に、甕を見てもらうとわかるのですが、長野の方の土器は文様が上から下までつけられております
下伊那の方は一列か二列です。長野のように土器をたくさん飾るという風習は、弥生の中期の伝
なんです。中期の伝統を、千曲川水系の方は持っているということは、やや保守性が強いという
とが言えるわけです。そしてもう一つ箱清水式土器の特徴は、赤く飾るということです。壺も鉢
本当にきれいにまっ赤に飾ってあります。これは全国的にみても非常にめずらしいです。ないわ
ではありません。九州にも関東にも名古屋の方にもあります。例えば名古屋の方の赤くきれいに飾
た土器は、パレススタイルとよばれ、非常にすばらしくきれいな土器なんですが、どちらかとい
と壺だけです。そして関東の方の赤く飾った土器もやはり後期ですけれどどちらかというと壺だ
です。ところが千曲川にくると壺も鉢も甕までも赤く塗ってあるのです。それで非常に量が多い
です。何故こんなに赤い土器を作らなくてはいけなかったのか。それは祭祀的な匂いがとても強
のです。祈りをこめて土器を作っているのです。ここで、何故祈りをこめなくてはならなかった
か、と一つ疑問になってくるのです。それは、やはり地形との関係が土器を赤く塗って祈りをこ
たということになるのです。米に依存する生活が高かったと思うのです。しかしこうやって景色
見るとすべて田んぼではないですね。畑もあるし　農業も田んぼだけではないのですけれど、水
の占める比準が強かったといえます。そうするとその水田が、祈らなくてはならなかったのかな
と思います。後背湿地と言っても、後背湿地が本当に安定していたのかなあと気になるわけです
どの程度洪水があったのか、記録というものはあまりないんですが、天竜川の方は一番下の沖積
が洪水でやられてしまう可能性が強いのですが、こちらの方は全面、見事に集落も山麓までもや
れてしまう可能性があると思います。つまり、非常に洪水に対する、災害に対する恐れというも

強かったために、それが土器に反映するのかと思います。

もう一つよく言われることは、下伊那の方は、打製の石器を使っていると言うんです。打製の石器を使っていると言うことは、鉄器を知らなかったと言うんです。つまり鉄器を使う千曲川の方が一歩上をいっているという言い方をされるわけです。そうなると、本当に鉄器は下伊那の方は少なくて、千曲川の方が多かったか、これはちょっといえません。事実では、始めから鉄器は下伊那にあります。ただ道具として、何故石の道具を使わなくてはならなかったのかという背景を考えてもらいたいと思います。木の道具では、天竜川の段丘地帯の土は耕せません。私は農家の出身ですが、木曽へ行って一番びっくりしたのは鍬です。鋤みたいになっているんです。というのは、土よりも石の方が多いからです。木の鍬では耕すことはできません。となってくると、鉄は十分ではないのです。天竜川にいっぱいある石を使ったのです。硬砂岩という石で、これで簡単に石器ができるんです。石をもってきて、ぱんと割れば割れるんです。自然面のついた剝片面です。それを調整すると鍬になったり草かきになったりするのです。山へ行って木を切ってきて作る木の鍬に比べればとても簡単にできるのです。

このように、同じ長野県でも下伊那と千曲川では地域性に非常な違いがあります。それでは弥生時代の終末、古墳時代に入っていくとどうなっていくのか、ということです。古墳時代と言えば長野では何と言っても、森将軍塚、川柳将軍塚、土口将軍塚、倉科将軍塚と言うような将軍塚が非常に有名です。ところが下伊那にはそういう古い古墳はありません。ところが土器の上からみていくと、古墳時代に入った土器は、下伊那の方が早いのです。これはやっぱり西に位置しているということもあるのでしょう。だから下伊那の中島式土器の後半にはもう古墳時代の土器がたくさん入ってきています。こういうことから言うと、早く古墳時代の影響、いわゆる西の影響を受けているのは下伊那だと言えます。ではどうして下伊那に古い古墳ができなかったのか、と言うと、何とも言えないわけですが中央から新しい勢力が入ってきた時に、地域の弱さがあったのではないかと考えるわけです。そういうふうに考えた方がいいのか、或いは別の考え方、千曲川の方が米がたくさんとれるから、ここをとって早く支配権を強大にしようとして、千曲川の方に入ったのか、という考え方とどっちがいいのかわかりませんが。まあ、将軍塚を作った人々は、土着の人達が支配されての古墳を作ったわけです。だから中央から来た人々がここに住んでいた人達を支配しているわけです。

ここで一つ前へ話がもどりますけれど、今回飾ってありますが、伊勢宮遺跡から出た人骨に武器が刺さっています。鉄らしいということなんです。弥生時代を研究している佐原真さんは、弥生時代の特色の１つに、「弥生時代は戦争が始まった時代だ」と言っているのです。それで、下伊那では先ほどちょっと触れましたが、北原遺跡では、磨製石鏃がたくさん出ています。その石鏃が果たして戦争に結びついたかわかりませんが、大きな石鏃を作ったということは獣をとったとは必ずしも言えません。最近、名古屋の朝日貝塚では、村のまわりに深い溝を掘って、さらに木で柵を作った集落が見つかっているんです。それだけ守っているという例があります。さきほどの条痕文系土器とお互いにうまく交流していたのではないか、という背景とはちょっと違った事実になってくるわけです。こういう溝をもった集落がだんだん発見されてきています。上木戸という塩尻にある遺

どういうふうに地域性が発展していったかとらえていってほしいと思います。

ここに、今から20年前の藤森先生が長野県の弥生文化について講演をした時のメモがあります。善光寺平へ弥生文化が入ってきたのは、松本平を通ってきているので、松本平で一回ステップを入いてきているので、一気に入ったのではなくて定着したのではないか、ということを言っておりす。また、箱清水についても藤森先生は非常に大事にしております。これは弥生文化の重要な画期になった、と書いています。

長野の遺跡はまだまだこれからです。これからの調査の結果で長野のすばらしさがどんどん出てくるものと期待しています。そして又、天竜川と千曲川の違いをそれぞれ資料を持ち寄って同じ長野県の弥生文化を解決していきたいと思っておりますので、これからもよろしくお願いします。

（昭和62年８月９日企画展記念講演会にて収録）

年　報 VOL. 6

—昭和62年4月～昭和63年3月—

発行　平成元年1月30日

編集
発行　長 野 市 立 博 物 館